

第 5 章

学生主体型授業



第5章 学生主体型授業

山形大学エンrollment・マネジメント室
高等教育研究企画センター

酒井 俊典

「学生主体型授業開発共有化FDプロジェクト」
(平成20年度文部科学省「質の高い大学教育推進プログラム」採択プログラム)

プロジェクト概要

山形大学では、これまで実践的FDを中核として、全学共通教育である教養教育の改善を推進し、多くの成果を上げてきた。外部調査機関に依頼した報告の結果、本学の卒業生は、堅実である一方、積極性、コミュニケーション力、行動力等、社会人基礎力が不足していることが指摘された。そこで、汎用性の高い学生主体型授業モデルの開発とその教員間の共有を試みている。授業担当者が自分自身の専門性に合わせて開発した授業を、改良し、実践することを通じて、学生の社会人基礎力を育成することを目指す。本取組は、平成20年度質の高い大学教育推進プログラム採択事業の「学生主体型授業開発共有化FDプロジェクト」である。取組期間は、年度毎に三期に分かれている。平成21年度は、第二期に相当する。

第一期は、調査・研究段階であり、秋田大学、岡山大学、京都外国語大学、三重大学、California State Polytechnic University Pomona 等へ実地調査に赴いた。その知見を取り入れ、パイロット授業の開発へ向け研究した。

第二期は、パイロット授業の開発・共有化段階である。「先端学習ラボ」を使った教養セミナー『未来学へのアプローチ I・II』を前・後期に実践した。

また、DVD「学生主体型授業へのアプローチ」を作成し、学内外で共有化を促進した。

第三期は、全学実施段階として、全学的に教員が学生主体型授業に取り組むことを目指しており、個々の授業の支援は個別支援FDやSAを配置して行うこととしている。

また、前・後期末に、学生による学生主体型授業の『課題発表コンテスト(仮)』を実施し、大学構成員やステークホルダーの間で学生主体型授業の成果を共有し、本取組全体を総合的に評価することとしている。

また、毎年度、自己点検評価と「諮問委員会」による外部評価を行い、見直しを図ることとしている。

本取組で得られた成果は、東日本地域の42の高等教育機関が連携する「FDネットワーク“つばさ”」やシンポジウムの開催等を通して全国に情報を発信し、共有化を図っていく。

○平成21年度実施事業

1. パイロット授業『未来学へのアプローチ I・II』
2. 国内の先進的な授業調査
3. 国外の先進的な授業調査
4. 教養教育ワークショップ第2分科会
「学生主体型授業の創造」
5. 山形大学FDシンポジウム
「学生主体型授業の探究－学生の意欲と主体性を育てる授業を考える－」
6. 諮問委員会

1. パイロット授業『未来学へのアプローチⅠ・Ⅱ』

平成 21 年度は、「学生主体型授業開発共有化FDプロジェクト」の第二期に該当し、昨年度に行われた先進的な学生主体型授業の国内外の調査・研究を踏まえパイロット授業として『未来学へのアプローチⅠ・Ⅱ(教養セミナー)』を開発した。

本授業は、建築学・教育学・化学と専門分野の異なる3名の授業者が、「都市問題・格差問題・環境問題」についてリレー形式で授業を4回ずつ担当した。

理系、文系に限らず、広い学問領域への汎用性を視野に入れ、「グループ学習→発表→全体討論→相互評価」を基本とした授業を展開し、さらに、授業外学習を義務付け、学生の主体的な学習スタイルの確立と単位の実質化を進めた。学生は、毎回グループワークと授業外学習を行うように授業はデザインされた。常に学生は自らの学びの成果をプレゼンテーションし、グループ内外で共有しつつ、授業最後の「学習成果発表会の準備」と「学習成果発表会」を行った。授業は「先端学習ラボ(Leading Learning Laboratory)」という最先端の情報学習機器や可動式の机や椅子が整備された専用の教室で行われた。多様な学習形態や学習分野に応じた学習環境のデザインが可能である。(図1参照)

『未来学へのアプローチⅠ』は前期に、『未来学へのアプローチⅡ』は後期に教養セミナーとして開講された。

シラバスで、学生には、本授業の狙いを以下のように、伝えている。

「本授業では都市問題、格差問題、環境問題というテーマを通して、我々が現在、何を考え、何をを行い、何を後生につたえていくべきかについて学び、我々の今、そして未来を明るく幸せなものにしていくためにできることを考えていきます。本授業は学生皆さんが主体的に学ぶことをねらいとしています。つまり、知識を「教えられて」終わるのではなく、知識を「教えられ」、「自分で掘み取り」、それをもとに「自分で考え」、仲間とともに「意見を交わし」、自分の考えを「深め」、そして考えを「発表すること」を目指します。」

また、先端学習ラボの利用にあたっては、平成 21 年6月 25 日(木)に、学内の教員向けに「先端学習ラボ利用説明会」を開催し、内田洋行から先端学習ラボの ICT 設備の利用可能性に関する説明会を開催した。



図 1:先端学習ラボ利用風景

『未来学へのアプローチⅠ』

『未来学へのアプローチⅠ』は、平成 21 年の前期、4月 17 日(金)から、平成 21 年7月 24 日(金)まで、開講された教養セミナーである。

「都市問題」、「格差問題」、「環境問題」を「未来学」として位置付けて、学生主体型の授業を行うものだ。

建築学・教育学・化学と異なる専門分野を持つ3名の授業者がリレー形式で4回ずつ授業を担当する。15 回のうち、第1回目はオリエンテーション、第 14 回が最終成果発表会の準備、第 15 回が最終成果発表会である。履修学生は 27 名。全員が1年生である。人文学部、地域教育文化学部、理学部、工学部で構成される。

未来の持続可能都市を探る

佐藤慎也教授による都市問題への建築学からのアプローチである。(図2参照)

佐藤慎也教授が担当した。課題は次の2つ。

- (1)未来の持続可能都市を表現する模型を作成すること(800mm×550mm のボード上、スケール 1/1,000)、
- (2)未来の持続可能都市のシナリオをまとめること(Power Point を活用)

学生は、グループでの模型作成を行った。授業の冒頭では、佐藤慎也教授が、未来の持続可能都市の写真や、それを支える思想等を紹介した。それを踏まえて、学生は、「未来の持続可能都市のイメージ」についてピンクの付箋紙、「現代都市のイメージ・課題」をグレーの付箋紙で書き分け、ブレインストーミングを行い、イメージしつつ、コンセプトを立て、模型作りに着手した。(1)持続可能都市の基準作りでは、持続可能都市に「必要なもの」・「必要でないもの」をワークシートに記入し話し合う、(2)役割の設定では、グループリーダーを市長とする、各グループでメンバーの役割が決定された(例:環境委員、建設委員、交通委員 etc.)。授業では、随時、現代都市が抱える問題について、建築学の観点のみならず、その他、歴史的・経済的・文化的・政策的背景、国際的文脈や福祉、環境問題の観点に引きつけた、多角的な視点から解説が加えられた。学生間で模型作りでの基準作り、役割分担、持続可能都市の模型作成において、各グループで何が必要であり、何が必要でないかが話し合われ、グループメンバーの意見をそれぞれ、メ



図2:「未来の持続可能都市を探る」(前期)

もし、コンセプトを立て、どこに何を創るべきか、街創りの下案を描き(ゾーニング)、都市の模型製作を行った。

都市の模型を作るための素材は、佐藤教授が既に、様々な授業や、ワークショップで使われたものをリサイクルしたり、学生が主体的に素材を集めたりと、工夫されている。なお、最終成果発表の成果がこの授業の最後に再び模型製作の結果として反映される。

格差問題をふまえて未来を創る

杉原真晃准教授による格差問題への教育学からのアプローチである。(図3参照)

杉原真晃准教授が教育学の立場から、社会における様々な格差について、「理想の高校教育を創る」をテーマに担当した。LMS(Black Board)に毎回、文献を提示し、授業外で参照することを求めた。取り上げられる文献やテーマも様々な観点から「格差」に焦点を当てたものだ。参考文献も示した。毎回、ジグソー・メソッドによるグループディスカッションを行った。グループを解体し、再構成しながら知見の共有、相互理解の深化を目指した。グループディスカッションでは「1分間プレゼンテーション」で自らの考えを1分間でまとめ、他者に伝えられるように活動が編まれている。最終回には、5つのグループから、これまでのテーマを通じグループワークで深めてきた考えに基づいた、具体的な独自の高校の目標や、背景、教育内容、教育、方法、特徴等が紹介された。質疑応答では、「格差」や「能力」といった問題群と、それに対して育てたい能力は具体的にどう実現できるのか、といった教育の実現可能性についての意見交換が活発に行われた。学生からは、(1)Free Star 学園、(2)太陽学園、(3)夢学館、(4)公立しあわせ未来が待つ学園(5)よし、もっと話すべ高校、が提案された。



図3: 格差問題をふまえて未来を創る(前期)

杉原真晃准教授からは、「具体的な方法は難しいが、社会の解き難き難問に向き合って欲しい。皆さんは精一杯問題解決に取り組んでいたのだから、これに満足せず引き続き学んで行ってくれれば良いかと思う。未来学へのアプローチの最終発表では、模型づくりを行うが、ここでの授業で都市をリ・デザインして行ってくれれば良い」とのまとめがあった。

杉原真晃准教授の授業外学習では、以下の文献講読

が課せられた。文献は考えを深めた意見を教室でプレゼンテーション、交換し、更に深化させるリソースとなっている。

「格差問題をふまえて未来を創る」参照文献

[第1回授業の参照文献]

荻谷剛彦『階層化日本と教育危機—不平等再生産から意欲格差社会へ』有信堂高文社, 2001年

山田昌弘『希望格差社会—「負け組」の絶望感が日本を引き裂く』筑摩書房, 2004年

[その他の参照文献]

橋木俊『格差社会—何が問題なのか』岩波新書, 2006年

小林雅之『進学格差—深刻化する教育費負担』ちくま新書, 2008年

[第2回授業の参照文献]

土井隆義『友だち地獄—「空気を読む」世代のサバイバル』ちくま新書, 2008年(「はじめに」「1章」)

[その他の参照文献]

大平 健『やさしさの精神病理』岩波新書, 1995年

土井健郎・渡部昇一『「いじめ」の構造』PHP 研究所, 2008年

齋藤環『社会的ひきこもり—終わらない思春期—』PHP 新書, 1998年

[第3回授業:参照文献]

本田由紀『多元化する「能力」と日本社会』NTT 出版, 2005年.序章(第3章,第6章)

広井良典『持続可能な福祉社会—「もう一つの日本」の構想』ちくま新書, 2006年.(第3章)

[その他の参照文献]

ウルリヒ・ベック(東 廉、伊藤 美登里 訳)『危険社会』法政大学出版局, 1998年

環境問題を考える

栗山恭直准教授による環境問題への化学からのアプローチである。(図4参照)

栗山恭直准教授が化学の立場から担当した。環境問題を考えるには、イメージや、学生自らの被教育体験など比較的共感しやすく、語りやすいテーマとは、異なる知を扱うスタンスが必要となる。具体的には、「サイエンスの知見」、「データ」、「事実」、「根拠」に基づいてどう判断するか、解釈するか。また、科学的なデータをどう提示するか、立論するかに配慮しつつ、環境問題について考え、ディスカッション、プレゼンテーションをすることが求められた。

学生の興味関心に応じて、グループは、「森林伐採・砂漠化」、「水・ゴミ問題」、「異常気象・ヒートアイランド現象」、「地球温暖化」、「エネルギー問題」にわかれた。この「環境問題を考える」では、学生は、科学的なデータの提示方法等、主にグループワークとプレゼンテーションを通じて思考を深めることが求められてきた。特に、科学的なデータをどのように提示するかによって、例えば同じ「ハワイで観測さ

れた二酸化炭素の濃度グラフ」であっても、グラフでのデータの提示の表し方によっては、「二酸化炭素の濃度が増加している」という印象や「二酸化炭素の濃度はあまり変わらない」という、読み手に異なる解釈を与えたり、与える印象に大きな違いが出てきたりするということが例示された。

更に 1995 年の「所沢のダイオキシン騒動」における、産業廃棄物の量の増加グラフに、新生児の死亡率のプロットをすると、「ダイオキシンの発生と新生児の死亡率との間に因果関係があるという風に印象づけられること」について、様々なデータをグラフに異なる表示でプロットして見せることで、本当にそれらは関係していると言えるのか、を改めて、例示した。その上で、科学的なデータの「グラフでの提示の仕方」によっては、異なる違った解釈がなされる可能性に留意してグループワークを行うようコメントした。

また、本授業でもジグソー・メソッドでのグループワークを採用しているが、あえて、杉原真晃准教授のグループワークと差別化を図り、「他のグループのプレゼンテーションの良いところを模倣すること」、「良い聞き役に徹すること」に力点を置いている。学生間の質疑応答では、環境問題という複合的な題材を扱っていることもあり、「一般的に言われていることを、改めて調べてみると、根本的に何が問題なのか解らないことが、一番厄介な問題と言えるかもしれない」という声も聞かれた。

最終回では、「山形大学 SCITA センター」に場所を移して、実際に実験を行い、体験した。最先端の研究である、「色素増感太陽電池」を作成した。



図4:「環境問題を考える」SCITA センターでの前期授業

総まとめ 学習成果発表会

佐藤慎也教授の課した、2つの課題に対し、杉原真晃准教授「格差問題をふまえて未来を創る」と、栗山恭直准教授の「環境問題を考える」で議論した内容を反映して、未来の格差問題や環境問題に配慮し、コンセプトを再検討し、未来の持続可能都市の模型を再度作りかえていく。未来の持続可能都市について、「Humanity」と「Environment」の2つのキーワードをもとに考えることが求められた。「Humanity」は、杉原真晃准教授の授業で、「格差問題をふまえて未来を創る」の人間のあり方、「Environment」は、栗山恭直准教授「環境問題を考える」

の授業で議論された環境問題について、と接続性が保たれている。これまで受講してきた2軸を指標にして、未来都市が創られ、学生相互で評価が行われる。また、都市を考えることを通じて、『未来学へのアプローチⅠ』で考えたことを主観的評価として求めた。

授業では、まず、各班の市長が発表し、他のグループから質疑応答が行われた。プレゼンテーションの後は、実際に、各グループの模型を周り、出店形式で質疑応答が行われた。最後に市長から、各グループの都市を見た感想が述べられた。他のグループの都市やコンセプトから自らのグループに足りない部分、発想から学んだ点が多かったところを評価するコメントが多く見られた。(図5参照)



図5:総まとめ 学習成果発表会(前期)

・公開授業と検討会

『未来学へのアプローチⅠ』では、毎週、授業は公開され、検討会が開かれた。検討会には、授業者や受講生、山形大学学内の教員、山形大学の事務職員のみならず、学外からの参観者があり、様々な視点から意見を交換している。「先端学習ラボ」の機器を導入している企業からの参観もあり、どのように機器が使われ、学生が何をどのように学んでいるかをフィードバックしている。

・学習成果

「未来学へのアプローチⅠ」では、本学で実施している「授業改善アンケート」とは、別個にアンケートと自由記述の「未来学へのアプローチⅠ 振り返りシート」で、本授業についての満足度の調査を行った。学生の回答結果(27名中、23名回答)を分析した。全体傾向を示した「この授業で良かったことは何ですか?」という質問(複数可能)の結果を表1に示す。自由記述からも、課題等の難易度は高く量は多いが、取り組んで良かったという回答の傾向が見られる。本授業が、認知的負荷は高いが、学習に対する意欲や、やりがい等を喚起する契機になったと推測される。5件法で問うた「普通の教室に比べ、「先端学習ラボ」では、グループ学習(議論・作業等)がしやすいですか?」には、23名中、「とてもそう思う」10名、「ある程度そう思う」10名、「ふつう」3名、「あまりそう思わない」0名、全くそう思わない0名である。また、以下に、自由記述を示す。

表 1:この授業で良かったと思うことは何ですか。

1.クラスやグループの友人の考え方がよくわかった	18
2.発表の準備がよい訓練になった	17
3.口頭発表などプレゼンテーションの仕方が身についた	17
4.グループディスカッションの進め方が身についた	16
5.自分が関心を持つ分野について深い知識を得た	8
6.先生とコミュニケーションがとれた	7
7.論文(レポート)作成法を学んだ	7
8.テキスト読解や調査の技法を学べた	5

※受講学生 27 名:回答数 23 名

自由記述(一部抜粋)

- ・意外と課題が多くて、主体性が無いように感じた。
- ・「未来学へのアプローチ」を受けて、自分なりの考え方を確立させる訓練が出来たのではないかと思う。
- ・全体的には良い授業だったと思います。楽しかったです。
- ・自分で表現するところがあるととてもきたえられたとおもう。
- ・とても貴重な授業だと思います。後期も是非受講したいです。
- ・かなり時間と気力を必要とする授業だったんですが、面白かったし、「人間力」が向上しました。
- ・この授業のために一週間頑張れました。いろんな人の考えにふれられて、楽しかった。
- ・最後のレポートは予想外でした。たくさんの人の考えを吸収することが出来、良い刺激になりました。この授業を受けて本当に良かったです。
- ・この授業で工学部の人と話し合えたことは大いに役立ち、またプレゼン能力を上げることができた。
- ・普段の授業ではないようなディスカッションなどの人とのコミュニケーションが楽しかった。また、グループをつくることで、協調性や他の人の意見を取り入れることができた。
- ・普段の授業と違うことに戸惑いも多かったが、日々、能力がついてくるのが分かった。杉原先生の回はかなり大変だったけど・・・。
- ・課題がきつかったけど、自分で考える場面が多かったのも、良かった。模型作りは楽しかった。都市の授業と環境の授業を重点的に私はやりたかった。
- ・週に一度の課題は個人でパソコンを持っていなかったこともあり難しい部分もあったが、終わった今となっては達成感もあるし、色々、知識や理解も深まった。ディスカッションについては自分の考えが確立していないときがありきつときがあったが、人に触発されたりして面白かった。
- ・とても考えさせられる授業だった。都市・格差・環境の3つのテーマは何の繋がりもないように思えたが、最終的に未来の自分につながるような内容になったので、よかったと思う。
- ・新しい刺激が非常に多く、この授業を受けていなかったら、と思うと寂しい気持ちになります。杉原先生の授業で、様々な人間について考えられたことが、個人的にはとても好きでした。
- ・学生に考えさせる授業でおもしろかった。自分はプレゼン

テーションしなかったのも、もっと積極的にやればよかった。

- ・授業内容は多かったがやりがいがあった。

『未来学へのアプローチⅡ』

『未来学へのアプローチⅡ』平成21年の後期、10月2日(金)から、平成22年2月5日まで開講された教養セミナーである。

前期に引き続き、「都市問題」、「格差問題」、「環境問題」を「未来学」として位置付けて、学生主体型の授業を行った。受講生は13名である。前期から引き続き履修している学生は4名。1年生が9名、2年生1名、3年生1名、4年生2名である。人文学部、地域教育文化学部、工学部、理学部からなる。

前期同様、3名の授業者がリレー形式で4回ずつ授業を担当する。第1回目はオリエンテーション、第14回が最終成果発表会の準備、第15回が最終成果発表会である。

後期は、前期と異なり、リレー形式で展開される授業のテーマが「格差問題」、「環境問題」、「都市問題」の順に変更されている。それに伴い、個々の授業内容もテーマが絞り込まれる等、前期の結果を踏まえた上で、変更されている。

また、佐藤慎也教授と、前期の『未来学へのアプローチⅠ』から引き続きを履修した学生が、前期に作成した持続可能都市の模型を紹介した。後期からの履修者に向けて、前期では、3つのテーマに関する授業を受ける中で、グループ間でアイデアを共有、コンセプトを建てた上で、実際に手を動かしながら、模型作りをしていったというプロセスが冒頭で紹介された。

「格差問題をふまえて未来を創る」

杉原真晃准教授による格差問題への教育学からのアプローチである。

教育学の立場から格差問題とりわけ、「格差の再生産」・「格差拡大」に教育がどう関わるかを4回扱う。

格差を拡大させないため、「理想の高校教育」を考える。杉原真晃准教授は、近代の学校が教育の格差を再生産させるシステムとして意図せざる機能を持つと指摘したピエール・ブルデューの議論、階層の問題等について簡潔に解説した。その上で、近年では、格差は「再生産」だけではなく「格差拡大」に繋がっていく可能性があることに言及し、正解はない、として、以下のテーマを設定し活動を促した。

以下、2点に基づいてそれぞれ、4回を通じて、議論した。

(1)教育目標

(2)その目標を達成するための、教育制度、教育内容、教育方法など

授業のスタイルは、前期と同様、ジグソー・メソッドと1分間プレゼンテーションを組み合わせたグループワークからなる。学生が主体的に「授業外」で、積極的に文献調査等を行い、LMS(Black Board)で議論する授業外学習を勧めている。授業外で、得た知見を教室に持ち寄り共有し、ディス

カッションを通じて、互いに考えを深めていくという授業の形式を取る。テーマは、「階層が生みだす格差拡大を考える～教育には何ができるか～」「産業構造の変化に対応する<新しい能力>を育成する教育を考える」であった。

最終回のプレゼンテーションでは、これまで議論してきたテーマを踏まえて、「理想の高校教育」について、3つの事例が発表された。杉原真晃准教授は、教育学の立場から、「格差問題」とりわけ、「格差の再生産」・「格差拡大」を扱ってきた。最後に、最終回の議論に引きつけ、教育がどう関わるかを具体的な事例から、振り返り、教育の力で社会を変えていこうという「Educationalization(教育化)」の紹介や、教育で社会を変えようというスタンスに落とし穴は無いのか、という点を踏まえ、今後の栗山恭直教授の「環境問題」や佐藤慎也教授の「都市問題」を考えていくようにとまとめがあった(図6参照)。



図6:「格差問題をふまえて未来を創る授業」(後期)

「格差問題をふまえて未来を創る」参照文献

※「1」か「2」のいずれかを読み、自分の考えをパワーポイントにまとめる。

[第1回 階層が生みだす格差拡大を考える]

1. 苅谷剛彦『階層化日本と教育危機—不平等社会から意欲格差社会へ』有信堂高文社,2001年(第8章,210～234頁)

2. 増田ユリヤ『新しい「教育格差」』講談社現代新書,2009年(第1章,11～36頁)

[第2回 産業構造の変化に対応する<新しい能力>を育成する教育を考える]

参照文献

1. 本田由紀『多元化する「能力」と日本社会』NTT出版,2005年(序章(3～38頁))

2. ライシュ,R.『ワーク・オブ・ザ・ネイション』ダイヤモンド社,1991年(第14章(237～254頁))

[第3回 労働と教育について考える～格差拡大に対して教育は何ができるか～]

1. 佐々木賢『労働蔑視と教育重視』『日本社会臨床学会編「教育改革」と労働のいま』(シリーズ「社会臨床の視界

第1巻)現代書館,2008年(第9章,269～325頁)

2. 広井良典『持続可能な福祉社会—もうひとつの日本』の構想』ちくま新書,2006年(第3章,77～108頁)

「環境問題について考える」

栗山恭直教授による環境問題への化学からのアプローチである。(図7参照)

前期では、学生の問題関心に応じてグループを構成したのに対し、後期では、「地球温暖化」とテーマが絞り込まれた。受講生は3つのグループに分かれ、地球温暖化にはどのような要因が関わっているのかを調べ、発表し、それぞれのグループ相互に発表し合いながら最終プレゼンテーションを行うという授業構成に変更されている。授業内では、地球温暖化の事実をインターネットから探し出し、互いに議論し、プレゼンテーションした。付箋紙や先端学習ラボに設置されたICT機器「コラボノート」を利用した。地球温暖化について「どんな科学的データから」「何が説明できるか」「どう調べられるか」について、ブレインストーミングし、5枚のパワーポイントにまとめた。その際には、根拠としての科学的データの提示が求められた。

授業外学習での意見共有には、専用ソフト、「コラボノート」の利用が勧められた。今後の作業は、このソフトウェアを用いることで、自宅からも意見やリサーチした内容、意見を共有することが可能となる。対面で協同学習することもすすめられ、実際にいつ集合するかスケジュールを決めているグループもみられた。

「環境問題を考える」の最終回となる、最終プレゼンテーションでは、3グループが「地球温暖化を肯定する説」、「地球温暖化を否定する説」の両論の根拠となる「科学的なデータ」を提示した上で、今後、地球温暖化問題とどのように取り組んでいくかをプレゼンテーションした。

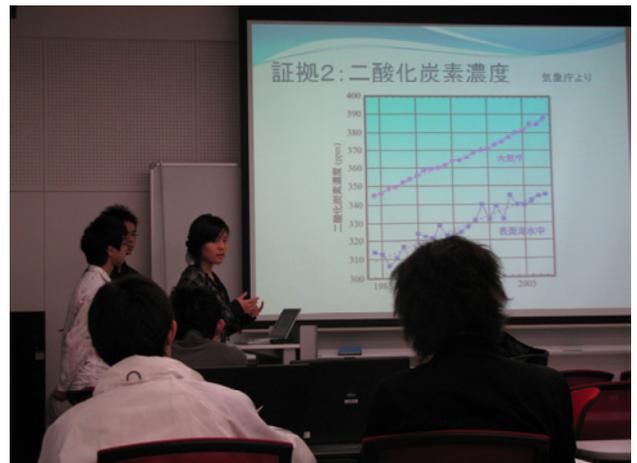


図7:「環境問題について考える」授業(後期)

最終回では、「山形大学 SCITA センター」に場所を移して、実際に実験を行い、体験した。最先端の研究である、「色素増感太陽電池」を作成した。色素増感太陽電池の最先端の研究の様々な事例が取り上げられた。また、ぶどう糖などの燃料電池も数々、紹介された。

近年では、遺伝子工学の観点から、水素を発生させるよう遺伝子改良による生物(藻や微生物)から、水素を集める燃料の研究がアメリカなどで行われている。後期は、特に、水素を排出する注目される新しいトピックスとして「藻」が大きく取り上げられた。「次世代のバイオ燃料最前線」というニュースのVTRを観賞した。ここでは、所謂「グリーン・クルード・オイル」という「藻」から特別な方法で、生成された「緑の原油」とでも言うべき次世代のバイオ燃料を巡る研究やそれを巡る政治や経済最前線が紹介された。

栗山恭直教授は、この新たなバイオ燃料の課題や日本での研究の取り組みに触れ、この「藻」を使った燃料や発電の方法などから、次世代のエネルギー発電が、佐藤慎也教授の「未来の持続都市作り」にどう位置付けられるかを考えて欲しいと授業を結んだ。

「未来の都市を考える」

佐藤慎也教授による都市問題への建築学からのアプローチ(図8参照)。

前期と同様、未来の都市の模型を作っていく。後期では、前期と大きく異なる点が2つある。

- (1)グループ毎ではなく、受講生全員で一つのエリア、街を創っていく。
- (2)街創りのフレームワークとして、次のようなストーリーが設定されている。
 - ・何もないエリア
 - ・今から50年後
 - ・島にPuriumという何でもきれいにしてしまう水が発見される。
 - ・やがてちいさな水のために工場が造られ、その水を求めて多くの人たちがやってくることになる。
 - ・100年後にどのような街が出来ているか考えてみよう。



図8:「未来の都市を考える」授業(後期)

佐藤慎也教授からは、Hands Onによる思考や、アルビン・トフラーやアラン・ケイについての紹介が随時あり、手を動かしながら、ものを作りながら、未来を推測しながら思考していくことの意味や意義について解説があった。

佐藤慎也教授から「50年後の未来を考える」、「100年後

の未来に向けた物語の創造」、「100年後の都市の創造」、「100年後の自然災害と都市の復興」、都市の持続性について」など、毎回テーマが設定された。また、この授業では、受講生の中から1名の学生が「市長」として選出されている。また、未来の都市をより具体的に実現するための更に詳細なストーリー作成の担当者を受講生からコンペティション形式で求め、都市のイメージを共有し、摺り合わせることで、受講生全員で未来の都市の模型を作っていくことが目指された。

どのような手続きや順序で街創りをやっていくのか等について、お互いに意見を闊達に交換し、街創りの作業方針と、街の完成イメージをめぐる議論が幾度も繰り返された。市長との合議から作業方針が提案され、多数決が重ねられ、街創りの手続きや方針が模索されていった。従って、授業によっては、「今後、どのように街創りを進めていくか」についての、作業方針と街の完成イメージを摺り合わせる為の議論に多くの時間が割かれた場合もある。

また、授業検討会へ参加した学生からのフィードバックも多く見られた。市長との合議から、学生が主体的に議論の場を設けたり、グループ編成を考えたり、授業の時間配分を考えていったことも特徴的であると言える。例えば、storyなど、未来の要素等の整合性を考える調査班2名、実際に模型を作っていく作業班7名と、それぞれを監督する役割を果たす市長というように役割分担が振られた。お互いに声を掛け合いながら、意見を出し合いながら、イメージを摺り合わせながら街創りが進められていった。

・総まとめ 学習成果発表会

最終成果発表会では、佐藤慎也教授から、プレゼンテーションの方法、相互評価のワークシート記入方法について説明があった。その後、「ファイナルプレゼンテーションについて」1人ずつ以下の2点で、受講生11名がプレゼンテーションを行った。

- (1)完成模型プレゼンテーション各自の行ったこと、考えたことなどについてプレゼンテーション
- (2)未来学へのアプローチⅡを通して学んだこと

先端学習ラボ中央のプロジェクターには、ビデオカメラで模型が上映、表示され、側面のプロジェクターにパワーポイントでプレゼンテーション内容を表示しながら質疑応答3分、まとめて5分程度の持ち時間で発表は行われた。

各自、手元には発表者(受講生全員)の氏名と「良かった点」「改善/疑問点」を書き込むワークシートが配布されている。学生はプレゼンテーションを聴きながらワークシートに書き込み、各人の発表に対して、意見交換や質疑応答を行った。街創りそのものについてとともに、自らがどのような学習を行ってきたかの思考の軌跡を辿ることで、メタ的に自らの学習のあり方を振り返る発表が多く見られた。

・公開授業と検討会

後期の特徴として、授業後の検討会に参加する受講生が多かったことが挙げられる。ときには、受講学生の半数近

くが参加することもあった。授業時間内で、学生のみで完結するのではなく、検討会で、教員、事務職員や学内外の参観者とディスカッションをしながら、そこで交換された知見を、次週の授業のグループワークへフィードバックしていくという循環が生じていた。これは前期に比して、顕著に見られた傾向である。学生にとっても検討会に参加しながら、「未来の都市を考える」では、授業の進行についても学生が作業内容やディスカッションと作業の時間配分を決定していった。(図9参照)



図：9授業検討会の様子(後期)

・学習成果

「未来学へのアプローチⅡ」でも、本学で実施している「授業改善アンケート」とは、別個にアンケートと自由記述の「未来学へのアプローチⅡ 振り返りシート」で、本授業についての満足度の調査を行った。学生の回答結果(13名中、11名回答)を分析した。全体傾向を示した「この授業で良かったことは何ですか?」という質問(複数可能)の結果を表2に示す。5件法で問うた「普通の教室に比べ、「先端学習ラボ」では、グループ学習(議論・作業等)がしやすいですか?」には、11名中、「とてもそう思う」6名、「ある程度そう思う」4名、「ふつう」1名、「あまりそう思わない」0名、全くそう思わない0名である。

また、授業検討会への参加者数が高いことも後期の特徴である。前期から後期へと移行するにつれて、次第に、リーダーシップを発揮する学生が現れ、また、それに呼応する形で参加する学生が現れ、次第に授業検討会の内容も踏まえて、教師とディスカッションしながら、自らがディスカッションや授業の進行に関わっていく姿勢を示すようになってきていったと考えられる。

前期に比べると、受講学生が13名とおおよそ半数になっている。その為、人数は減少しているが、少人数であることが活かされた深い議論が展開されたと推察される。また、授業におけるコミュニケーションのパターンも、学生同士のグループ間での議論が多く見られた前期に比べ、「教師-グループ間」や「教師-受講生(個人)」のやり取りが数多く見られた。前期の受講学生が、牽引役として果たしている役割は小さくない。しかし、後期から、初めて『未来学へのアプローチⅡ』を履修した学生も対等に議論をしていったこ

表2:この授業で良かったと思うことは何ですか。

1.クラスやグループの友人の考え方がよくわかった	9
2.発表の準備がよい訓練になった	9
3.口頭発表などプレゼンテーションの仕方が身についた	9
4.グループディスカッションの進め方が身についた	6
5.自分が関心を持つ分野について深い知識を得た	3
6.先生とコミュニケーションがとれた	5
7.論文(レポート)作成法を学んだ	0
8.テキスト読解や調査の技法を学べた	1

※受講学生 13名:回答数 11名

とが最終成果発表から伺える。バランスを取り合い、お互いに議論を深め合っていた。前期から履修している学生よりも後期から履修している学生が多いこともバランス良く機能したと推測される。また、『未来学へのアプローチⅡ』では、学年としての先輩後輩関係と、『未来学へのアプローチⅠ』の履修経験の有無や先輩後輩関係が存在し、議論を深める一要因となっていると考えられる。例えば、上級生が、既に学んでいる、統計データや科学的データの処理の方法によって、科学的データの客観性を信奉することに疑義を唱えたり、前期履修者が前期の授業を踏まえて、グループワークやディスカッションに活かせなかった意見を後期の授業に反映したりする学生が見られ、特に少人数であることもあり、議論に深みを与えることとなった。4名の前期履修者ともに異なる議論の深まりがあったこと、履修者との考え方や意見の相違に言及している。以下に、学生の自由記述を示す。

自由記述(一部抜粋)

- ・ある程度人前で話せるようになって良かった。もっと楽しめるようになれると良かった。人の意見を聞いていて、自分のものと違ったときすぐ不安になるのはマズかった。
- ・結局、大学生活の良い思い出になった。楽しかった。
- ・自分は元々発表が苦手では無かったが、今回の授業はそれをさらに向上するという意味で非常に有意義なものになったと思う。
- ・このような形の授業は、まさにコミュニケーション能力を育成するのに適切だと思った。広く行われれば良いが、あまり人数が多いと形にならないと思う。
- ・とても良い授業だと思います。来年以降の発展を願っています。
- ・大学に入ってから、ここまで定期的・反復的にディスカッションとか、発表共同作業を行ったのは初めてだったので、「大学に集う人々の中での自分」という立場を認識できたのは良かった。また、同じメンバー+αで何かをしていきたいと切に願っている。
- ・前期に比べて人数が少なかった分だけ、1人1人の考え方を十分に吟味しながら、話し合いをし、問題解決に向けて取り組めたと思う。「未来学へのアプローチ」は、本当に学ぶべきことが多かった授業でした。
- ・人の話を聴くことの大切さをより理解できました。この授業

の発展版を受けてみたいです。

- ・とても面白い授業で、自分のためになることを吸収できたと思う。
- ・とても勉強になりました。
- ・とても面白い講義だと思うので、もっと多くの学生に知ってもらうためにアナウンスしても良いのでは？と思いました。半年間で世話になりました。
- ・とても興味深い内容ばかりの授業だったが、その分、時間が足りない。

山形大学 学生主体型授業開発共有化 FD プロジェクト
<http://www.yamagata-u.ac.jp/gakumu/kyouiku/>

2. 国内の先進的な授業調査

北海道大学 鈴木誠 教授「蛙学への招待」 (平成 21 年 7 月 23 日)

昨年度に引き続き、学生主体型授業の先進事例調査として、長崎大学(日本高等教育学会)、首都大学東京(大学教育学会)、広島大学(全国大学教育研究センター等協議会)、岩手大学(東北・北海道地区一般教育研究会)等を訪れたが、ここでは、北海道大学の鈴木誠教授の事例を取り上げる。調査グループは、小田隆治、杉原真晃、酒井俊典、川田正之、佐藤千恵の5名。

まず、一般教養科目の「一般教育演習」である本授業、「蛙学への招待」について、鈴木誠教授よりコンセプトや位置付け、前期の授業の概要についてレクチャーがあった。

その後、学生が授業の成果を発表する会場に移動した。調査に赴いた日に発表が該当していたのはグループ B である。グループ B は、1年生農学部・水産学部・理学部・薬学部・獣医学部・法学部の6名から構成され「『カエルできたえる問題解決能力』学ぶって楽しい!」という授業を前期に作ってきた。これは実際に札幌市内の小中学校で実践されたものであり、その授業による学習成果の測定も試みている。授業デザインに際しては、現場の先生に質問をしたり、とリサーチをしたりと、様々な工夫が試みられている。

特に小学生児童の蛙に対する理解の変化を児童が描く「蛙の絵の変化」からの把握を試みていた。また、発表会では、参加者に、学生の作った授業を評価するための、5段階評定の、「Judge Paper」が渡される。以下の、12 の評価項目と自由記述欄が設けられている。

- 1) 授業作成の動機がしっかり示されていた。
- 2) テーマに対して授業内容は適切であった。
- 3) 学術的に高度な内容であった。
- 4) 科学的事実に基づいて展開されていた。
- 5) 知的に刺激される授業であった。
- 6) 独創性や創造性に富んだ内容であった。
- 7) 授業の内容はわかりやすかった。
- 8) 班全員がほぼ等しく授業者として参加していた。

- 9) 聴衆(聞き手)を授業の中に十分生かしていた。
- 10) 授業方法に様々な工夫がしてあった
- 11) 配付資料は後から見ても利用できる内容であった。
- 12) もう一度聞きたい授業である。

質問項目、9)に代表されるように、先輩や OB や他の学生から、本来であれば、教員がすると想定される概念理解についての正否や、授業の学習結果分析の評価の妥当性について質問や指摘が数多くあった。グループ B の足りない点を補完すると共に、フォローを行っていた。この質疑応答をする際のメンバーの層の厚みや質の高さが、本授業における受講生の意欲や、学習や成長を左右すると考えられる。今後は、発表者であったグループ B が9)「良き聴衆(聞き手)」となることが期待されていると考えられる。

また、北海道大学の研究大学としての側面が徹底されており、ここで交わされている質疑の前提は優れた研究者を輩出することである。

本授業が、研究者養成を明確に打ち出していること、それに貢献することを目指す授業を目的とした質疑応答であることは特徴である。白熱した議論、それは、鈴木誠教授の教育困難校での指導経験を踏まえた、細やかな学生とのコミュニケーションによる信頼関係の上に成り立っている。

3. 国外の先進的な授業調査

杉原真晃

平成 21 年度の海外先進大学等調査は、タリン大学(エストニア)、ヘルシンキ大学(フィンランド)、そして、オーボ・アカデミー(フィンランド)であった。タリン大学、ヘルシンキ大学、オーボ・アカデミーともに、山形大学、山形大学高等教育研究企画センターと交流の歴史がある大学であり、快く快諾してくださった。

タリン大学 : Educational Studies Department の Katrin Poom-Valickis 氏および Inge Timoshtshuk 氏の話の伺うとともに、2つの学生主体型授業を参観した。1つは幼児教育(音楽)の授業、もう1つは教育哲学の授業であった。それぞれの授業を参観した後、授業者とカンファレンスを行った。幼児教育(音楽)の授業は、テキストと楽器を用いて実技を交えながら進める授業であった。学生8人という少人数での授業ということもあり、教員と学生、学生同士の双方向性が充実した授業であった。教育哲学の授業では、学生が5~6人で1グループを形成し、授業案を考え、発表・質疑応答するという授業であった。移動可能な机・椅子、別室を活用してのグループワーク、模造紙等、学生が主体的に学習をすすめる環境が整備されていた。

ヘルシンキ大学 : Centre for Research and Development of Higher Education の Sari Lindblom-Ylännne 氏の話の伺うとともに、同氏の授業を参観した。教育哲学の授業であり、

60名ほどの学生が出席していた。固定式の座席・講義中心の授業であったが、教員と学生との意見交換、学生同士のペアワーク等が組み入れられており、講義型でも学生主体型授業の可能性を大いに感じるものであった。横に広い教室であり、教員と学生の距離をあまり感じさせない環境であったことも、学生が主体的に学習することを支援していたと考えられる。

オーボ・アカデミー：Paula Lindroos氏を訪れ、ユネスコのフィンランド支部が主催するカンファレンス「Halfway through the UN-Decade for Education for Sustainable Development: Lessons learned and missions to follow in higher education」への参加と、Learning Center ディレクターであるTove Forslund氏とのディスカッションを行った。

カンファレンスではESD (Education for Sustainable Development) 実践事例の紹介があった。学生を活動的(activate)にするためのフィールドワークとそれをサポートするテキストやガイドブック、映像コンテンツ、ウェブサイト等が紹介された。映像は、5～7分ほどの短いものであり、学習の入口として位置付けているようであるが、たしかに視聴した学生は自分たちがこれから考えていくテーマに対して、大きくモチベートされるであろうと感じた。

Tove Forslund氏とのディスカッションでは、オーボ・アカデミーのラーニングセンターが行っている教育開発、教員研修、学習環境整備等の話を聞いた。教育開発については、教育プロジェクトを立ち上げ、パイロット実践を実施している他、学内の5つの学部、あるいは教員個々から提案された教育開発プロジェクトに対して財政的支援を行っている。

教員研修については、多様な形式を持っている。たとえば、ITを授業に活用するためのサポート、教授法ガイドブックやウェブサイトの作成、授業に活用できるソフトウェアの提供等である。また、オーボ・アカデミーの教育学部がアレンジする「大学教授法」、「ネットワークにおける学習」等の授業を受講したり、ティーチング・ポートフォリオを作成するショートプログラムを受講したり、ランチセミナーに参加したり、国内のカンファレンスやセミナーへ参加したり、公開授業と検討会を行ったりする方法も採用しているとのことであった。

以上、3大学の訪問調査について紹介した。すべての調査を終えての感想は、われわれの目指す学生主体型授業と信念・方法ともに共通するものであるということであった。学生の学習意欲の低さ、受動的な学習態度、コミュニケーション、プレゼンテーション、知識の能動的な運用等の社会的ニーズ、等、大学生に関する課題や大学教育が目指す方向性は万国共通であるということである。そのために、学生との双方向性を授業に当然のように組み入れていること、学生同士のグループワークを促進するために、パワーポイント、模造紙、移動可能な机・椅子、オンラインシステム等を巧みに活用していること等、われわれにとって、大きな参考となった。

最後に、このたびの海外調査(特にタリン大学、ヘルシンキ大学)に関して、現地のスタッフとの交渉、会場準備等、ご協力くださったタリン大学大学院生のMaret Nukke氏には、大変お世話になった。この場を借りて、心より感謝申し上げます。

4. 教養教育ワークショップ 第2分科会:

『学生主体型授業の創造』(平成21年8月7日)

平成21年度山形大学教員研修会「第11回教養教育ワークショップ」の第2分科会において『学生主体型授業の創造』と題して、学外から2名のパネリストの先生方をお招きし、「学生主体型授業」について事例紹介とパネルディスカッションを行った。

コーディネーター 酒井 俊典 助教

パネリスト

立命館大学 八重樫 文 准教授

「プロジェクト学習を支援する概念とツール「再考」

ーデザイン系教育実践が育む<主体性>とは何か」

三重大学 森尾 吉成 准教授

「90分間学生に動きつづけることを期待する授業づくり

森尾の流儀」

山形大学 佐藤 慎也 教授、栗山 恭直 准教授、

酒井 俊典 助教

「学生主体型授業の共同開発

ー建築学・教育学・化学ー」

*詳細は、第1章 山形大学教員研修会「第11回教養教育ワークショップ」参照

5. 山形大学FDシンポジウム

「学生主体型授業の探究」

—学生の意欲と主体性を育てる授業を考える—

平成21年12月12日(土)山形大学小白川キャンパス教養教育1号館教養養育127番教室にて「山形大学FDシンポジウム 学生主体型授業の探究—学生の意欲と主体性を育てる授業を考える—」を開催した。

シンポジウムには、北は北海道から南は九州まで、全国各地の高等教育機関等から、48大学91名の大学関係者の参加があり、活発な議論が展開された。主催は、山形大学高等教育研究企画センター、共催は、FDネットワーク“つばさ”である。

第1部の講演では、4つの大学から学生主体型授業の事例発表(各講演25分)が行われた。

第2部では、「学生主体型授業の成果と課題」と題して、第1部での事例発表を踏まえて、林義樹教授、鈴木誠教授、森尾吉成准教授、杉原真晃准教授による、パネルディスカッションが行われ、発表された事例をもとに「学生主体型授業」について議論を深めた。

閉会后、第3部(オプション)として、「あつとおどろく大学授業NG集」を上映し、その後、山形大学で実際に行われた学生主体型授業「未来学へのアプローチ」の舞台となる「先端学習ラボ」の見学が行われた。

日 程

13:30 開会

あいさつ 結城章夫学長

13:40 【第1部】講演(事例発表)

(1)日本教育大学院大学 林 義樹 教授

「大学院における学生参画授業—ラベワークを活用して—」

(2)北海道大学 鈴木 誠 教授

「意欲を引き出す授業デザイン—蛙学への招待とは何か—」

(3)三重大学 森尾 吉成 准教授

「15回愛情いっぱい刺激を与え続けるための授業作り 森尾DNAとは」

(4)山形大学 杉原 真晃 准教授

「教養としての判断力・知識欲を育成する
—パイロット授業「未来学へのアプローチ」—」

15:50 【第2部】パネルディスカッション

「学生主体型授業の成果と課題」

司 会:小田隆治(山形大学)

パネリスト:林 義樹 教授(日本教育大学院大学)

鈴木 誠 教授(北海道大学)

森尾 吉成 准教授(三重大学)

杉原 真晃 准教授(山形大学)

17:30 【第3部】

山形大学 先端学習ラボ見学ツアー



第1部:講演



第2部:パネルディスカッション



第3部:先端学習ラボ見学

開会



○司会(小田) 皆さん、こんにちは。

では、時間となりましたので、山形大学FDシンポジウム「学生主体型授業の探求」を開催したいと思います。北は北海道から南は九州まで、そして高知からもたくさんの方がいらっしやって、感謝申し上げます。今回の主催は山形大学高等教育研究企画センターであり、また共催として、東日本の41大学・短大・高専からなりますFDネットワーク“つばさ”が行っております。

では、早速ですが、主催者側を代表しまして、結城章夫山形大学長からあいさつを。



○結城学長 皆さん、こんにちは。山形大学の学長の結城でございます。

きょうは山形大学のFDシンポジウムに、全国各地からこのように大勢の方に来て頂きまして、心より歓迎を申し上げます。

FDは、すべての高等教育機関にとって共通の課題になっております。研究などのお互いに競い合うようなことではなくて、それぞれの知恵と経験を持ち寄って、お互いが学び合うということが大変に有効なことであると思っています。

山形大学では、まず山形県内のFDネットワーク事業というものをやりまして、その実績を踏まえまして、北海道から東北、関東までの東日本を対象に、FDネットワークの“つばさ”というのを、羽根を広げてきたわけでありまして。

本日は、更にその“つばさ”の範囲を越えて、九州、四国から本当に多くの方が来ていただいていると聞いております。ネットワークの幅が更に広がっていくと本当に嬉しいことだと思っています。

きょうは、この学生主体型授業ということをテーマに、よりよい授業づくりのために、いろんな事例報告、さらにはシンポジウム、そして意見交換が行われると聞いております。きょう一日、皆様にとりましていいシンポジウム、いい会合になることを期待いたしまして、私の開会のごあいさつにさせていただきます。

きょうは本当によろしくお願いたします。

○司会 どうもありがとうございました。

それでは引き続き、全体の説明をしたいと思います。

まず、第1部の講演、4人の先生方にやっていただきますけれども、質疑応答を含めて1人の先生方30分という形にしております。

それから、10分間休憩をとりますけれども、このときに皆様の封筒の中に入れてあります質問用紙をこちら側で受け取りますので、書いていただければと思います。そして、15時50分からその質問用紙に答える形でパネルディスカッションが進んでいき、おそらく質問が多いと思いますので、パネルディスカッションの時間は大体質問に答える形になると思います。

そして第3部として、先端学習ラボの見学ツアーとありますけれども、部屋の移動をさせていただきました。これほど参加者が多くなったので、場所を、こちらに移動させていただきました。それに伴いまして、「あっと驚く大学授業NG集」のビデオは、1度閉会させていただいた後にここで上映しますので、ご覧になる方はここでご覧になってください。

それから場所を移動しまして、先端学習ラボの見学、それから情報交換会へと移らせていただきたいと思います。そのように御理解ください。

では、早速第1部講演会の事例発表という形にさせていただきます。

まず日本教育大学院大学の林義樹先生を初めとして、大学院生の皆様でございます。林義樹先生は、日本教育大学院大学の学校教育学研究科の教授でいらっしやいます。また、日本創造学会の第9代の理事長であられ、大学授業における学生参画授業の実践的な研究開発を30年以上なされ、まさにその分野の第一人者であります。幅広い分野で独自に構築された参画理論、ラベルワークと方法・技術を応用、展開されております。皆さんでいろいろお話し聞きたいと思います。よろしくお願いたします。

【第1部】講演

「大学院における学生参画授業 -ラベルワークを活用して-」

日本教育大学院大学 林義樹教授

丸山智史・佐々木美沙・小山裕美(同院生)



○丸山 はじめまして、こんにちは。私は日本教育大学院大学に在学しています、丸山と申します。

私が在学している日本教育大学院大学、こちらお手持ちのパンフレットの方、御配付していますので、よろしければごらんください。

こちらの日本教育大学院大学は、プロフェッショナルな教師を育成するために、日本初の教師育成専門職大学院として開校されました。今回、発表させていただきますのは、日本教育大学院大学の林先生の授業の教育の方法の研究を受講している者と、林先生のゼミ生で構成されていますので、よろしくお願ひいたします。

まず、なぜ私たちがこの場をお借りして話をさせていただいているかと申しますと、後期の授業が始まってすぐに、林先生の方から今回のFDシンポジウムのお話を聞き、ぜひやってみないかとお話をいただきましたので、林先生と御一緒にやらせていただくことになりました。その授業では、教育の方法として参画を柱とした授業の仕方について学んでいます。その中心になるのが、ラベルという3枚つづりのつづりになります。皆さんには、先に配付している方もいらっしゃると思うのですが、こちらの黄色い紙の方ですね。持っていない方はいらっしゃるでしょうか。こちら、よろしければ挙手をさせていただいて、今すぐ配らせていただきたいと思うのですが。

同時に、こうして少しそのラベルというのですが、その紙について話をさせていただきたいと思ひます。

まず、一番上が黄色になっています。2枚目がピンク、3枚目に白色のシール状になっているものですね。このラベルには自由に書き込むことができますのですが、例えば授業の感想であったり、意見などを書いたり、さまざまな方法を使いながらその周りにいる全員と共有することができます。基本的にそのラベルには、30から50文字で書き込みます。よろしければ、今回私たちの話を聞いた後に、感想、意見などを書いていただいて、名前とあと御所属の方ですね、よろしければ御連絡先の方も書いていただくと、こちらいろいろ成長につながりますので、よろしくお願ひいたします。

書いていただいたものを、黄色と白色の紙を私たちが回収しまして、黄色の方は私たちがその後の発展につなげさせていただきます、白色のシール状の方は、山形大学様の方に提出しますので。ピンク色の方は、よろしければ御記念にお持ち帰りください。

では、これから皆さんには授業の中で、私たちがどのように取り組みを行って、どのように進化してきたのかについて紹介します。

皆さんにお配りしている資料の1ページ目をご覧ください。その中に、クラスワーク企画用紙と書かれているものをご覧ください。そこには、今回の話をしていく構成が書かれています。御参考までにごらんください。また、配付資料と今回使用しているパワーポイントと、スクリーンに映されているパワーポイントには一部変わることがございますが御了承ください。

ここからは、実際にいつも私たちが行っている授業形式に近いものを用いながら、参画とはということを振り返りつつ、そこからどのようにしていくかという話をしていきたいと思ひます。実際、私も授業形式に参加いたしますが、できる限りわかりやすくするために、途中ごとに中断して解説役にも回ります。

では、これから皆さんにラベルの世界へ御招待いたします。

○小山 ここからふだんの授業どおりにやらせていただきます。本日、司会の小山です、よろしくお願ひします。

きょうはこのとおり、たくさんのゲストの方にお越しいただきまして、私個人的なことですが、大勢の先生方の目がこちらに向いていま

すと、高校時代の生徒指導室の苦い思い出がよみがえりまして、激しく動揺しておりますが、おつき合ひください。

さて、授業も12月で大詰めとなってきましたので、皆さんこの授業の柱である参画について、再確認しておきたいと思ひませんか。

○日本教育大学院大学大学院生 はい。

○小山 なので、お手数ですが先生、もう一度参画について御教授いただけますでしょうか。

○林 持ち時間はどれぐらい。

○小山 2から3でお願いします。

○林 2から3、すごいね。それじゃあ、もう一応いろいろ話しているので、復習のようなつもりでちよつと説明させていただきます。

参画の考え方というのは、学習者は参加に三つの段階があるという考え方に、実践を通してたどり着いたというのが大きな状況です。その主体性の高まりが、質的な段階を経て高まっていくのだという考え方は、それに言葉をちよつと当てまして、参集、参与、参画。参与がちよつと舌をかみそうですが、使いなれると3段階わかりやすくなると思うのです。

参集段階というのは、従来のその場に居合っただけ、授業といえば講義形式でその場に居合っさせて、ちゃんとまじめな人はそれを記録して書いてきて覚えるという、こういうスタイルですね。加えて、最近は、いわゆる参加型と言われるのは、あるいは参加発動型と言われるのは参与型で、先生方が準備された、そういうところにかかわり合っ、そして学生同士もかかわりながら学んでいくという、そういうスタイルなわけです。参画スタイルは、さらにその先に、さらに開かれた協働で学んでいくという、そういうスタイルなのです。要するに自分たちで企画し、運営し、実行し、さらに今回こういうふうにごこまで来ましたが、実は伝承していく、広げていくという、そこまでやってみて初めて学びから完成するという、そういうことで最後は担い合うという、そういう段階を設けたところが一つのみです。

振り返ってみると、前期はわけもわからず、とりあえず林の授業を受けてみた。そこから段々参与していった、仲間とかかわるということをやりましたね、小山君。

○小山 はい。

○林 いろいろみんな、個人新聞とか何かをつくったり、ラベルになれたり、これもお互いを理解し合うためのツールなわけですね。前期に、とにかく君たちに後期はお任せするよという形で参画段階に入って、自分たちでこういうことを勉強したいということで、場づくり法を勉強したいということなので、それを結局報告することになると思うのですが、そして、ここまで来たというのは、そういう参画段階に来て、自分たちの学んだことを、さらに社会的に投げかけてみたいという意味合いでここへ来たというふうな位置づけになっておりますけれど、いいでしょうか。

○小山 はい。

○林 じゃあよろしく。

○小山 先生、ありがとうございました。皆さん、初心に返れたと思えます。

ここで、前期と後期どのような活動してきたかを、年が明けの前に確認しておきましょう。ということで、前期は司会の僕から説明いたします。

まず、自己紹介を兼ねて自分史新聞の発表をしたのを覚えているでしょうか。振り返りますが、自分史とは自分自身の生い立ちから、現在に至るまでのプロセスをまとめたものです。お互いを知り、興味を持つことは参画の第一歩となります。その後、授業新聞やラベル新聞の作成に奮闘することになりました。

会場の皆様のお手元にも資料をお配りしてはいますが、新聞の詳細説明は後ほどさせていただきます。そして、授業で時間をかけて、個々の力を蓄え、夏前には小グループの立ち上げを行い、グループワークを行いました。そして、最終的には一人一人ポートフォリオを作成して前期は終了となりました。前期の一連の流れを御説明いたしましたが、ここからはポイントを絞って単語の説明をさせていただきます。

まず、今回の一番のテーマであります参画について、学生の解釈から御説明させていただきます。

参画とは、字のごとく参加し、企画する。つまり、学校現場に当てはめるなら、一般的な授業のイメージとされる講義形式ではなく、生徒も積極的に授業運営に参加し、教員と生徒が一体となって授業をするということだと解釈しております。

ここから新聞の説明をさせていただきますので、お手元のこちらをごらんください。本物の新聞のような授業新聞なのですが、これは授業に提出する際に学生がつくったものです。本物のようですが、こちらの授業新聞ですが、授業新聞は記録としての機能だけしか果たさないものではなくて、新聞を共有することにより、受講者全員が前回の内容を確認することができるものです。改めて確認作業を行うことにより、学びの土台を固めることにもつながります。

こちら、裏面をごらんください。「方研は山形プロジェクトを全力で応援しています！」。箱根駅伝のような、このプロジェクトにかける新聞を授業で提出してくれた方がいました。

次ですが、ラベル新聞の説明をさせていただきます。こちら、今度牛が書いてある、山形牛をイメージした新聞をごらんください。こちらは授業中に書いたラベルを新聞担当者に渡し、担当者がラベルを10枚前後選別し、授業を通して何を感じ、何を学んだかを1枚の新聞に仕上げます。言い方を変えるならば、真っ白いキャンパスの上にラベルという色鮮やかな絵の具を載せるだけで、無理な編集などはせずとも立派な作品として完成していくものです。

そして、最後夏前に行いました小グループの立ち上げ方ですが、参集、参与で力を蓄えた後、参画的な小グループの立ち上げを行います。まず、テーマを決定します。その後、各自やりたいテーマごとにグループを編成し、その中で役割を決めます。なお、役割は全員が何かしら担当いたします。ここでのポイントは、全員が参画的に活動することです。全員が参画に携わるために役割を与えて

おります。

以上が前期の授業において、私たちが参画に至るまで歩んだ道のりとなっております。

続きましては、後期の授業において、私たちが参画を自分のものとし、後輩に伝承し得るまでの力を蓄積するためにどのような行動をしてきたか、リーダーの丸山君に説明してもらいたいと思いますので、丸山君にチェンジいたします。

○丸山 では、ここから後期に入っていくわけなのですが、後期から私がリーダーになって進めていくことになったわけです。それを含めて解説、話をしていきます。

前期と違うことは、1回ごとの授業が、学生が構成していくところです。もちろん、林先生にもさまざまな助言をいただきましたが、基本的には学生が主体でした。では、どのように進めてきたのか、内容に入りたいと思います。

後期ではリーダー、ここで言う私と、司会という役割が追加されました。リーダーは後期の約半年間の授業計画を考え、講義中も司会と一緒に助け合いながらみんなを引っ張ります。司会者はローテーションで毎回変わり、1回の講義の内容を考え、企画書を作成しました。できたものをリーダーと私、あと林先生の確認を得て実際の講義進行役、ここで言う小山君に司会者として進めていきます。

では実際、後期はどのような授業を進めてきたのか簡単に説明していきます。後期の授業で、後期が始まってから現在まで行ってきたことを、このスクリーンに映し出されていることなのですが、ここに書いてあるとおり、1回目から3回目まで授業で何をやっていくかという内容について話をしたわけなのですが、後期の初めはなかなか具体的な内容は決まらず、話が進まないのが現状でした。しかし、少しずつみんなの意識がそこから変化して、発言がふえて、雰囲気も和やかになりながら、場づくり法について学ぶことが決定しました。その中でも図解をつくることにまとまったわけです。

ほかにも、授業内で今回のFDシンポジウムに参加するかどうだったか、後は意見を求めたり、進行状況について報告をしながら、共有して何か疑問だったり意見などを受けて今に至ることができるようになりました。

簡単になりましたが、後期が始まってから現在に至るまでの内容は以上になります。

○小山 リーダー、ありがとうございました。

皆さん、後期の内容、もう一度振り返って、頭の中が整理できたとは思いますが、ここできょうの授業の内容に入っていきたいと思えます。もうすぐクリスマスで、気分がウキウキしている方もいますし、彼女がいらないのに予定ないと思われるのが悔しくて24日バイトをあけている人もいますかと思いますが、佐々木さんから場づくり法の持ち込み企画というすてきなクリスマスプレゼントがございます。

○佐々木 ゲストの皆さん、こんにちは。

きょうはゲストの方々が、いつもより何十倍もいらっしゃるので緊張しているのですが、私からちょっと皆さんに、場づくり法について提案させていただきたいなと思えます。パワーポイントをご

らんください。

場づくり法って何かというと、まずお互いの意識が共有できる場をつくり出す、そういった方法になります。この場というところには、私たちのようにさまざまなフィールドを持った人、また異なるバックボーンを抱えた人たちが集うようになっていきます。そういった人たち同士で刺激を与え合い、新たな気づき、発見、展開を得る場所にしていきたいというのがこの場づくり法です。

この場づくり法においては、会話の得手不得手にかかわらず、自由に公平に会話を持っていくことがモットーとされており、それに基づいてラベルワーク、先ほどから説明がありますが、このラベルを使って会話していくことが一番有効なのではないかと考えています。

その場づくりというものには広義と狭義というものがございまして、実は世界でもアルファベット表記でBADUKURIって非常に有名で、経済活動などで用いられているそうです。

私たちがやっていく場づくりというのは、最狭義になるのですが、先ほども言ったようにラベルワークを通して小さいグループ、小グループの共有の場をつくり出す方法として用いられます。その手段といたしましては、先ほど説明があったように、ラベル新聞ですとか授業新聞、これから私がまた皆さんに提案したいのですが、図解づくりというものをを用いて行っていくものになります。

私は場づくり法というのを後期の授業で主に扱っていきたくて、場をつくっていくために有効だと思うのが図解づくりというものなのですが、皆さんに参考にちょっと提案したいのですが、お時間いただいているんですか、司会の小山君。

○小山 じゃあ、佐々木さんがさっき言ってくれた場づくりですが、その図解を生かすため。

○佐々木 図解づくりについて、説明をさせていただきます。

この図解づくりの図解って一体何なのだというのを皆さん思われると思うのですが、この写真にあるものが、写真に撮った図解なので、こういったようにカラフルなものになっております。図解というのはラベル二、三十枚からつくられておりまして、さまざまなラベルをよく読み込んでいくことで、その中からテーマに対しての本質を見出す、そういった図のことを図解といいます。この図解づくりにおいては、テーマ設定が非常に重要になってくるのですが、どんなテーマがふさわしいかという、解決策を見出したいテーマであること、もしくは原因、現状を見出したいテーマであることが好ましいと思われています。

テーマ設定の際のポイントがさらに3点ございます。1点目が、社会で現代的課題となっている視点があること。二つ目に、自分だけではなくてクラス全体の役に立ちそうなものであること。3番目に、オリジナルな視点が盛り込まれていると、なおよいとされています。

私はこの図解づくりをゼミの方で、林先生のゼミの方で取り組んできたのですが、非常にこの図解、可能性を秘めているなと考えました。まず、そもそもラベルというのは人の人格とか心を表すものだと考えているので、図解をつくる際には注意点がございまして、まず先ほどの写真のようにカラフルにはレイアウトされているのですが、最初の時点で作り手の方が配置を設定したり、レイ

アウトを決めてそこにラベルを張りつけていったりという、そういったラベルを分類することは決してしないように心がけています。

どうしたらいいかというと、まずラベルに書かれた内容、二、三十枚あるラベルをよく読み込みます。そうしていくとラベルに書かれている声というものを読み取っていくと、次第にこのラベルとこのラベルは似たことを言っているなというのをまとめていきまして、カテゴリ分けをしていくようになります。

その右側なのですけれども、図解というのは非常に新たな発見や展開を見出すのに有効的だと考えています。例えばここに図解の例を挙げたのですが、私たちのテーマ、例えば私たちの目指す教師像と定めた場合、それに関してみんなにラベルを書いてもらいます。二、三十枚集まったラベルをまずよく読みます。そのラベルの意図をくみ取ります。そうしていくと、だんだんとこの図があるように、似たような声を持ったラベルというのは、お皿に分けてレイアウトされていくようになります。そうすると段々ラベル全体が伝えたい本質というものが見えてまいりますので、一番後、タイトルが決まっております。この例の図解に関しましては、この赤い部分ですね。専門性とコミュニケーション能力のある教師と書かれていますが、このタイトルの部分が一番後に見えてくるようになります。

本質イコールタイトルということで、この図解が一番言いたいことは何なのかというと、この赤い部分を見ていただくとわかる、そういう仕組みになっております。

次なのですけれども、この図解づくりをゼミでやったときに、私たちはこの図解づくりから一体何を学んだというのを、みんなにラベルに書いてもらいました。そこで上がってきたメリットというのが、まず3点あります。

1つ目が、参画意識が高まり、意識を共有するまま自然とできたというラベルがありました。2点目に、図解にすることで頭の中で情報を、めぐっていた情報がきれいに体系化されたという意見。3番目に、自分はこれまで考えもしなかった新しい見解に触れることができたというメリット3点挙がってまいりました。

それと同時に、今後の課題というものも非常に多く聞かれました。こういったものかという、こんなに一生懸命つくってきれいに仕上げた図解なのに、これをつくって終わりでもいいのか。今後どうやって生かしたらいいのかという課題がラベルの中から、多く声が聞かれました。なので、皆さんは図解をつくって満足じゃいけないのだ、どうしていったらいいのだろうという段階で、今ゼミの方は課題を抱えたまま授業がとまっている段階です。

○日本教育大学院大学大学院生 ちょっと質問なのですけれども。

図解をつくって満足ではないという意識がみんなの中に生まれるというのはいいことなのですが、そこで具体策というのは挙がったのでしょうか。

○佐々木 それで、今ゼミの方も、ちょうど具体策を考えていこうという段階でとまっておりますので、私のきょうこの授業での提案をきっかけといたしまして、みんなに図解をどうやって生かしていったらいいかを、ラベルに意見をいただきたいと思います。今から少しちょっと時間を取っていただいてもよろしいでしょうか。

○小山 では、各自図解を生かす案をラベルに記入して、書いた人から発表してください。



○林 書くときの注意は、力強く書かないと3枚つづりになっているので。それからボールペンを使うというのがルールだったね。もう1回確認しておきます。後からミシン目で切り離して3枚にする。書いた後切り離す。

○小山 書いた人がいましたら、挙手をお願いします。じゃあ新島さん。

○新島 お手元にあります別紙でカラーのものを用意しています、こちらのものをごらんいただいてもよろしいでしょうか。

先ほど佐々木さんから説明があったのですが、私たちが実際にゼミで図解を作成いたしました。そのテーマといいますのが、本学の学生として時間を有効活用するにはどんな悩みがあり、どのような工夫があるかについて図解を作成しました。こちらの悩みというのは、大学院に入ったばかりの新入生にとっては重要なテーマになってくると私たちは考えておりますので、新入生オリエンテーションなどで縮小図解を配付するのがいいのではないかと考えています。

○小山 小林君。

○小林 それと、毎年大学院で行われているソフトボール大会や研究発表大会などの行事の企画運営で、先ほど新島さんが示してくださいました、そういった図解を作成し、効率的に進行する、これも一つのアイデアではないでしょうか。

○日本教育大学院大学大学院生 実際に授業を演出するための模擬授業で使ってみたらいいんじゃないでしょうか。

○小山 あと1人、お願いします。じゃあ2回目、新島さん。

○新島 場を共有するという意識を持って、積極的に貢献しているという意識が大事だと思います。

○佐々木 済みません、皆さんありがとうございます。

ということで、今図解をどうやって生かしたらいいかというのが、ここにみんなから案を出していただいて、伝承していくという点ですごく有効だと思うので、ぜひこの場づくり法ないしは図解づくりという

ものを、後期のこの授業で取り上げていただきたいなと思っております。私からの提案は以上です。ありがとうございました。

○小山 佐々木さん、ありがとうございました。では、皆さん感想ラベルを記入してください。

○丸山 このように、一つの発表が終わるごとに感想ラベルを記入します。本来は感想ラベルの方も数人発表して、みんなで共有するのですが、今回は時間の都合もありますので御割愛させていただきます。

○小山 じゃあここから授業の内容に入っていきますが。先週の授業の結びで、後期の活動をどうまとめていくかを考えるということになりましたが、意見のある方、いらっしゃいますか。新島さん、お願いします。

○新島 前期の授業で作成したように、後期もポートフォリオというものを作成したらいいと思います。

○日本教育大学院大学大学院生 質問です。

そのポートフォリオって一体何なのですか。

○新島 ポートフォリオというものは、学習者がみずから自分の学びを評価する方法で、ファイルに自分の作品と、後はそれについての解説を入れたものになります。

○佐々木 済みません、質問なのですけれど。

このポートフォリオをつくる際に何か決まりごととかルールはあるのでしょうか。

○新島 具体的には三つルールというものがあまして、まず一つ目に、こちらA4版のファイルを使用するということが挙げられます。二つ目に、自分の作品を入れるのですけれども、ただ自分の作品を入れるだけではなくて、それについて解説をつけます。三つ目としては、必須構成要素というものがありまして、まず一つ目に表紙、はじめに、目次、自作の作品とそれに対する解説文、そしておわりに、後は最後の学びのプロセス図解。

○佐々木 ちなみに、学びのプロセス図解というのが一体何なのか、説明してもらってもいいですか。

○新島 学びのプロセス図解なのですが、私たち毎回授業でこちらのラベルを使いまして授業の感想を書いています。ピンクのもの、2枚目にあるのですが、こちらをためておいて、半期の授業の終わりに自分の学びの姿勢がどのように変化していったかについて、このように図式化したものになります。

○小山 それもさっきの佐々木さんのと一緒に、つくるだけじゃ意味をなさないのもったいないような気がするのですがすけれど。

○新島 そうですね。私もただこれをつくるだけではもったいないと思っています。そこで、皆さんに意見をお伺いして、これをどのように活用していけるかというのを聞いてみたいのですけれど、大丈夫ですか。

○小山 じゃあ今度は、図解をどう生かすかラベルを記入してください。本来ならここで発表もしていただきたいのですけれど、きょうは時間が押しているので、授業後に新島さんに直接渡してください。

○丸山 このように、司会進行役はタイムマネジメントと並行して行っていきます。

○小山 きょうの授業のまとめに何か伝えたいこと、言っておきたいことある人いらっしゃいますか。小林君、お願いします。

○小林 私、僭越ながらポエムにまとめてまいりました。

それでは、資料の5ページの方をごらんください。自称ラベルの詩人こと、私、小林 将が発表させていただきます。

コトノハの樹、小林 将。

「僕は二十数年生きてきた中で、初めて「コトノハの樹」に出会った。「コトノハ」は言葉の葉っぱと書くが、それはラベルという種から育った学びという葉っぱです。その葉は枯れて終わるわけではなく、言葉を介して生きる者皆にとっての「喜び」という養分となり、新たな「知」という生命の循環を生む。その葉を育てる「コトノハの樹」は一体何によって育つか。それはすなわち、「寛容」という陽の光、「場づくり」という土、「調和」という呼吸、そして「参画」し、それを「共有」し合う人間である。

僕らはその「コトノハの樹」を育ててきた。それを育ててきた僕らは、最初は偶然出会った人間たちであるに過ぎなかったが、その偶然が、僕らを、この樹を育てる人間として「責任」と「喜び」を共有する、かけがえのない仲間にした。そして育てられたその樹も、育てる側である僕らの心のよりどころとして、しっかりと根を張るようになった。

「コトノハの樹」は、不毛と化した知の世界に再び生命をもたらしていくことだろう。互いに「参画」し合う、人々の輪によって。

だから、一緒に育てよう。未来の「参画」し合う人間を。人々が「参画」し合える世界を。知と知、人と人が輝き合う未来を。

そして、その輪の中心となる「コトノハの樹」を。

途中少々音声が乱れましたけれども、これで私の発表を終わらせていただきます。ありがとうございました。

○小山 ありがとうございます。

企画書にポエムの発表とは聞いてなかったのですが、企画書には書いてないですが、ちょっとびっくりしましたが、小林君らしいなことでもまとめたいと思います。では先生、きょうの授業の総括をお願いいたします。

○林 それでは、皆さんがこれまでやってきたことをもう1回まとめていくことになると思うのですけれど。

最終段階、最初の1学期のころより、だんだん主体的になってき

て、他者とかかわるということが出来る。そこで他者にかかわるという飛躍がないと、参画段階に進まない。参集するだけでも大変なのだけれども、さらにその後、かかわるといって大変なハードルが、やっぱりみんなにはあったのじゃないかなと思います。

さらに、後期は場づくりにかかわるといって、もうひとつ飛躍があるわけですが。私の今までの実践では、二つの飛躍、少なくとも二つの飛躍を越えて、場づくりという参画の段階に進んでいくというのが僕の今、までの実践の考え方。そうすることを通して、今まで知識レベルというか、言葉レベルでかかわってきたような授業から、そこにいる人たちの認識というか、人とかかわるといって起こってきて、そして初めてそこで認識というか考え方が変わってきて、さらに実際に行動したり、共に働いたりとか、あるいはその場自体をつくり出していくという、そういう行動の中から意識の変革みたいなものが起こって、君たちみたいにそこまで、とにかくわざわざ駆けつけるという、そんなことも起こってきたというのは、こういう積み重ねがあったからじゃないかなと思います。

だから、普通のいわゆる参集モードの講義というのも大事だし、だからこういう参画型の授業もおもしろいと思うけれども、改めて講義形式のよさを、これは知識をふやすにはとても大事な方法で、これは先生方がちゃんと計画的にやっていたのはわかったと思うのですね、参集をやってみれば。そして、やっぱりそれだけじゃなくて、第2のモードとしての、参集モードといわれる、こういう先生が、それをリードしていくという段階を経て、それで終わるのではなくて、やっぱり最後自分たちでそういうふうな企画、実行、こういう評価が入って、さらに伝承。伝承というのがね、もう一度教えてみるということによって、改めて知識が自分のものになっていくということじゃないかなと思います。

意識の変革というのは、そういうところから生まれるのではないかななど。そうすると先生の方の役割も、いろんなことをレクチャーしていくだけじゃなくて、コーディネーターから最後スーパーバイザーになっていくというね。今回、君たちがここまで来てくれるということで、僕も君たちの主体性が、やったと思えるように、陰になつたり何かしたりしながらそういうかかわり方が、先生も段々変わっていきけるという、そんなふうな思っております。

○小山 先生、ありがとうございました。

では、きょうの授業はこれで終わりたいと思いますので、各自、後ラベルを記入して、その後解散してください。

○丸山 後期の授業はいつもこのように学生主体で行われていまず、学生主体イコール参画です。ところどころ、今のように林先生からアドバイスをいただきながら、参画的な授業運営しております。

皆さんはこちら、今話を聞いてどのように感じたでしょうか。私たちはこの参画授業を考えることによって、ラベルという武器を用いて、それぞれの教育現場に生かせる参画への授業づくりの発展方法を考えて、より参画しやすい場の提供をできるように追求して、生徒自身が参画の意識を持った社会人として成長できるような授業づくりに励みたいと思います。

以上で、私どもの発表を終わらせていただきますが、最後にも私たちが行っている内容に御関心を持たれた方がいらっしゃいま

したら、休み時間に場所をお借りして、廊下の方で場所をお借りしていますので、その場で質疑応答の場を設けます。あと、その場で林先生の著書とラベルの方も発売しておりますので、よろしければ御参加に来ていただければと考えております。

あと、学校に御連絡の方頂きましたら、本日使用した資料などもお送りすることができますので、御一報の方お待ちしております。

あと、最後になりますが、この場所では今回のFDプロジェクトについて、富山大学から近藤先生というラベルワークを活用してプロジェクトゼミを実行する、あちらに立たれている方なのですけれども、ゼミを実行している先生と、山形県立東根工業高校から武田先生という参画学習を推奨していて、本を出している先生もいらっしゃいます。武田先生に関しては、資料の方も配付しておりますので、よろしければごらんください。

この2人の先生方に、私たち以外の内容についてもお話を聞くことができますので、よろしければ休み時間の間にお越しください。

あと、プログラムでいう1部が終了した際に、こちらでラベルの方を書いていただけたと思うのですが、ラベルの方を集めますので、今座っている机の端にでも置いてくだされば、こちらの学生が集めますので、よろしく願います。

○林 何を書いてもらうの。

○丸山 こちら感想とよろしければ意見の方を、今回見ていただいて、意見の方ありましたらお名前と、御所属の方を書いていただければと考えております。

○林 そしてピンクは自分で持ってもらって、黄色は我々。白を山形大学の方に。そういうふうに使いますので。お名前はできれば書いていただきたいけれども、無記名でも結構だということです。

最後になりましたけれども、実は彼らからはちょっと言えなかったのですが、昔懐かしい言葉なのですけれども、カンパのお願いをしております。その、みんなも自費でここへ来ているので、もしよろしければカンパ袋にちょっと、山形遠征費を出していただければと思っています。そのときに、学生がつくった参画に関する批評もありますので、どうぞそれもお取りいただければと思います。

以上で発表を終わります。

○丸山 済みません、時間が少しオーバーしてしまったのですが、御清聴の方、ありがとうございました。

○司会 林義樹先生を初め、大学院生の皆さん、どうもありがとうございました。時間がいっぱいになりましたので、質問は休憩時間ということでありますし、また質問票がありますので、こちらに書いていただければパネルディスカッションの方に生かしていただきます。

では、引き続きまして、鈴木誠先生の御紹介をしておきます。

北海道大学大学院理学院自然史科学専攻教授であり、なおかつ高等教育機能開発総合センターの教授でもあります。大学卒業後に、株式会社協和発酵工業に入社され、その後公立中学校、高等学校の先生をやられ、また大学院に入られて、学年主任とか進路指導主事などをやられ、2000年から北海道大学の方に御着任にな

りました。専門は理科教育学であって、理科教育学、教育評価、両生類の解剖学でございます。ほかに、学ぶ意欲の測定と、意欲を引き出す授業デザインを研究されております。

我々も鈴木先生の授業を見せてもらいに、北大にまいりました。今からのお話でわかると思いますけれど、すごい授業です。朝日新聞などにも紹介されまして、また今度我々が出します本の中にも入っていますけれど、意欲を喚起する授業の典型ではないかという形ですので、楽しみにしてお聞きいただけるかと思います。

では、鈴木先生、よろしく願います。

「意欲を引き出す授業デザイン」蛙学への招待とは何かー 北海道大学 鈴木 誠 教授



○鈴木 誠 皆さん、こんにちは。鈴木と申します。

今、御紹介ありましたけれど、私の話は大した話ではありません。いずれも私が今まで学んできた経験値に基づく話です。30分時間をいただきました。しゃべるよりは、私の授業を見てもらった方が一番早いと思いましたので、きょうはDVDにまとめてきています。30分内で話が終わりましたらお見せしたいので、もしも30分内で終わらなければ、質疑応答の中でお時間をいただければと思っています。よろしく願います。

私、御紹介ありましたけれど、もともとは何をしていたのかという、今なくなりましたが、キリンビールに吸収されました協和発酵という会社で、もともとは細菌学を専攻していました。たまたま教員免許がありましたので、中学、高校と教員採用試験を受けて現場にいました。いずれも名うての教育困難校で、特に高校の場合は年間退学者が110名を超え、4階をバイクが走り、どなっても入ってくると。そこでずっと生徒指導をやっていました。そこで経験をもとに、意欲の研究に入っています。もともとは細菌屋なのですけれども、こういう研究をずっと続けていると。こういう研究を継続して学位論文を書いているうちに、大学に拾われたというのが私のプロフィールです。

現在は意欲の研究です。自己効力という観点から意欲を切っていく、それを引き出すいろんな授業のデザインを考える。

これはヘルシンキ大学が自己効力の研究をやっている、その関係でフィンランドに関係するお話も、本も書いたりしています。もう一つ私の大きな軸は、細菌学からちょっと派生するのですけれども、解剖学がもう一つの私の軸になっています。この二つが私の研究の柱であります。

きょうどうい話をしようかということで、蛙学への招待のコンセプト、三つほど、もう少し実は考えあるのですけれど、三つまとめてお話しした方が一番わかりやすいかなと思って持ってまいりました。

蛙学といいます。なぜ蛙学というのかというと、御存じの方いらっしゃるかもしれませんが、京都大学に『蛙学』という名著を書いた市川衛教授というのがいらっしゃいました。その教授へのオマージュという意味で、蛙学への招待という授業を開講したわけです。これ文系、理系、だれでも取れる授業で、北海道大学の一般教育研修の中の一コマに入っています。現在履修制限が入りまして、北大は余計なことをするのですけれど、余り履修しちゃういけないということになっていました。倍率が押さえられましたけれど、多いときで10倍近い生徒が、学生が集まってきたこともあります。

一つは両生類無尾目の総合学習、カエルですから当然ですね。文系、理系を問わず、特に最近ではホンモノの直接体験も減っていますし、北海道大学は研究者養成大学の一つです。問題解決手法の体験をさせようと、こういうキーワードを見せて、最初の入り口を見せようというのが一つになります。

二つ目は、意欲を徹底的に引き出してやろうというのが私のねらいでした。自己効力、というのはバンデュエラが言い出した言葉なのですけれど、それを意図的に引き出す試みをしています。これは教育困難校でやっていた授業をそのまま大学に持ち込んだだけのことです。

三つ目、先ほどアウトプットのお話がありましたけれど、さらに履修者を育成すると。いろんなところに彼らを実際出させて、大学1年の段階で出させて場数を踏ませる、もっと資質を伸ばそうと、この三つの大きな柱になります。

こちらをちょっと見てほしいのです。私の授業というのが、ラストは、先ほど話ありましたけれど、学生が授業をする。学生が夜も寝ないで教材研究をして、両生類に関する最新のデータを持ってきて、授業をしなきゃいけない。60分の時間あります、それを求めるわけです。ですから、遊べない、バイトできない、彼女もできない。感動するかどうかわかりませんが、徹底的に鍛えてやろうというのがこの授業のねらいであります。

それではお話をしていきます。順番ちょっと逆転します。まずここから話をした方が、前後が繋がるだろうと思って、ここからいきます。

難しいスライドはこれで終わりです。実は意欲というのはいろんな切り口があるのですけれど、私は自己効力というものに注目しています。これは私の研究テーマなのですが、人はいろんな期待概念がありまして、結果に対する期待、皆さん持つのですね。例えば宝くじ10枚買ったから3億円当たるとか、結果に対する期待を持つのですよ。バンデュエラという人はおもしろいことを言っている。その宝くじ売場に私も、僕も行けるかもしれない、そう言うのですね。効力期待というのを考えたのですよ。実は期待概念には二つがある。この気持ちこそ、いわゆる動機づけに非常に大きな影響を及ぼす。

もうちょっとかみ砕いてお話をしますと、僕だったらできるかもしれないと、そういう自信を持たせることが非常に重要だということを彼らは言いました。バンデュエラ以外、いろんな連中がその自己効力を研究してきたのですけれど、自己効力もさまざまなのでできている。例えば自分をコントロールする力。自分の周りにはいい先

生がいるのだよという気持ちを持たせること、あるいは自分の授業の目標とか、自分の学習の状況とか、そういうのがきちんとしてえられている。まさに今回は学生参加型授業、学生主体型授業のポイントですね。学生が中心になる、教える、わかりを与えられる。あるいは勉強したらわかって。これらの概念が自己効力を構成することがわかってきています。つまり、これ一つ一つを押さえることによって、意欲を高める、意欲を強化することができるというのがバンデュエラ一派の考えでした。徐々にこれは実践面として示されてきています。

私は、例えば今回の「蛙学への招待」、徹底的にこれを鍛える。学生を前面に引きずりだして、彼らに教える、わかりを与える。そのために最大限のサポートをする。あるいは学生のそばにつき離れず、ついていてサポートしていく。努力も求める。彼女できない、部活できない、つまり統制もしてもらう。学生が授業をつくるわけですから、当然授業の課題の状況、進行状況、目標の設定、プランニングとかこのあたりも評価していく。全体を評価して、一気に意欲を引き上げようというのが、私の授業のねらいでして、実はそれを教育困難校でもやっていたわけです。

こんな話はもう知ってら、と言われてしまうのですけれど、授業というのはごらんのような要素でできています。これ一つ一つを意図的に強化しながら、この裏に潜んでであろう自己効力を高めていこうと。最終的には全面的に学生を引きずりだして、彼らのモチベーションを高めようというのが私の授業になります。

まず目標からお話をしていきます。「蛙学への招待」なんですけど、三つの目標を準備しています。一つは皆さんFDでやられていますが、一般目標ですね。その授業を通してどういう力が養えるかということは明確にしておきます。二つ目は到達目標。その授業を通して何が得られるのか、具体的な形で書いておきます。この二つがネット上のシラバスに出てきますので、学生はまずシラバスを見るとき、この二つを見て私の授業を選択してきます。

最近はお口コミもあるのですけれど、学生に何でおれの授業を選択したのかと、この授業を見て、おまえの授業は何をやるか大体わかるから、選択してやったということを彼らはよく口にします。これがネット上の一般目標です。非常に長くてよくないのですね、これはよく怒られます。もっとコンパクトにしないといけないのですけれど。

ここに私の理念が書いてあります。蛙学ですから、3億6,000万年前に川から陸上がった両生類が特異に変化したのが今のカエルなのですけれど、総合学習だよと。でもこれ、赤で書いたところですね。総合学習だよと書いて、緑で書いたところですよ。それを通して実は問題解決能力を育成するのだよと。その手法の入口だけ見せるのだよということを書いています。学生は、おまえの授業は北海道大学で研究者としていく上で、一つのキーを学ぶのだと、これはわかるわけです。私はこの裏に実は、おまえたちの意欲を引きずりだしてやるぞという私の腹黒い心がここに漂っているわけです。それは一切ここには書きません。

到達目標はごらんのようなことを、ネット上に書いています。頭のいい学生が入った、そのまま消化できるようになるべく具体的に書いておきます。そうすると学生は、私の授業を取って一体何が待ち受けているかわかるわけですよ、そこまで彼らに明示します。例えば解剖、系統解剖で、104の内部外部形態をやって、大体、どこど

この結果を見なきゃいけないとか、かしこいかわらわかってるわけでは。

最後ですね。これは書きません。私の心の中に思っております。

毎回授業も、ごらんのように毎時間、これ系統解剖から来ているのですけれど、系統解剖というのは4時半から11時ぐらいまでやっています。こういう目標をきちんと上げて、学生に何をすべきかということ、目の前の目標を見せながら授業を進めていっています。

目標が大事だということは最初話しました。目標がはっきりしなければ学生はやる気にならないわけですよ。次に、目標を達成するための授業計画を考えるわけです。先ほど言った両生類、問題解決を、入り口を見るのだよと。でも実は意欲を高めるのがねらいなのだよと。シラバスもなるべくリズムに、リズムカル、インパクトのあるように書いています。なかなかこれ表ではわからないのです。これ15回なのでですけどね、二つ特別授業でこれ、期日に入ってきます。大体17回で現在授業を展開しています。ちょっと色をつけます。

青で書いたところは、私が今こうやって皆さんに話しているような授業です。緑でいわゆる学生参加型です。学生が授業の中に入ってきて、活躍するのが緑の場面です。赤が完全に学生、学生が教師である、私が生徒であると、そういう形に変えて授業を進めていくわけです。通常、授業でこれが流れますが、特に一番のポイントは、これ学生がやる授業なのです。これ6月下旬から学生が約2カ月間、調査研究して、最後両生類に関する授業を展開しなければならぬわけです。

これが学生の授業設計の概念を簡単に書いてきました。私の授業はとにかく、おまえたちの問題解決能力の一部をきちんと体験してもらおうと、全学一貫して授業だよということを宣言しています。コンセプトをしっかりと理解してもらいます。過去10年間のOBの、非常に努力の積み重ねがあるわけです。DVDを見せて、よい授業の例を見せて、あとテーマを決めてもらう。テーマを決めるのが一番のポイントですよ。しっかり先行研究、論文を読んでもらう。ラッキーなことに両生類はほとんど海外文献なのです。例えばアニマルビヘイビアとか、そういう80年代から90年代のよい論文がたくさんありますので、最適なのです。大学1年生のときからホンモノと意見をぶつけていくわけです。テーマを決める。それに基づいてデータを集め、ときには調査をし、なるべくここでホンモノとぶつかるように、その筋の、例えば大学とコンタクトするとかですね、ホンモノと接触させることがキーワードなのです。授業外でこういうことをさせるのです。

6月は授業設計です。この授業も、おまえたちの授業がみんなの意欲を高めなければならぬ。これKJ法で実は演習でやるのです。さらに意欲を引き出す授業を私は求めるのです。リハーサルし、最後6月下旬から授業を開始していく。60分間学生が授業し、最後インタラクティブとして終える、そういうスタイルを取っています。人数は5人1組です。このときにいろんな外部から人々を呼んで、あるいは市民、研究者を呼んで見てもらったりしています。

授業形態も、きょうはこれですね、学生主体型です。学生を授業に生かし切ることを考えています。ただ参加させればよいという授業はたくさんあるので、それは全く無意味なこととして、例えば学生の能力を引き出す、あるいは引き出せるような種まきをする。種をまいてやる。彼が大学院に行き、あるいは社会に出て、そ

のときに気づくような種をまくように心がけているつもりです。

いろんなグループ学習とか体験学習って、いろんなスタイルがあると思うのです。私の授業は特にこのグループ学習、それからホンモノとの体験。ディベートは使いませんが、ワークショップは使います。それからモックインタビュー、フィッシュボールは使いませんが、ドライラボを使います。解剖のときドライラボを使って準備をするわけです。いろんな形態を、そのときの目的に合わせて授業形態をカメレオンのように変えていきます。

私の授業というのは、要するに総合学習です。ホンモノとの直接体験、これは物すごく重視します、ホンモノは情報量が多いです。そこで彼らの知的好奇心を高めようというのが授業のねらいです。

もう一つ、意欲を高める大事なキーワードは、ちょっとお話ししたけれど、ホンモノとの接触がとてども大事です。なるべく文字ベースにならないようにと、テキストベースと体験では全く質が違いますよね。なるべく情報が二重、三重に精緻化するように、あるいは自分の学んできたものとリンクするように、知的な情報が多いホンモノと接触させるように努力します。文献も必ず読んだら、疑問があればEメールを返して、研究者本人とコンタクトして、その前に私は必ずチェックを入れます。そうやってコンタクトする。あるいは実際に研究所に行って実験させてもらうとか、データを一緒に見るとか、そういうことをさせて授業の準備に持っていく。それによって彼らの知的好奇心は当然高まるわけです。これも刺激したい。

それから、なるべくホンモノ志向をすることによって、正確なものをとらえてほしい、こだわってほしい。研究者を養成しなきゃいけないわけで、当然こだわりとか、この辺が大事なキーワードになるわけです。それが大事なのだよと。そういうこともきちんと見ていける。

それから体験というのは、要するに学ぶ意欲を強化することができます。学生を主役に、実験というのは主役にできますし、そのプロセスを見ることが出来ます。こういう面で体験というのは意味がある。私の授業でもこれは外せないものだと考えているわけです。

これは10年前、一番古い初期のものです。5人1組います、夜の11時。これは、両生類の内部形態を授業にするグループが、教材用にDVDをつくっているところです。実は日本は、ウシガエルなのですけれど、きちんとした解剖教材がないのです。アメリカのやつをちょっと翻訳させて、彼が執刀するのです。私は助手で、このカエルを、本州にいませんから空輸で持ってきて、一緒に立って見せています。これが主役で、彼がディレクターです。流し撮りしてDVDの教材、元をつくったわけです。翌日これ全部終わった後に、それを秒刻みで、シナリオがありますので秒刻みで、15分ぐらいのダイジェスト版をつくり、それを本番の授業で使う。その準備をしているところですね。こうやって学生を授業の文脈に引きずり込んでいくわけです。

これはどういうシーンかという、見てのとおりカエルは、皆さん食べたことありますよね。反応ないですね、そうですか。カエルは実はダイエットにいゐるので、すくなく食べても大丈夫なんです。

世界のカエル食を調べてきたグループがあるのです。ある理念をもとにやってきたのですけれど。おまえらじゃあカエル食を、世界のカエル食、エスニックからフランスから中国料理から、おまえら実際カエル食の体験はないじゃないかと。とある札幌市のあるシェ

フに紹介状を書きました。送り込みました。本物との出会いが大事なのですよ。2日間土日、中華料理のシェフにフライパンで殴られながら彼らは修行に行ってきました。カエルを使って棒々鶏を今準備しているところです。これは遊びではなくて、ホンモノと接触させてやる。そうやって彼らの意欲を引きずり出すというのが、私の希望なわけです。

この笑顔、わかります。あくまでもホンモノの体験ですから、これラストのシーンです。

私の授業の最後は、北大の農場からある両生類の二種をとってこいという指示を出します。それは総合的な知識がないとできないです。彼らは必死になって、ある私の指定したカエルをとうとうしています。でも皆さん、多分御経験かなと思いますけれど、こうなったらカエルはもう水中に潜って出てきませんよね。私はニヤニヤしながら見ているわけです。こうやってなるべくホンモノとの接触を強めています。

ここの授業の風景です、ここに演者がいます。60分間の授業で、いろんなそこには制約はあるのですが、もちろん手持ちの原稿は一切なしで、きちんとアカデミックなレベル、それから全員が参加しなければいけない。そして会場の授業受ける側もその授業に参加、加わっていかなくちゃ授業として認めないというのが一つの、いろんな制約があります。それらは、彼らはみんなわかっています。一生懸命やっています。

この絵は、当然リハーサルを彼はしてくるわけですね。ドライラボもできれば工夫してみようということで、彼らはこういうものを使いながら、学生同士インタラクティブなやりとりができるような仕掛けをしてくれます。終わった後、発表式があって、インタラクティブなやりとりするのですが、会話が途絶えることはほとんどありません。これは、私が年間退学者110名の商業高校でも、もっと稚拙な授業をやっていたのですよ。同じように、それなりのインタラクティブなやりとりが続いていました。

というわけで、私の授業は一体何をねらっているのかというと、学生が授業することによって、いろんなものを統制しなければいけない。それによって統制感というものを強化する。それから私がいまですの、身近な教師ですね。これつかず離れずが大事で、余りそばに行くとか依存心が高まりますので意味がないです、私も解は決して教えないです。

それから、授業をつくる上では当然、自分の、現在の授業の展開の状況ですね。そういう課題が何、目標をきちんと設定できなければいけません。つまり、授業づくりでこう評価することができます。

それから、授業づくりを達成するにはプランとか情報処理が必要です。先ほどから申し上げていますが、まさに学生に教える役割。私は期待しているよと声をかけます、このあたりの評価。ちょっと色はつけていませんけれど、初期の段階で、文献検索の方法を徹底的に教えます。ですから方略も、ここに合わせて教えるようなこともしています。

ホンモノとの直接体験ですね、1人1体ずつやりませう。解剖嫌だという子、たまにはやはりいるのですよ。そういう子にはきちんとやはり、これドライラボでもみんなできなくて、きちんと準備をさせて、101の内部形態、外部形態の名称をスムーズに学習できるように。その実習の本番では、私ほとんど指示しません。そこで自動運転で

きるかと。私が言わなくても、両生類はきちんと埋葬できるか。これは教育法の中でやっていたことです。それで私の評価が出ると思っていますので、ドライラボを使って徹底的に取り組んでいきます。これはつくっているシーンですね。

評価ですね。これとても大事でして、なるべく情報をフィードバックすると。アセスメントではないエバリュエーションのことを考えながら、よい適切な情報をピックアップして学生に返すようにしています。

特に診断的評価ですね。北大生だったらみんな勉強できるのだからと思われられるかもしれませんが。実はそうではなくて、ほとんどいわゆるテキストベースの情報しか入ってきていません。体験を通した学びがないのです。やはりその場その場できちんとある程度とらえて、自分の授業に修正するようにしています。

これは、年間退学者110名を出していた商業高校での診断的評価のシートです。昭和63年、私が高校教師になりたてのころです。2本足のカエルを書いてきましたので、本人を呼んでも2本足といえます。言い張るのですよ。これだと恐らく、細胞から始まる授業はできないと考えたので、その当時は校長に許可を得て、教科書を逆転しました。最初に自然があって、集団があって、最後に細胞、ゲノム側という流れにして、教科書を書きかえてやったときがあります。そのときにやったのが、今お話しした蛙学の原型でした。これは野外実習で調べたことを、この子たちを、ただ主演にしたのです。まさに $3 \times 6 = 16$ と答える子たちなのです。字も間違えて、いろいろ本当に稚拙な発表なのですが、それは目をつぶってうんと褒めてやるのです。褒めることにまさるものはないのですね。本当褒めて、ちょっと言葉は適切かどうかわかりませんが、ときには野郎たちを抱き締めたりして、よくやったぞと、そうやって激励していくことをしていました。

今、北大生とそんなことをやると、私セクハラ教師で訴えられますので、それはやっていませんが、なるべく学生とのコンタクトを頻繁に、先ほどカードがありましたけれど、学生証が張ったカードを生徒全員、学生全員と交換します。私のメルアドもみんな知っています。何でもいいのですね。それに対して私が必ずコメントを返す。こういうことをして、学生と絶えずコンタクトをしています。最初は字数が少ないのですが、段々数多くなってきます。最近の学生はよく書くようになりました。これが大体、10枚ぐらい、15回で彼らは書いてきます。その中にいろんなキーワードがあるのですね。それがあつたばに私は個人を呼んで話を聞いてやることにしています。そうやって距離を近づけながら、授業を進める。それからアドレス交換をしたりしています。

これは教育困難校でクラス全員の子どもとノート交換をしていた、それからヒントを得て今これをやってモニタリングしています。ときには厳しく、ふざけるなということとは平気で私は子供らに言います。

この子もなかなか心配のあった子なのですが、唯一私の授業はサボった子でした。メルアドがわかっていたからすぐに、会いたかったよというメールを打ちました。私はそういう気はないのですけれどね。そしたらやつから、ごめんというメールが来ました。ずっとフォローして、最後、北大の農場から両生類をとるときによい顔をしていたので、おまえちょっと写真を撮ってやるというので撮りました。彼はその後大学院でとてもよい研究をして巣立っていきま

じゃあおまえの授業評価はどうなっているのだと。おまえ口ばかり言っているけれど、本当にそうなのかということで、実はこれ学生の授業評価です。北大はこういう観点別の評価と自由記述の評価があるのです。自由記述に関してはホームページの方から見てください。大学のホームページの点検・評価のところ私の授業が載っています。平均は赤ですね、これは私です。要するに作業量が多い、少ない。どんどん多くなる。つまり、学生はここでぶりぶり言っているのですね。やっぱりここまで来ると修正しなきゃいけないのです。いつも思うのですね、どうしようかと思うのですけれど、私は、学生は徹底的に鍛えるべきだということで、なるべく量が減らないように。例えば学名ですね、両生類はたくさんの学名がありますが、そういうときは学名を教える。そういうぐらいのサポートはするようにしています。

難易度。この辺から翻訳が入ってきたのですね、一気に難易度が下がりました。要するに難しい、さすがにここまで来たときに私は考えて、現在これはややこれまで持ち直しています。要するにおまえの授業は作業量が多くて難しいと。そうすると普通は皆さん嫌がるのですけれど、意欲は高いのですよ。今これにきています。理由を聞くと、やっぱり一番のポイントは、自分が授業に参加できると。授業の意図がよくわかるというのが彼らの説明でした。知的にも刺激されて、ありがたいことで、これがないと大学の授業ではありませんので。こんな感じで推進しています。

これで授業、終わりになるのですね。でも、私の授業を履修した子もやっぱり目をかけるようにしています。追跡調査も少しするのですけれど、例えば履修者がいます。かなり外への発信を求めます。サイエンス・カフェの実施、それからよい研究、学会とか研究会にどんどん出していきます。それから1年間ラーメン1杯、たったラーメン1杯しかあげないのですけれど、差し入れはないのですけれど、TAとして参加していいよと。後輩の面倒をよく見ます。これによって、先輩の伝統が下に受け継がれるのですよ。

これは全国飼育動物研究会、東大で毎年やっているやつです。教育に関心があったグループが過去にありまして、2年前ですかね。要するに会話をかわすことによってどういう教育的な効果があるのだろうと。愛玩動物、ウサギとかチャボとかそういうのは多いのですが、カエルを飼うケースはないのです。それを分析したグループ、約2カ月、小学校に張りついてやったということですが、大変よい研究、ちょっと驚くような発表だったので全員連れていきました。みんな自腹で、飛行機でやってきました。ラーメン1杯やっぱりごちそうしましたけれど。こうやってなるべく彼も活躍させてやる、ホンモノとやっぱり現場で体験してもらおうということをします。

それからこれはことしですが、カエルや喫茶という、私にとっては好都合な喫茶店がありました。そこにやはり出しています。市民を対象に自分たちは授業を、一部ひれきするというようなことをしています。

少し早口でお話しましたが、こうやって学生を前面に引きずりだして、かなり意図的にいろんなものを強化しながら学生の意欲を引き出すとしたのが「蛙学への招待」という授業です。早口でごめんなさい、以上です。

○司会 先生、どうもありがとうございました。では、5分ぐらいありますので、質問があったら一つ、どうぞ受け付けますけれど、何か、よろしいでしょうか。どうぞ、所属と名前を言ってください。

○小林 先ほど発表させていただきました、日本教育大学院大学1年の小林 将と申しますけれども。

最後のサイエンス・カフェというのがちょっと気になったのですけれども。私も参画というのをもっと一般の人にも広めたいなと思っておりまして、いい方法がないかなと今考えておりましたけれども、サイエンス・カフェというのはなかなか新鮮だなと思ったのですけれども。実際にこれに参加した学生さんからはどんなレスポンスがあったのですか。

○鈴木 今、学生は大変乗り気で、まさに自己犠牲をして準備をしました。非常に満足して、来年もやりたいと言っています。それには、いきなり行ってできるものではなくて、やはり下準備があります。このカエルや喫茶を使って話をすると、その前年に私はちゃんと地ならしをした上で、文脈の中に彼らを置いたということになります。

○小林 ありがとうございます。

○司会 どうもありがとうございました。

一番楽しみなDVDは、パネルディスカッションの一番初めに見させていたきたいと思えます。鈴木先生、どうもありがとうございました。拍手をお願いします。

では引き続きまして、森尾先生に御準備いただいている間、森尾先生の御紹介をいたしたいと思えます。

森尾先生は、三重大学生物資源学部共生環境学科環境情報システム工学の先生でございます。研究分野は機械システム、ロボット工学、メカトロニクス、バイオメカニクスなどでございます。

三重大学の森尾先生のところにも、我々授業を見させていただきました。受けた印象は、まさに鈴木先生と森尾先生は、東と西の竜虎という感じでございます。これはやっぱりすごい熱が入っているなというすごさを感じさせていただきました。まさにきょう、お2人が並んでいるのはすごいことだと私は思っています。

森尾先生のすごさは、恐らく今回の標題を見たらわかれると思えます。「15回愛情いっぱい刺激を与え続けるための授業作り 森尾DNAとは」のタイトルからも、森尾先生のすごさを感じられると思えますので、私も森尾先生のプレゼンテーションは初めて聞くので、非常に楽しみにしております。

森尾先生、よろしく願いいたします。

「15回愛情いっぱい刺激を与え続けるための授業作り

森尾DNAとは」

三重大大学 森尾 吉成 准教授



○森尾 三重大大学の森尾です、よろしくお願いします。

実はこのタイトルをつけたときは、私以上に愛情のある先生はいないだろうと思っていたのですが、今、鈴木先生の講演を聴いて、実はこの前のタイトルはこちらの方がよかったのかもしれないと思って、ちょっと圧倒されました。

きょうは、主に5枚のスライドを使って全体的に紹介させていただいて、それ以降のスライドというのは、具体的に私が使っている道具、仕掛けをすべてもれなく図解をさせていただきます。またこれも時間がありましたら、具体的に皆さんの質問も聞きながら、少し紹介させていただこうかなと思います。

それでは、まず森尾DNAというのは、よく私の卒業生が会社に行ったときに、森尾DNAが入った学生さんであれば信用できるんじゃないかと言われたところから少し取らせていただきました。授業を、若いころはもう熱く、強制的にやっていたのですが、次第に年がたつてくると、いかに効率よく効果的にやるかというのを考えるようになります。そこで、最近すごく私が意識して、ただがむしやらにやるのではなくて、ここに挙げている幾つかのポイントをすべてきちっと押さえた上で、これも押さえるというのは常に意識した状態で授業をやるというところです。

まず、最初に、私たち教員がやらなければいけないのは、学生が学ぶ環境をきちんと整えてあげないといけない。環境は必ず大事で、これ一番先生が意識しなきゃいけないところだと思います。

それで、二つ目はちょっと置いて、三つ目の関係性なのですが、最近ですね、ダイエットをするサイトがあるのですが、1人で授業を受けるのではなくて、周りの学生たちと、あの子も頑張っているのだとか、そういう関係性を意識した上で授業をつくらないといけない。そういう意識をするような授業をつくりたい。

あと最後の学習性なのですが、これは先ほど発表でも言われていた内容でもちょっと関連するのですが、学生が、僕ができるかもしれない、頑張ればできるのだと思う、自分にはもっともっと潜在的な能力があるのだというのを信じ込ませて、どんどんどんどんやる気を出させて学習させる。この三つのポイントをやっぱり押さえなきゃいけない。その上で、我々教員はこのABC理論というのがありますが、まず条件を与えて、例えば警察官が立っているとプレーキを踏んでしまうのです。何かの条件を与えて、すぐ行動を起こして、それが結果に結びつければ、また次の行動に

移るという、この結果を必ず出させるという仕組みがやっぱり大事だと。ただ苦しいだけではない。

もう一つ、私、ピクニックと呼んでいるのですが、行動を、学生が悩んでいるときに行動をふやしてあげた方がより学生が勉強するのか、それとも減らしてあげればいいのか。その辺をまず考えるのです。すごく悩んでいる子に、PositiveとNegativeつてあるのですが、Positiveというのは行動を与えることです。Negativeというのは悪い意味ではなくて、悩んでいるところ、つかえているところの行動を抜いてあげると、ちょっとその課題を横に置いてあげて相談に乗ってあげるとか。Immediateというのはすぐにその行動を加えてあげたり、引いてあげたりすると、その学生さんがすぐに結果が出てくると。あとCertainなのですが、これは必ず教員です。教員はこの行動、ケアをしてあげると、学生は必ず元気になるという自信満々のものを入れてあげると必ず学生の行動は変わります。これをピクニックで、Negativeでもいいのですぐに結果が確実に出るようなことを意識して教員がアドバイスをしてあげる。

あとは、やっぱりいっぱいの愛情。いろんな先生がおられるのですが、ピクニックも大事なのですが、やっぱり愛情で、目の前の学生を自分の子供のように思って一生懸命導いてあげると。私は、非常勤講師でいろんなところへ行くのですが、非常勤講師で行く先ではなかなか怒れないのです。こらっ、というふうに言えないのですが、何でだろうと思ったら、15回なり、半年なり、4年間、6年間つき合うという腹をやっぱりくくっているのです。なので、その言う瞬間というのは、注意をする瞬間というのは、その後のフォローも含めて考えた上で怒っていると、指導をしているのです。

私が、今回の講演をいただいたときに、主体型の授業って一体何だろうというのを定義してみました。これは私の授業もすべてそうなのですが、教員は間違いにできる存在であるというのを、口ではなくて行動、もしくは質ですね。授業の質とかで必ず毎回見せなきゃいけない。これはもう絶対です。これができないと、授業がコントロールできませんので勝手なことを始めます。まずこれです。

二つ目は、間違いのレベルが目前にいても、あなたたちもできるのですよ。十分能力ありますというのを必ず学生に自覚をさせて、授業に臨ませると。私が特別な存在じゃなくて、あなたたちも特別な存在になる可能性がある。それを実現するために、私の授業を受ければ、この先生を受ければ大変だけれど絶対成長するはずだという信頼関係をやっぱり築かないといけないですね。信頼関係があれば、多少理不尽な、よくむちゃ振りって、森尾のむちゃ振りって言われるのですが、めっちゃくちゃ突然振るので、

きょうの図解の講演を聴きながら思ったのですが、私の授業は毎時間1分間プレゼンテーションというのがあって、1枚の図解でしゃべるのですが、それを今、7回、8回やると大体13回ぐらい毎週やります。いきなり、図解が終わった学生に、もう1回図解を試みよう。君の図解はよかったからいきなり振ったりするのですが、それはTAに対してもやります。TAもぼつと見ていたらいきなり発表させられるので、そういうむちゃ振りをできるのも、やっぱり信頼関係が成立しているからと。

あと主体型ですから、学生が主体型になっているということは、腹を学生がくくって、学生がやる気を出していないといけませんので、

いかに腹をくくらせるかと。先ほどのカエルの解剖も、多分、彼らも腹をくくってやっていると思うのですね。途中で多分逃げ出すこともできると思いますけれど、一度決めたことだから、最後までやり切ると。こちらは、これは大事なのです。私の授業は必ず予習復習をしてもらいます。予習した内容、復習した内容を必ず、後で見ただくようなサイトに出していただきます。出していた内容が私が見るのですけれど、必ず、ただ予習してきてください、復習してきてくださいではなくて、具体的に何々をしてきてくださいと言うのですけれど、やろうと思うとむちゃくちゃ時間をかけないといけないので。私の場合は動画のコンテンツをつくりまして、それを10分ほどなのですけれど見てやると予習もできちゃうと。難しいと思っていたこともできてしまうという動画を15回分つくっています。これでいくと必ず予習ができます、できてない学生は怠けている学生です。それをみんなの前で言うのです。できてない人は、あなたはできないのではなくて、やってこなかっただけで言うのですね。

あと、教員が90分間完全にコントロールしなくちゃいけないのですけれど、私の授業は学生がしんどいので、90分間本当にもうヘトヘトになると。ほかの90分間の授業と違うところは、寝てもらえないし、何か座っているのだけれど何か落ちつかないという、そういうような感じです。

あと、これは前回こちらに来させてもらったときの質問に、学生が踊らされているだけじゃないかと言われたので、それはちょっと少し考えてまして。最近答えを出しまして、学生が主体型になるためには、ある程度の強制は必要であるという結論に至りました。これは、自分の父もそうなのですけれど、やっぱり強制する、さっきの信頼関係、親密な関係があった上で完全にコントロールした状態で授業が展開されていると、学生は少し安心した。安全基地って茂木さんという脳科学者が言われましたけれど、安全基地の中で、相手に対して頑張ろうじゃないか、目標に対して頑張ろうじゃないかというふうに安心してできるのですね。なので、やっぱり教員は完全に授業をコントロールできるように、段取りをしっかりとしないといけないと。段取りをしてない先生は、すごく不安です、授業を聞いていても。ということだと思いますので、これは強制というのとはちゃんと段取りをしておくということにもつながります。

あとこれは、私の授業の中で受けた、刺激を受けたことは、ほかの授業でも必ず発揮できないといけないと。今、1分間プレゼンテーションで毎週やっていただく課題は、毎朝起きて、あなたは何をするのかと。一言朝宣言とか、あとGetting things doneという、ビジネスの世界で目標を決めてそれをクリアするかどうかというのを、毎日振り返りするというのがあるのですけれど、そういうのもやらせています。毎週毎週やるのですけれど、それは私の授業のためにプレゼンするのではなくて、自分たちの生活を見直したり、いかに毎日を有意義な時間を過ごしたりするかというために、もうかなりそういうことを意識してやっていますので、ほかのクラスの先生が、おたくのクラスの学生さん、元気ないねと言われると、もうその次の週の授業には、こんなこと言われていたよということで、必ずフィードバックをかけるようにしています。

そういう主体型の授業をしたいのですけれど、なかなか難しいので、いろいろな仕組みをいっぱい考えてやっています。かなり大変なのですけれど、三つにまとめられるかなと。皆さんもそうだと思う

のですけれど、つくるときには、私の場合は授業のしっかりしたトレーニングメニューをつくと。90分間は刺激を受けに来ていただいて、帰った後にトレーニングしていただくという、しっかりトレーニングメニューをつくと。これは毎日、毎回するためのトレーニングです。だから腹筋背筋を私がやるのではなくて、学生がやらないといけませんので、そういうトレーニングメニューをいっぱいつくっています。

後はコーチングなのですけれど、これはもう本当にきっちり、出したからにはちゃんとケアをしないといけませんので、これが大事なのですけれど、学生に対する立ち居振る舞いや学生の気持ちはぶれてはいけないと。私がぶれちゃいけないのですね。ずっと15回、もしくは4年間、6年間ぶれずに、常に目の前の学生のために愛情を注いでいるのと、後は学生の成長を楽しく見ていると。そのために一生懸命段取りをして授業を用意しているので、皆さんもそこで活躍してくださいという、この軸は絶対ぶれちゃいけないので、手は1回も抜かれません、授業。きょうはまあいいや、適当にやろうなんていうことは絶対せずに、きょうの90分間をどう展開するのかというストーリーを必ず決めてから入ります。なので、途中5分間捨てたり、10分間捨てたり平気でするのですけれど、やること決まっていますから、ああ捨てられると思った瞬間に遊んだりしているのですね。そのストーリーをちゃんと決めていると。あとケアをちゃんとすると。

あとは最近特に、教育の世界で少し仕事をさせてもらうようになってからやり始めたのですけれど。私が学生のころは1人で勉強するのが楽しくて、ほかの人と一緒にするのが嫌で、何で一緒に勉強するのだと思っていたのですけれど、意外とお互いピアワーク・ピアレビューとかピアチェックとか書いていますけれど、お互いが真剣にすると、1人じゃなくて芋づる式に、ぐぐっと伸びていくのですね。だれかを伸ばしてあげると、その子の刺激を受けた周りの子が伸びていきますので、それをやる仕掛けというのはすごく大事だなと。1分間プレゼンも、私たちが想像している以上に、学生がいろいろな人の刺激を受けているというのがわかってきました。これもそうなんです。

とにかく課題をバンバン与えて、彼らは頑張って、リフレクションが自分もしますし、周りからも聞きまして、先生からも聞く。そういう何か行動したことによって、どこからでも反射が返ってくるという、この部屋も防音設備なので、いろんなところから反射して返ってきますけれど、音が返って来ない部屋に私が行った話をよく学生にして、返ってこない自分というのが存在しないのですごく不安になる、長時間いれないと。そういうのも、だからこういうピアチェックとか大事だと思います。

それでは少し時間があるので、九つ、私は授業を実際つくるときにいっぱい道具を使っている中を九つに分けて、みなさんはどうい道具を使っておられるのかなというのをぜひ知りたいので、ちょっと質問を会場にさせていただきたいなと思います。

まず一つ目。授業を完全にコントロールしたいというときに思うと思われるのですけれど、どういう行動をされているでしょうか。

○会場 1番ですが、同じことを考えていますね。とにかくびっくりさせてやろうという、腰を抜かすような体験をさせるということは心がけていますね。

○森尾 授業の第何回目ぐらいの。

○会場 これはいきなり1回目で、1回目です。

○森尾 具体的にはどうい。

○会場 あんまり手のうちを言うと。スタンダードな、僕は教育学関係なのですけれど、教育学のスタンダードなシステムを使って、この本がいかにだめかというのとはことんやり倒してということはやりますね。

○森尾 地球環境科学か何かの先生が、最近の地球温暖化説は全部そうであるという、本は全部そうであるということをよく言われる先生がおられるのですけれど、授業の最初に言われるから、ええ、本当なのという。ありがとうございます。

私のやり方なのですけれど、いきなり三重大の学生なので、皆さんブランドがあるのだからちゃんとやりなさいというのを、1年生の最初にするのですけれど。心構えと基本姿勢という、この誓約書みたいところに、自分で書いてもらうのですね。そこで一番初めに言うのが、あいさつちゃんとしなさいと。これ普通に言わないのですけれど、皆さんがきょう入ってくる姿をずっと見させていただきました。これが社会人のとき、私が面接官とすると、あなたたちはこういうふうに映っていますよという。あなたたちがあいさつをすれば、こんな情報がたくさんもらえるのだけれど、あなたはあいさつをしなかったからという、これはもう15回ずっと見ているのですけれど、そうすると私の授業で学生が入ってくると、何か見られているという、ずっと見られているという。あくびをするときも、口に当てない子が最近多いのですけれど、ああ、だれか口があいていますねとかいうのをちらっとそれとなく言うのですけれど、常にどこで何をしても見られているという状況をつくる雰囲気や前面にここで出しちゃうのです。いきなりあいさつで来ますから、情報の授業なのですけれど、何だ、この先生はという。

最後まで全部言うと、駅で自転車をほうり投げているやつがいるとか、そういうようなこともどんどん言って、常にあなたたちは見られていて、どんどん成長できますよというのを最初に言ってしまっ。実はこの情報の分野のスキルなんて全然見せないのですね。これをやると、昔の学生は引いていたのですけれど、今の学生はなぜかありがとうございますという、何か怒られることになれてないのか、すごくそういう反応してくれます。

あと、プレゼンの指導もそうなのですけれど、自分がみんなの前で見せるという、学会とか行っているときに私の姿を見せるというの、完全にまねできない、そういうのを見せるのも一つのすごさを見せるというところになるかもしれません。

ここに行きたいのですけれど、これ多分皆さん悩まれているのですけれど。学生の習熟度の差をなくしたいと。これは、実はここに来たときに、今年の後期は、この夏に来たときに、この取り組み、差をなくす取り組みをしてみたいというのを宣言して帰りました。実際に

これどうしたかといいますと、実は毎時間、最初の10分間は小テ

ストということで、小テストをします。小テストには必ず、今までは点数つけなかったのですけれど、必ずクリアをすればトータルで2点分ぐらいの点数をあげますという、毎回毎回クリアしていくと評価が高くなるのですけれど、それをやっても習熟度はどんどん差があいてくるのですね。15回のうちの第7回目の90分間を来週捨てますと。捨てるので、皆さんは来週のテストでできる子とできない子に分かれてくださいと。分かれた後に、できる子とできない子に対して教えていただきます。普通教えるという、何でできない子のために教えなきゃいけないのだとなるのですけれど、それはちゃんと説明をしまして、大学で学ぶというのは、学ぶスキルはいっぱい鍛えられるのですけれど、教えるスキルというのはなかなか鍛えられないので、できる人は学ぶスキルも学べるし、教えるスキルも上達するのだから、そんな機会ってないでしょうと説明して、来週までに教材を全部準備してくれというのをやりました。これがうまくいったのと、もう失敗したクラスと二つありまして、うまくいったのは25人ぐらいのプログラミングの授業はうまくいきました。これは完全にコントロールできる人数なので。ただ50人は完全に失敗しまして、最初の小テストをクリアできたのが2人だったので、教えられる側の方が余りにも多くなり過ぎて、その授業は捨てました。捨てて、何も授業できずに90分終わってしまっ、さて次の週、何をしようかというのがポイントなのですけれど、また本来の授業に戻っちゃだめなので、90分間愚痴を言いました。愚痴というか、何で皆さんやらないのだろうな、みたいなことをやらせるために、ちょっと覚えてないのですけれど、いっぱいしゃべりました。授業のときに私がしている段取りとかも全部説明をしまして、だれのためにやっているのだろうという、自分たちが今逃しちゃうと成長できないのではないという、こんなにやってもやらないのだから、ほかの先生だと絶対しないでしょという。皆さんがほかの授業でやっている姿勢というのは、1.2掛けとか、3掛けの態度で私の授業で来ているはずなので、そういう姿を見てもまだまだですなというのをしたのですけれど。そしたら、次の週から見違えるように変わらして、自分のためであるということと、あともう一つ、強烈な言葉は、あなたたちができないと、わからないと言っているのは、嘘やと、絶対できると。できないって言うから、言って自分たちを安心させているだけじゃないかというのを強く言ったのです。

そうすると何か、結構7回目、8回目になると、森尾先生の授業を受けていると、成長させてくれると思っていたと。でも、成長するのは自分であって、自分でやらないといけないのだというのにまた気がつきましたというので、また元気よくなったのですけれど。そういうことを15回以上かけ続けるというのは、どんどんどんどんライブで学生の状態が変わってきますので、その学生の一瞬の動きを見抜いて、その場で、そのタイミングでばつと言わないと、来週とかその次の週でいいやとか、15回目に全部まとめて言えはいいやというのは絶対だめです。

だから、やっぱりコミュニケーションというのは、そういう意味では頻繁にしないといけないということで、これも先ほど鈴木先生がやられていた、私も授業アンケートって取ってしまっ、表8回分が8回分の紙です。ああ、4回分ですね。4回4回で、1枚とちょっと使うのですけれど。これは私が枠を全部決めまして、この授業で一番私が伝えたかったことを、あなたたちの言葉で書きかえてくださいという

欄。二つ目が、チェックリストですね。集中できたかとか、これはチェックすればいいのです。後はきょうの理解度は何パーセントか。これで、ここはKPT軸という、振り返りの軸なのですけれど、今現在続けていること、もしくは問題になっていること、挑戦しようとしていることというのを、好きなレイアウトでいいので書いてくださいと。これを1週間に80人ぐらい来るのですけれど、これに必ず赤を入れて返すという作業を毎週しています。これをやると、いろいろ学生たちのふだんの行動が全部見えてきます。何であのとき変な反応したのだろうかすべて出てきますので、そういうのを。あと、過去の情報が見えますので、彼らも第1回のときの自分を思い出せますので、そういう点でも成長も感じているというのがあります。

あと済みません。今週のメタ認知という、先ほどメタ認知という言葉を見ていたのですけれど、毎週必ず予習復習をしていただいて、三つ答えていただきます。あなたの今のモチベーションレベルはという、プラマイ3ぐらいで書いてもらって、これ毎週やっていただくのですけれど、あと1週間の学習時間は。あとここから下は復習した内容。復習してもできなかった問題で、予習した内容。この三つをすべて入れて、提出してくださいと。これを15回提出するとあなたには1点あげますというような形です。こういうメタ認知をやっていたりですね。

せつかくなのでプレゼンテーションですね。一言朝宣言とかありますし、いい声を出しましょうとか、いろいろあります。今また大変変わっているのですけれど、本当に毎日学生は、毎週毎週自分の行動を振り返るようなプレゼンテーションが入ります。

本当はもっといろいろ見ていただきたいのですけれど、最後に評価ですね。皆さん、評価はすごく大事です。シラバス書くときに、評価という、レポート50点、期末テスト50点とか、期末テスト100点とか軽く書かない方がいいと思います。評価は学生に期待した行動に対して、先生はどういう点数をつけるのかで決めますので、すべてのストーリー、何をさせるのかという15回分のストーリーに対して評価を決めていかないとちょっと大変になります。大変というのは、学生が腐っちゃいます。だから課題を与える、プレゼンをさせるというのは、それに対してどういふふうに点数を与えるのかというのをすべて意識します。だから、すべてのストーリーが終わった後に点数を考えるぐらいの方がいいです。

最後これで、これが一番大事なのですけれど。私は90分間のうち20分間はいつも愚痴じゃないのですけれど、本当にいろんなメッセージを伝えます。そのメッセージの中には、先週実は、あそこに立っている大学院生がどこの会社の面接を受けてきました。こういう質問をされましたよねという、いきなりモデル学生にぼんと振るのですけれど、その学生は当てられるとは思ってないのですけれど、いつものむちゃ振りだなというので、どういふふうな質問をされて、どうだったのかというのをそこで言って、今の1年生との差を感じさせるのです。3年後にはああいふ状態にならないといけなとか、そういうようなのを常に意識させるように。私の場合は特に、先ほどの先生みたいに外に連れて行くことができないので、いつも外に出て行って仕事をしているような感覚で、そのギャップを感じさせながら授業を続けていくのを心がけています。

あと、私の頑張っている姿というのはおかしいのですけれど、私が一生涯懸命になっている姿というの、やっぱり背中が語ってくれ

ますので、親と同じかなど。さつきも杉原先生としゃべったのですけれど、自分の親と久しぶりに会ってちょっと会話したのですけれど、親と同じことをやっぱり今やっているのかもしれないというのを感じました。なので、やっぱり人を変えるのは気持ちであって、方法とかではなくて、愛情いっぱいやった方がいいんじゃないかなど、私がそう信じているものです。以上です。

○司会 森尾先生、どうもありがとうございました。では、質問を一つ受け付けたいと思いますけれど、どなたかいらっしゃいましたら。どうぞ。これ報告書に載せますので、そのようにお考えください。

○篠崎 東北学院大学の経済学部の篠崎と申します。本日は大変貴重なお話をいただき、ありがとうございました。

先生のお話を伺って、小講義、私、大講義を持っているのです。500人規模なのですが。

○森尾 500ですか。

○篠崎 はい。先生の講義、話を伺って、小講義の授業でしたら先生のやり方って非常に、私も勉強になりましたし、大事だと思ったのですが。大講義の講義に対してどのように進めていくのがいいのかなというところが、ちょっと不安があつてですね。

○森尾 500人ですか。一度に500ですか。

○篠崎 そうです。そういうアイデアがありましたらお教えいただきたいなと思います。

○森尾 ただ、グループ分けとか、みんなが怠けられないような雰囲気をやっぱりつくって、授業をコントロールして。聞きっぱなしではなくて、学生が何か答えを出して、90分後には何かを出して帰らないといけなという課題、行動の課題を与えるだけで、時間がなというのわかりますから、ぐわっとみんな集中してやるので。

あんまり聞く一方の授業を500人にされるというのは、私ももし担当したとしてもやらないと思います。500人に何を教えたいのかという、500人なんて無理なので、何を教えたいのかというのが一番大事なので、それを教えたいのであれば、アリバイ的に授業をやるのではなくて、本当に一つのこと、あいさつが全員でできるようになるでもいいので、そういうための企画を考えられた方が、ちょっと500は普通の授業では考えられない。

○篠崎 はい、わかりました。ありがとうございました。

○司会 時間となりましたけれど、大人数教育は、500とかいうものは私学さんの文化系に割と普通にありますがね。経済とか法律なんかは。ですから、またこれも恐らく森尾先生、この間に、パネルディスカッションまでに考えていただければいいから、またパネルディスカッションのときに、ちょっとまたアイデアをいただきたいと思います。もう一度森尾先生に、愛情いっぱいの拍手を。

○司会 それでは、第1部の最後となります講演に入りたいと思います。

杉原真晃先生は、山形大学の基盤教育院並びに高等教育研究企画センターの准教授でございます。専門は高等教育、大学教育の専門家です。そして今、教育GPの学生主体型授業を3人で担っていたでいる、その中心となる先生です。じゃあよろしく願います。

「教養としての判断力・知識欲を育成する
—パイロット授業「未来学へのアプローチ」—
山形大学 杉原 真晃 准教授



○杉原 皆様、こんにちは。はじめまして。山形大学の杉原と申します。前にスライド等ありますけれど、基本的には皆様のお手元にあります、私のレジュメに添ってやっていきたいと思っております。よろしく願います。

それで、私は実はまだ教員歴3年弱でして、実はここにたどり着くまで幼稚園の教員をしていたのです。幼児教育でわっとかやっていると、今度大学生相手にわっとかやらなきゃいけないという、この揺りかごから墓場までみたいな感じでやっておりますけれど。その幼児教育でのノウハウを全面的に生かしたいなと思って、授業デザインを私の方はしております。

きょう御紹介させていただく「未来学へのアプローチ」という授業は、私だけではなく3人の先生とリレー方式でやっていますけれど、全体のまず特徴を御紹介した後に、私なりの工夫、幼児教育をうまく、エッセンスを入れながらやっていく工夫について御説明したいと思っております。よろしく願います。

まず、この学生主体型授業、「未来学へのアプローチ」の概要と上に書いていますが、テーマ、ねらい等はここに書いてあります。主体的に学ぶというのはどういうことかということについて、線を引かせていただいておりますが、知識を教えられて終わりとかそうじゃなくて、教えられた後で、自分でつかみ取りにいくと。そして自分で考える、そして仲間とともに考え合う、そしてそれを元に自分をまた再構築して深めて、最後はそれを自己表現していくということですね。そういうことを目指しています。

学習目標ですね、その1-2に書いています。6点ほどトントんと挙げましたが、学生主体型、あるいは学生の参加型の授業といいますと、よく批判されるのが学生は動いたと。動いたけれど、何を学んだのかということです。動いたけれど、それは大学生としての学びに果たして匹敵するのかこの授業は、という批判をやっぱよく

受けます。私のチャレンジというのは、動いた結果、動いたからこそ大学生としてより深い学びにたどり着きましたねということにチャレンジしたいわけですね。それはもう私どもが迷信のように考えている、すごい大上段からの講義の方が、すごい学びが深いということから少し脱却したいという思いが一つあります。

そういう意味で、この学習目標、6点ほど挙げてはいますが、やはり一番上ですね。理解していく。そして二つ目、それによって自分なりの考えを構築していく。ここを外してしまって、単にディスカッションの、プレゼンテーション能力が上がったとか、そういう授業目標であればいいですけど、こういうテーマということに対するしつかりとした理解、そしてそれを元にした自分の考えの構築ということを重要視しているということです。それプラスアルファ、いろんなコミュニケーション能力だとか、そういったものも考えているというのがこの授業の枠組みです。

さて、授業の背景、1-3ですけれど。この紫色のパフレットが皆様のお手元にあるかと思っております。これがこの教育GP、平成20年度に採択されて、これの一環ということになります。

これはどういふものかといいますが、前にちょっとスライドがありますが、社会人基礎力を育成しようという大きなテーマです。社会人基礎力とは何かといいますが、レジュメの1ページの一番下に書いてありますが、積極性、コミュニケーション力、そして課題発見・解決能力等と定義をしています。こういう能力を育成するというプロジェクトです。こういうふうな学生が主体的に活動して、社会人基礎力を身につけるといふ授業を開発していくわけですね。この授業を開発しつつ、そういう新しいチャレンジ、事業開発をするということを通してFDを進めていこうという、そういうFDのプロジェクトの一環に該当するのがこの授業、「未来学へのアプローチ」です。

じゃあレジュメ、裏びらつとめくっていただけますでしょうか、2ページ目ですね。学生主体型授業「未来学へのアプローチ」の詳細ということで、全体図を、まず、ぱっと御理解いただきたいなと思っております。第1回目オリエンテーション、そして2回目から4回ずつ、3人の先生が担当して、最後2回で全体発表のまとめの作業と発表会をするということです。テーマは、建築学の教員によります未来の持続可能都市。2人目が私ですが、教育学の観点から格差問題ということで取り上げました。3番目が化学の先生が環境問題について取り上げるということです。これの共通のテーマは未来学ということで、未来をどうつくっていくのか。14回、15回目にありますように、学生はこの未来の持続可能都市をつくるという方向に向かってずっと建築学、教育学、格差問題ですね。あるいは環境問題について考えていくという、そういうリレー式講義です。

それで2-2ですね。学習過程(個別)と書いてありますが、これちょっとビデオを見ていただきながら解説をしていきたいと思っております。音声はほとんど出ませんけれども、私の声で御説明していきたいと思っております。

(ビデオ上映)

これがまず、1人目の先生のですけれど、未来の持続可能都市ですね。現在の都市の問題点、課題等を挙げながら、学生はここに未来の持続可能都市はどういふものなのかということのイメージを共有して、これから都市をつくっていくのですけれど、これ今工作して

いますね。工作って、学生たちは非常にもう純粋に、わあ楽しいってことで始めていく。ここには役割分担があって、都市づくりということですから市長の役とか、私は環境委員、私が財務大臣とかそういう形で環境の問題、あるいはいろんな交通の問題とか担当を決めてやっていく。そして実際につくっていく。そしてこれは授業内、90分だけじゃなくて、授業外でも自習室というのを設けておりますので、そこでつくっていくということになります。

続いて私の授業ですけど、理想の高校教育をつくるということをやっています。授業外学習ですね。基本は授業外学習で文献を読んできて、それをまとめてプレゼンテーションを行うということになります。ここで1分間プレゼンテーションを使わせていただいて、学生がこれによって自分が考えたものを表現して、それをみんなで共有するということになります。

それでグループワークですね。ディスカッションをグループ内でやりまして、その後、ジグソー法というのをを使いまして、それぞれAグループでしたらAグループが散らばるのですね。Bグループの人も散らばって、それぞれ自分がAグループ代表として、Bグループ、Cグループの人たちに説明しに行く。自分のところはこういうふうな議論だったよという、そういうのがこのジグソー法のグループディスカッション。これちょうど今、それやっているところですね。

それで最後、授業のまとめとしまして、4回目の授業のときに全体発表という形を取ります。グループディスカッションの共有の仕方を、私2種類使っていて、そのジグソー法によって共有する場合と、この学生がやっているように全体に対して発表する全体発表会という共有の仕方と2種類を使っています。ここで質疑応答も含めて進めていくというふうになります。

続いて、3人目の、環境の先生の授業ですが、授業外学習でこれもみずからの環境問題に対する興味関心をまず出してもらって、それを元に先生の方がグループングをします。そして、今回森林伐採とか、水ごみ問題とか、地球温暖化、エネルギー問題というふうなグループができたのですが、これを元にグループディスカッションをやっていくというふうになっています。

そしてグループで分担をして授業内で情報を調べていくのですね。あるいは授業外で、また個人、各自分担をして環境問題に対するデータを取ってくるということになります。それを調べてきたもの、そして授業内でインターネット等が伝える部屋ですので、そのデータを元に、じゃあこの問題どうなのかな、環境問題ってこうやって言われているけれど本当なのかな。先ほどもちらっとありましたが、温暖化って二酸化炭素は関係ないのではないかな、という議論をしていく。そしてグループの中で、その議論が終わったらプレゼンテーションに向けてファイルを、パワーポイントのファイルを授業内でつくって、こういう形で発表していくという共有の仕方をしています。

もう一つ、この先生と私と一緒に、こういうプレゼンテーションの発表とともに、ジグソー法を使って、こういう形です。これはグループプレイでジグソー法をしているのですけれど、こういう形で自分のところのグループで、授業内で改めて調べて、考えて、議論し合ったものを共有していきましょうということを取っています。これはちょうど学生が、自分たちのグループの画面の後に、違うグループのメンバーが発表しているシーンです。

最終的にこの授業では、4回目の授業で10枚のプレゼンテーショ

ンファイルで各テーマについて発表を行っていく。そして総合評価を行っていくということです。皆様のレジュメのところ、後ろの方に資料1というのがありますが、プレゼンテーション採点シートというのがございます。見つかりましたでしょうか。

このシートを元に学生相互の評価をし合う。そして、優秀なグループには表彰をします。ボールペンとか、素直に喜ぶのですね、学生さんね。そういう形でやっています。こういう形で採点シートを事前に準備しておくことで、またプレゼンテーションがどういうものかというのことも学生がわかった上で、プレゼンに挑めるということになるわけですね。

じゃあレジュメに戻っていただいて、3ページ目の(4)に最終成果発表というのがございます。こちら、この前に出ましたけれど、こういう形で最終的に模型が、都市の模型ができていくということになります。そしてこれを元に、この実物とあとパワーポイントでまたファイルをつくって、未来の持続可能な都市はこうこういうふうには私たちが考えてつくりましたという発表を行っていく。そういう全体の流れでパパッと行っちゃいましたけれど、理解できましたでしょうか。わからない場合はまた後ほど、皆さんにも想像力にも期待したいと思います。

2-3をごらんください。成績評価ということになりますが、観点はこのようになって、方法はプレゼンテーション、総合評価、ワークシート、学期末レポートなどということで、各先生方が事前に学生に伝えるようにしています。受講学生はこのようになっております。

では、今、大体概説をしてみましたので、じゃあ具体的にこの学生の主体性、あるいは意欲の向上のためにどう工夫しているのかということをお紹介していきたいと思えます。1から3まで、括弧に書いてあると思えますけれど、私の大体授業の構想というのは、幼児教育のときからそうだったので、まず環境設定。教材をどういふものを使って、どういふ環境づくりをするのかということがもう、ここがみそなんです、これを外すと幼児教育はできない。大学教育というのは、意外とこういう固定機で何もできないみたいに思えますけれど、そうでもなくて、環境というのはいっぱい構成の仕方があるのですね。それを考えていきたい、そういう観点でまず分析をしています。

そして二つ目に活動設定、その環境の中でどういふ活動を学生にさせるか。

そして最後、それをサポートするために教員がどういふ働きかけ、声かけをしていくのかということの3点から御説明したいと思います。

まず3-1ですね。教材・環境設定ということですが、この学生主体型授業のための実験的教室というのがあります。先端学習ラボと。本日、すべてが終わりましたら皆様に御案内したい場所でございますが、エル・キューブと名づけました。リーディング・ラーニング・ラボトリ、LLL、エル・キューブということなんです。

机といすに車輪がついていて、可動式なんです。簡単にすすっと変えられます。ですからここにちょっと出ていますが、グループ学習にしましょうと言うと、ずっと学生が自分自身でグループ学習の形態に変えることができます。あるいは全員が前向きにぱっとすることもできる。本当にスムーズにすすと動くということになります。

そして、色、白に赤とかしたのですけれど、やっぱり色づかいも、あんまりこの部屋と対比したらいかんのですけれど。学生がこの部

屋いかな、とふと思うとか、座ったときに、ああ何か快適だなとか、とても大事なのですね。非常にもう、冬ただ寒いだけでも集中できないというのと一緒に、学生がずっとここに座って勉強したいと思う、あるいは集中できる、そういう環境。あるいは色づかいで、ちょっと黒とか青とかよりも白、赤ということでごつと高揚する、そういうものを意識してデザインをしています。

それで、レジュメに戻っていただければと思いますが、今、3-1ですね。自習室の整備、多様なメディア、アクティブ・ラーニングのためのツールとありますが、いろんなメディアを使いながら、学生にいろんな方向から、視覚、聴覚あるいはいろんな雰囲気ということもあるでしょう。いろんなメディアを使って、そしてツールもしっかりとこんなものを使っていくということを総合的にやっています。

じゃあ私は、AtoZと書いていますけれど、どういふことを環境設定に対して工夫しているのかということをごつと御説明したいと思えます。

まず、学生が身軽に、柔軟に学習形態を変えられるように云々と書いていますが、読むスピードの方が早いので私も省略しながら、全部読みませんけれど、こういうふうにして。それはどういふことかといいますと、例えばちょっと前のスライドをごらんいただいて、この教室の端っこに机を並べるのです。そしてここにかばんを置きなさいと。筆記用具と貴重品と、あと必要なものだけを持って座りましょうとしています。これによって、グループ学習しましょうと言ったら、簡単にすつと変えられるし、学生も立ち上がって動いたりしやすい。そして、不必要なものがないので勉強に集中できるというような環境ができます。私こういう固定机の場合ですと、大体真ん中に座れるようにして、その場に置きましょうというふうな授業の工夫をしている授業もあります。そういうふうなことです、このAに関してはですね。

Bですね。教室に入るや否や、授業外で作成して提出したパワーポイントファイルを、もう立ち上げておきましょうというふうにしてあります。ですので、学生がぱつと来たらもう自分でノートパソコンを出して、立ち上げてできるようにシステムをつくっています。私どもはLMSとしてBlack Boardを使っていますので、Black Board内に学生が授業外学習で、授業がある前日までに文献を読んだものを提出しなさいとしていますので、メールで送らせていますが、それを私の方でBlack Boardに載せているのですね。学生は授業に来たら、それでぱつと出して起動してということができるようになっています。

こういう形で、私はもう学生よりも必ず早く行くようにしています。この部屋はかぎがかかっているんで、僕が行かないと学生も入れないのですけれど、大体もう10分前には絶対行って準備してというふうにしていますので。学生がぱつと入ってきたら、この画面が出ているのですね。かばんを置きましょうとか、グループ形成しましょうとか、各自ラックからパソコンを取り出してやってくださいとか、ここにあなたの出したファイルがありますからここで立ち上げましょうとか、こちよこちよ書いてあるのですね。これによって学生はバツバツと準備をするということになります。

さて、Cですね。学生がやる気を向上させるように動画を準備し、視聴させるということです。これはやる気ですね、感動とかあるいはあこがれですね。自分たちはこうなりたいとか、こういうのもあるのだというちょっとした心の動き、揺れ動かしということで、自分たちにも何かできるのではないとか、何かやろうかなと思うような、そい

う動画を御用意していますけれど。例えばこれ「ゆず」ですけれど、音楽を聴かせているのですね。時間があれば後ほど思っていますけれど。こういう単純なこと、単純と言ったら失礼ですけれど、いわゆる大衆サブカルチャーといえますか、そいしたものをごつと取り入れられるのだろうと思っています。

さて、次ですね。D、学生が学習活動を通して、安心して自律的に学習を進めていけるように資料を配付すると。皆様のお手元、レジュメの資料2というをごらんください。私はこのように、きょうのスケジュール、バツバツと書いて渡しています。学生はこれによって地図を渡されるわけですね。きょうのたどり着くまでの地図、こうですよと。そして後はじゃあ皆さんで歩いて、頑張つて歩いていってくださいと、そういう授業設計なのですね。ですから、見通しを持って学習活動に参加できればという工夫をここでやっているわけです。

続きまして、Eですね。これはグループワークシート、あるいは個人ワークシートを使うということです。これがちょっと前にお見せしましたのが、個人ワークシートですけれど、こういう形で渡しています。学生はこれを元に、ただ議論するだけじゃなくて、考えたことをメモしていくと。あるいは、最初に自分がこうやって言おうと表現したことを先にメモしていく。文字があってそれを元に表現する。先ほどの林先生のラベルワークもそうすけれど、文字があるということは非常に強いですね。それによって表現しやすくなるということも、私も利用しています。そしてここには、毎回この授業に関しての感想とか意見とかもあつたら書いてくださいということも用意して、またメタ認知のツールにもしています。これで私との授業内では言い切れなかったコミュニケーションといえますか、そいしたものも図るようになっています。

じゃあ次のページですね。べらつとひっくり返していただいて、4ページ目。Fはグループワークシートですね。グループのワークも同じようにしていくということになります。

そしてGですね。逆算タイムマネジメントということで、これはちょっとスライドを出しませんけれど、タイマーを出すようにしています。1分間プレゼンテーションでしたら、あと何十秒ですよというのがぱつと出るように、わかるようにしています。そうすることによって、学生が自分でタイムマネジメントをするという形式にしています。

そしてHですね。同じようにこれですね、前にも書いています。LMS(Black Board)に参考資料等も載せる、あるいは授業の配付資料も載せることで、自習にも使える、復習にも使えるというふう環境設定します。

さて、続いて活動設定ですね、3-2。活動設定としては生活世界に関係して未来を志向するという、こういうテーマを使っています。そして、グループディスカッション、プレゼンテーションが主たる活動で、基本的には授業の中では教員は何も教えないと。基本的には教えない。可能な限りワークの時間に充てるというのが基本になっています。

そして責任のある学習活動を促すジグソー法とか、個人ワーク、グループワークの連携、あるいは視覚化するためのメディア、そして授業時間外学習を義務化しています。単位の実質化という議論とも関係しますが、授業時間外の学習は単位制度に含まれているのだよという話も学生に最初します。そういう上でやるのですよ、やるのが当然なのですよという議論をまず自覚いただくということになり

ます。

では、私はその中で何をしているのかといえますと、まずIですね。取り扱うテーマが格差と教育というものですから、学生にとっては非常に切実であり、かつ身近でほっておけない問題であると感じてもらいたい。そういう意味で高校教育ですね。1年生ですから、高校教育もう本当、つい最近まで学んできて、経験してきたことを元に語ってもら。先ほど鈴木先生の方からホンモノとの接触という言葉がありました。私としてもまず彼らの経験からスタートすることでホンモノと触れ合うと。そしてアカデミックな文献に当たってもらう。そっち系のデータもしっかり示して。そういうことを考えています。

Jですね。創るという、未来志向型ですね。何のために学んでいるのか、何のためにこの文献を読んでいるのかがわかるように、あなたたちが未来を創る、高校教育を創る、そのためにこの知識が必要なのですよ、このデータが必要なのですよという位置づけにしています。

Kですね。これはグループワークの意義が書いています。グループワークをするというのはこういう意味なので採用しています。

Lですね、居心地のよさ。やはり私の授業、決して楽じゃないのですね。本当に大変なのです。30ページぐらいの1章を丸々1週間で読んでまとめてこいと、それも1分間にまとめてこいということで、学生としては最後の授業アンケートなんかで、杉原先生の授業は大変だったということを書かれるのでね。大変だったけれど、すごく充実していたみたいを書いてくれるので、優しいなと思っているのですけれど。

そういう意味では非常にづらい。づらいだけに、最初のこのグループは貴重なかけがえのない仲間であって、やっぱり楽しい雰囲気だということから入らないと、彼らについては来られないのですね。そういう意味で楽しい雰囲気をまずつくろうとしています。

M、ただ乗りしないように。これ大きな問題だと思えます。グループワークをしていくと、ただ乗りしていくという問題点、必ずぶち当たると思えます。そういう意味で、そうできないような活動にしています。それが先ほどのジグソー法ですね。

N、さらに深く考えるように、そしてアイデアを明示化する、形に残していく。それを、達成感を元にやるわけですね。ただ何となく話をしてすっと忘れちゃうみたいなの、きょうも多分私、これだけしゃべっても皆さん忘れちゃうと思うのですよね。忘れないようにしていただくには、メモをしていただく方がいいと思う。それでこのレジュメもできるだけ情報をたくさん載せて、私は省略して言っているという形になります。文字にしてい、あるいは作品にしていということで達成感がある。そして、しっかりと身につけてもらうということを目標にしています。

これは学習ポートフォリオでと書いていますけれど、本当にそれを学生がその後で見直していけば、ああ自分はこの学びの旅をしてきたのだなとわかるからですね。それがまたメタ認識のツールにもなるということになります。

さて、O。授業外学習をやっとなければ困るという状況をつくっているのですね。それは一つには、それを元に授業のグループワークをさせるということがありますし、もう一つは冷たくあしらうのですね。私が、ちょっと宿題やっとなかったのですけれどと言ったら、ああそう、じゃあこれやっとなってねということ冷たくあしらう。ち

やんとやり出すと、すごいねということ褒める。単純なことですけれど、それだけであしまたなと思わせないとダメなのですね、そういうことをやります。

5ページ目。PとかQとかもあります。またごらんいただければと思います。

最後、教員による働きかけということで、テーマ解説、学習の要点の解説はやはり授業内です。明確にこういう観点で考えていきましょう、こういう観点をテーマでこれを読んでいくというのは、こういう意味がありますよという話をしています。

そして明確な指示、あるいはタイムマネジメントもしっかりと行います。グループディスカッション、プレゼンテーションに関する心構え、コツもしっかりと伝えます。単純なことですけれど、うのみにしたらいかんよとか、化学の先生でしたら、こういうグラフがあるけれど、これって縦軸の目盛りによっては全然変化がないように見えるよとか、批判的な読み方ということも提示します。

次、利己主義的学習観への批判的指摘とありますけれど。これはもう本当に、彼らはこれまで自分がいい成績を取るために勉強してきたわけですね。大学に入っても、自分が例えばいい就職するとかそのために勉強しているわけですが、それだけじゃないのだよということを僕は常に言っています。みんながいて僕がいるみたいな、そういう形。あるいは、今までは先人の知恵を私たちが受けてきたけれど、これからは自分たちがそれを次世代につなげていくのだという、そういう立場の逆転、それが青年期の変化の大きなキーワードになる。そういう意味で、自分のためだけじゃないという学習観をぜひつけてくださいということで、私は繰り返し彼らに向かって説明をしています。

そして称賛、次の一步の提示ということで、まず褒めないといけないでしょう。できることを褒める。そして、それだけで終わっちゃいけないので、その次の一步ですね。じゃあ次、こうやってみたらどうだろうと。ここはすごいけれど、こういうところを次やったらもっとよくなるよとか、そういう話をします。

AtoZですけれど、例えばRは飛ばして、Sも飛ばしましょう。Tですね。グループワークがスムーズにいくように、安心して、相互互恵・相互研さんが引き出されるようにしましょうということで、①、②、③、④とこういう形で、単純なことですけれど、コツを彼らに伝えています。

U、Vもちょっと飛ばして、後でごらんいただければと思います。

W、この①から⑤の順序で私はグループワークに介入するかどうかを決めています。話し合いが行われていないなと思えば、そっとそこにすっと座ってみるとか、今どういう状況と聞いてみるとかですね。表情が曇っているとか、ばつが悪そうに資料に目を通していか、特定の学生だけが話している、あるいは笑い声だけがしていると、ここは議論がちょっと議論になってないのではないかみたいな、そこですっと身を寄せていくのですね。できる限り入らないようにはしていますが、そういう形で配慮をしていくことになります。

さて、6ページ目、Xですね。とはいえ、やはり私の授業も難しくしています。課題も難しいですし、ディスカッションも決して簡単なテーマではありませんので、学生たちはやっぱり戸惑うのですね。つまづきますし、うまくいかないと思うのです。そのときに私は必ず言うことがあります。それは①、まずできないということに気づくとい

うのはとても大事なことです。そこからスタートですという話です。

そして②番、初めからうまくできるって、それは成長じゃないよねと。逆上がりできる人が逆上がりをやったって、何も成長にならないでしょうと言うのですね。自転車乗れる人が自転車に乗ったって、それは達成感ないでしょうとかよく言います。乗れないときにギリギリ乗れる、ちょっと最初は後ろを持ってもらいながら、そして離してもらったけれど、おお、乗れたみたいなの、それが喜びですよ、みたいな話をよくします。

ですから、③番目ですね。できないからチャレンジが、しがいがあがるのですよとか。

④、失敗してもいいのですよと。やっぱり社会と大学、学校の違いというのは失敗の寛容できるということだと思ふのです。よく、何をやっているのだと最初から言うてしまうこともありますけれど、失敗した方がいいと。できないということに対して、私がいつも気をつけているのは、幼児教育の中でもそんなのですけれど、何でできないのと言っちゃうと、本人ができないことを一番わかっているわけですから、ああ、できないのね、何とかわいらしいのではありませんかと思ふようにしています。すごく苦しんでらっしゃるわ、葛藤してらっしゃるわ、何とかでも頑張ろうとしてらっしゃる、ああ、かわいいわ、じゃあ手を差し伸べてみましょうということがあるわけですね。何でできないのだと言つてできれば楽ですけど、絶対そんなことはないわけですね。そういう、先ほどの森尾先生の言葉でいったら、愛情いっぱいにつながるということだと思ふます。

そんな感じでずっと、Zも読んでいただいてということになります。

最後、3-4で、学生主体型授業のNG集とか、また先日撮りました。そして、教員版のマニュアルをつくらたり、学生主体型用の学習マニュアルをつくらたりということで、今後考えています。

4以降ですね、このじゃあ授業の評価はどうなっているのかということを書いておきますので、またそれをごらんいただければと思ふます。最後5でまとめがありますので、これもまた後ほどパネルディスカッションで、もし何かありましたら御質問いただければいいかなと思ふます。

じゃあ私の説明は終わりたいと思ふます。

○司会 杉原先生、どうもありがとうございました。

それでは、これから休憩に入りたいと思ふます。質問用紙に、ぜひこの休憩を利用してやっていただければと思ふます。初めは鈴木先生のビデオもありますので、ぜひとも時間に間に合うように来てください。休憩に入ります。

【第2部】 パネルディスカッション

「学生主体型授業の成果と課題」



○司会 それでは、第2部のパネルディスカッションに入りたいと思ふますけれど、その前に鈴木 誠先生のDVDの上映にいきたくと思ふます。それじゃあ上映をお願いいたします。

(DVD上映)

○鈴木 ちょっと音声が出ますので、申しわけありません。先ほどは、ああなると私、早口になりますので、聞き苦しかったと思ふます。

これは、ここへ来る前なのですけれど、5年くらい前、毒ってすてきねという、いわゆるヤドクガエルに注目したグループが、要は毒ガエルが少しいますけれど、日本にはいないということから、海外の文献を全部読みあさって、毒の解析をしていますけれど、授業を展開したものです。

5人1組のグループで授業をする。最近では生物選択していない実は生物を選択していませんので、初歩から。なるべくこういう図をみずからつくって、わかりやすいプレゼンテーションを心がけると。それから、必ず聞いている授業者以外の受講生の方が参加できるような形にしている。例えばモデルとかそういうものをつくって、そこから考えさせて、またそのデータをもとに授業を組み立てるということを要求しています。毎年徐々に、そういう蓄積があるから、レベルが上がっていくという形になります。

この子は実は文系の子でして、生物未選択者です。きょうは会場に高校生が来ていますので、高校生にもわかるように、勉強してこいと。また、高校の生物の教科書をぼんと渡してすね、本人は必死になって勉強して、今説明をしていました。

このあたりは最新のヤドクガエルの研究データです。なるべくわかりやすく説明していきます。演劇がある、劇もあります。こういうふうにホワイトボードを使う場合もある。パワーポイントを使う場合もある。あらゆる教材を、教具を使っているといえます。

これは参加した高校の担任です。授業時間が60分、60分を回った後20分インタラクティブな役目をした後です、授業評価をします。この後すね、質問が始まるわけす。これは北大だからずっと質問が続くのではなく、先ほども申し上げましたけれど、私のいた教育困難校の子供たちも、です。おかしければ私が出ていき、今の解は明らかにおかしいとやり直しを命じたり、もう1回文献を当たれと。これサイエンスです。きちんと後を掘るようにしています。今、これグループで、質問に対する答えを言つていくと。ありがとうございました。

○司会 それでは、第2部のパネルディスカッションに入っていきたいと思います。

当初説明しましたように、質疑応答、かなりたくさんの方が書いていただきまして、それにやっぱりかなりの、第1部の発表に興味を持たれたりされたところを一つ一つお答えになった形でパネルディスカッションを進めていきたいと思います。

それでは、林先生、こちら、我々の手にだけあるのですけれど、4番、5番という形で、まず全員の質問というよりも、個人的な質問で、4番、5番という形は林先生でお願いします。

○林 石山先生から質問がありまして、それはラベルワークの参加人数の上限という御質問がありました。それからモチベーションのレベルがどのくらいまで可能かという質問をいただきました。

ラベルワークというのは、とにかく今で言えば、ポストイットに書いたりすることはもう当たり前になっていますので、KJ法も大体みんな御存じですけれど、ただ使い方によっては、時間ばかりかかって効果が上がらないとか、まとめにしか使っていないとか、いろんなものがありますし。マインドマップだ何だかんだって、いろいろ先ほど言いましたように、いろんなラベルの使い方があるので、それらを統一してラベルワークと言っているのが、特定の方法を指しているわけじゃありません。その中でも幾つか、ときに開発してきたといひましょうか、中心に大事にしてきたことが今やっている3枚のつづりのものを使っているのです。決して3枚じゃなくても1枚でも原理的には結構ですので、紙を切ればもうラベルになる、ポストイットでラベルになると考えて、ラベルワークを考えていただければと思います、まず。

それで、最初はとにかくラベルを書くということが大事なですね。普通の授業であれば、とにかく何も書かないで、先生の言うのを一応全部聞き取ればいいのですけれど、ラベルというのは自分の考えとかアイデアを書くことになりますので、とにかくそういう意味では書くことに意義がありますから、そういう意味では何人の授業であっても、少人数であってもたくさんでもいいから、とにかくやれるということになります。

最初は多人数であった場合には、隣同士とか近所でラベルを黙って交換しようというところから入ります。そうすると、すぐ話せというのは難しいのですけれど、ラベルを読めというのであれば、回し読みで、数人で読むとか、今おられる、そこでも回してごらんと言ったら、非常に簡単に回してくれますので、それから今度は話しなさいという。一応回し読みをしたら、それについて自分の逆を書いたことをいろいろ補足したり、うまく書けない人のために補足したり、協調しているいろいろしてください。そして最後に、一応一通りみんな書いたところを聞いて、今度は自由に討論してくださいというようにしていきますと、ラベルをとにかく書きさえすれば、だれでも話の輪に入ることができるという仕組みですので、人数がたくさんでも現実的にはできますし、実際、遠隔授業で、こちらから行って向こうでラベルワークをやっていたということだって可能です。ラベルワークという方法を用いると呼んでいます。

ラベルがある程度出てきたら、それを持ち帰って、実はちょっとお手元にありましたけれど、ラベル新聞という形なのです。最初はまず先生が見る。これは普通、熱心な先生というのは何かカードに書かせたり、いろいろして自分で読んでみたり、自分でクラスの

状況を把握して、そして次の作戦を立てるのですけれど、それはそれでラベルを先生が読むというのはいいことではすけれど、それを今度は学生のだれかが読む。あるいはグループのだれかが読んで、そして今ここで何が起きているのか、どんなことを発見しているのかということ共有していくという、ラベル新聞という方法があります。

そして、最後の方になってきて、だんだんとそれを1枚の大きな図にしていける。必要性に応じてラベルになれ方に応じて、だんだんと認識のレベルに応じてツールというか道具は発見していけばいいなと思っておりますので、最初の質問の、上限については少人数でもすごい多人数も、そういうことで若干簡単な会話、そういうことが従来なかなかできなかったことが非常に簡単にできると思っています。

そんな意味で、2番の質問ですけれど、どれくらいモチベーションがあればいいかということについては、やっぱりやる気がなくてもとにかく書かせる。書かせるというのは書かないのですけれどという場合でも、もう黙って、でも後で交換しますので、何回も何回も続けて、何も書かないで回すということはちょっと、なかなか不可能ですので、やっぱりラベルを書く、書ければ、日本語が書ければラベルワークはオーケーだと。ラベルに書いたら、自分が書いたのをほかの人が読んだら、どういうふうに読んだか聞きたくなるし、自分もその人に発言したくなるという、そういう意味ではとても自然な流れを活用しています。

その考え方は、私も長年、あらゆる参画授業というのをやってみて、きょうパネルディスカッションのテーマにしたいと思っております。そのあたりの人工的なことを次々とやっていくのと、それから去年あたりから、ちょっと自然にというのですかね。何かそういう形で授業というのはちょっとやっていった方が、やっていかないと、みんな学生さんがくたびれ果てて学校へ来ているので、とにかくうまく元気になっていくためには、自然な人間としてのリズムを取り戻していくような、それが半期ぐらいしたら今度自分たちでそういう分担をつくり出していけるようなことを望むようにやってきました。

ちょっと補足になりましたけれど、最初の質問の参加人数には上限はない、工夫次第であると。それから道具は3枚つづりじゃなくても、紙を切ればラベルになる。それから、モチベーションはなくてもよいと。参画の意欲も最初はない者がほとんどであっても、やっているうちにだんだんおもしろくなるというか、おもしろくなるという力がつくというのでしょうかね。コミュニケーションができるとか、そこらあたりが教師に託されていることじゃないかなと思います。

○石山 ありがとうございます。



○林 同じようなテーマで、大学院でどの程度応用ができるかというのを、神谷先生、大阪学院大学の神谷先生からございました。

大学については、そういう意味では意外と少人数でやっていますので、私が持っている科目はもうほとんど全部、ラベルを使って、半期ぐらいやると後期ぐらいからは自分でラベルを書いてもらうタイミング、要するにラベルを書いてもらうというのは、みんなから知恵をもらうというタイミングですよ、もらうようになれるのですね。それからそれをもらったら、今度は必ずそれをフィードバックしたくなります。ということです、そのときはもう大学院に限らず、いろんな場で使えるという。小学生から老人クラブまでいろいろ、はやっていますので、余り制限というのはないのではないかなと思います。よろしいでしょうか、時間を取り過ぎちゃいけない。

○司会 どうもありがとうございました。

では、続きまして鈴木先生。たくさん質問が来ていますけれど。

○鈴木 5番目でよろしいですね。

○司会 全体的に通してやってください。

○鈴木 この方は、要するにモチベーションのない子供を一体どうやって引っ張り上げるかということを探ねられていらっしゃると思います。なかなかお答えするのは難しいのですけれど、私は自分の短い教員経験を振り返りますと、私が担当したクラスは非常に意欲がなくて、荒れたクラスだったのですけれど、ほかの授業をよく見に行きました。例えば体育だと、どうしても体育会系の人間ですと、体育に実際私が出て、その子供がどう動くかを見てよく見に行きました。よいところを見つけて、それをピックアップしてうんと褒めてやる、そういうことをしています。

私は基本的にモチベーションのない子供はいないと思うのですよ、それがどういふふうにあらわれているかだと思うのです。それを細かくかき集めて、褒めて、それを題材にして授業の中に生かしていくというような手法を取っていきました。とても時間のかかることなのです。モニタリングが教員の指導のすべてだと思っています。

そのときに先ほど申し上げましたけれど、よく褒める。それから代理経験みたいな感じで、なるべく成功経験、細かい、小さな成功経験というのを、小さな成功経験をたくさん与えてあげて、必ず成功するように。そしてそこを褒めて、そうやって徐々に自信をつけさせて、授業の中に引き込んでいくようなことをしていました。

ですから、この質問ですけれど、もう学生さんがよそを向いていても、必ず自分の方に引きずり込むような気概を持って、私は今まで授業をやってきましたし、結構それに答えてくれた生徒も多かったです。

○司会 このモチベーションというのは恐らくかなり重要なことだろうし、モチベーションが低いというか、ないと思われている先生たちも多いので、恐らく大事なことは森尾先生と杉原先生もその点、モチベーションが低い学生をどうするか、また高めるためにはどのようにするかというところを、ちょっとお二方から一言ずついただきたいと思います。

○森尾 モチベーションは、やっぱり教える側の先生次第で何とでもなりますので、モチベーションを上げられないという先生の授業は何回も見たことあるのですけれど。例えば授業が始まって、きょう何をやるのだろうかというのがわからないのです。ずっと授業は進みまして、30分過ぎると後ろでアイスクリームを食べ出す学生が出たり、携帯のウォークマンを聞きながら内職をしていたりして、私たちが来ているにもかかわらず、平気で今の学生さんにはできるのです。

そういう意味では、きのうもテレビに出ていましたけれど、鈍感になっているところはかなりありまして、そこをセンサーをちょっと直してあげて、敏感にするという作業を最初にしていただきたい。敏感にして、ならないので教えるのです。あんた、そこ鈍感ですよという。先ほどあくびするときも、授業が始まって先生の前を横切るときも、何もありませんかという、その場所です。ここにだれかが座って、その前を通るといって何をしなきゃいけないのかという、やっぱり行動が大事で、それは体でわからないと、学生が席に座って15分後ぐらいに、先ほどこうだったのだけれどというのはだめなのです。その場で言う。ほかの学生がやっぱり聞くように、聞いて耳に入りますので、そういうタイミングでやっぱり言わないといけない。子供、まだ私のところは小さいですけど、育てるときも同じで、そのときに怒らないと、そのときに指導しないと、その場所を覚えさせないとやっぱりだめです。

後でちょっと質問にも答えようと思っていた、絶対的なレベルというのは何ぞやと。本気でやればできるのだったら、絶対的なレベルは高くないのではないかと質問もちょっとあったので。私が考える絶対的なレベルというのは、まず聞いてわかって、行動ができる。その行動ができるのも、自然にきれいに行ける。例えばイチロー選手の話をよくするのですけれど、毎回吐き気をもよおすぐらいのプレッシャーの中で座席に立っていて、打つ瞬間ですごくきれいなのです。そのきれいにするというのは実は難しく、パソコンを使うのもそうなのですけれど、よほど練習しないと機械に振り回されるのです。なので、数学もそうなのですけれど、やっぱりきれいにできるまでできるようにすれば、大体どこの会社、社会に行っても認められます。専門分野が違って、必ずその分野で、新しい分野で頑張るとすぐチャンスももらえる。それはやっぱり一つの型がありますので、その型をやっぱり身につけさせると。だから数学の知識も大事なのですけれど、いろいろな専門のですね。ちょっと勉強の仕方を、かなり高いレベルまでやってもらうように、これはだれか1人、教員の先生が半期のうちに1人とかやっていたら、いろんな大学で元気な学生さんが出るのじゃないかと。ほかの授業にも派生すると思います。

私は、いつも確認をしている作業がありまして、絶対的なレベルに対してですけれど。それは外の人に、自分のところの学生はどうなのかを必ず聞きます。私が直接会社の社長さんとお会いしたときに、最初プレゼンするのですが、それを全部見ていただいて、うちの学校でどうですかというのを、実際自分でも確認するのです。私が教えているレベルがどれぐらい高い、低いのかと。大体その反応でわかるのですけれど、大丈夫だと思えば、もう君たちは大丈夫だよというふうな、まだ学生にも戻せますので、やっぱり外からの

目というのかなり意識して。

だから、ほかの大学に行ったときに、三重大の学生さんはすばらしいですね、プレゼンはというのを言ってもらって当たり前。そういう授業を受けていると、ほかの大学との違いが学生はわかって当たり前で、わからないような授業を中途半端にやっちゃいけない。だから必ず学会、4年生の後半に学会にうちの学校は行くのですけれど、学会で他大学との違いというのは3年間分たまっていますので、かなりの差になって出ますので、そういうところを感じてもらえばいいと。それは間違いなく先生がわかってないといけないレベルだと。

大体きれいにこなすことはできませんので、きれいにできていませんよというのを見せてあげるので。だれか前に出してでもいいのですけれど、できる子は前に出してもやっぱりきれいなじゃないとか、私と比べてもきれいなじゃないとかを一緒になってやる場合もあります。

あと、知識ベースの授業にこの授業は取り入れられるかとあったのですけれど、私、数学でやっていますので、できます。やり方は少し変わりますけれど。

あとは、職員の方の協力はちょっと、スタッフの方だと思いますが、どうなるかと言われたのですけれど。できればヘルプデスクとか、教員がやっぱり対応できない時間に、そういう話とかできたり、パソコンの修理ができたりとかでもいいのですけれど、人生相談、何でもいいのです。就職のアドバイスとか、そういうのをヘルプデスクに、私は全学のお金を使ってほしいと理事にお願いしています。



やっぱり学生が一生懸命、事務の人もそうなのですけれど、一生懸命学生がやっているのに、足を引っ張るような対応をする方がおられるのですね。すごい態度が悪くてという。そういうのはやっぱり学生のやる気をなくしますので、それは教員もそうなのですけれど、やっぱり学生が来たときはコンサルタントでもあり、サポーターでもあり、親でもありみたいになぐらいでやっていただかないと、ややこしくなるばかりです。結局、最後誰かがまた走り回らないといけない。

あと、大学院での事例、私、大学院の授業もやっていますし、学部の授業もやっています。先ほど紹介したのは学部1年生です。1年生入ったときに、いきなりプレゼンテーションを始めますし、第2週目からパワーポイント使わせてもらって、できないじゃないかと、やっていきなさいみたいなのをやるのですけれど、学部1年生の十分ですね。ただうちの学部は全員ノートパソコンを買っていますのでできる。ものがあればできます。

あと、大学院の授業は、ぜひ紹介したいのですけれども、半年間かけて80人ぐらい構成員がいるのですけれども、うちの講座。その構成員全員を元気にさせるためのプロジェクトを立てて、実際にやって元気にさせてくださいというのを、大学院の1年生にさせていま

す。移動カフェといって、コーヒーを持ちながら一、二階のよく低学年の学生が歩くようなところに、わざとカフェを出して話をしたり、そういう企画をやったりしているのもありまして、いろんな企画をやるのですけれど、それは半年間やってもらいます。それ以外にソフトボール大会とか、ボーリング大会とか忘年会とか、M1が初収入のために企画をするのですね。

授業も何でもそうなのですけれど、おもてなしをするという気持ちを必ず持たないと甘やかすのではないのですけれど、おもてなしをして、どうやったら楽しんでもらえるのかという仕掛けをいっぱい入れておかないと、ただ、みんなの日程調整をして、何か企画してやりましたでは絶対盛り上がらないので。よくけんかするので。学生が、先生これぐらいでやめましょうよというのですけれど、大体これぐらいでやめたらろくなことはないのですよ。だから、これでもかこれでもかって言って、絶対実験と同じで、こうこういう条件だから、こうすれば必ずこうなるはずだという仮定を立てるじゃないですか。それを立てて、その結果が出るのを楽しみに待つというぐらいのレベルまで企画をしないと、ただやりましたとかで、ただグループディスカッションしましたじゃだめです。毎年毎年それは授業のやり方も道具もそうなのですけれど、また新しい工夫、新しい工夫を入れていきますので、言葉では伝えられないものがあります。そういうのが意識するようになっていきますので、意識し始めると効果が出やすくなります。一つ言うと、やっぱり反応するようになるので、それが昔と今の違うところ。それがいいのか悪いのかというのは、微妙です。若いときの方がよかったのかもしれませんが、こら、とか言っていたときの方がですね。それは年相応に、これからも変わっていくのだらうと思います。

○司会 どうもありがとうございました。では杉原先生お願いします。

○杉原 意欲について先に申し上げますと、なぜ意欲が出ないのかによって、多分対応が変わると思うのです。例えば生活習慣が身についてなくて、単に眠いからなのか。あるいは自信がないからなのか、あるいは、いや実は意欲はあるのだけれど、それが表現できてないだけなのか。あるいは山形大学も多いのですけれど、不本意入学で、自分は大めだったというそういう劣等感があるとか、あるいは明確な目的意識がないからなのか、いろいろあると思うのです。それによって、それぞれやっぱり言葉かけも違い、環境の設定、仕組みとか仕掛けとか変わってくると思いますので。



まず、僕が授業でよくやることは、意欲が出ていない、これはちょっと物足りないなと思ったときに、その彼らが恐らく今この可能性と

あの可能性とあの可能性があるだろうなということ言うのですね。君らそろそろゴールデンウィークも明けて要領をつかんできたころやから、サボり出したでしょうとか、サボるところわかってきたね最近、とかって言いますね。そうすると、おっと、わかっているぞこれということで動き出す。あるいは、明確な目標がない人は、目標がなくてつらい人もいますよねと、山形大学、不本意入学する方多いですからね。東北大学行きたくて行けなくてこっち来た人も多いでしょうとか言う、動くのですね、心が。明確な目標今なくても大丈夫だと思えますよ、目標を持つとすることで持てない結果と、持たないでいいやとそのまますることとは違いますよとかいう話をしたりして、心をまず動かします。やっぱり彼らの心が開かないことには始まらない。催眠術と一緒に、別に心を閉ざして意欲も別に必要ないと思っている人に、幾らこっちは働きかけても動かないので、彼らは心を開いてもいいやと思うような言葉を投げかける。

あるいは、きょうはお見せできませんでしたが、私は音楽をばっと流します。ああいう音楽の力って大きいのですね。キリスト教があれだけやっぱり広がったのは、僕は音楽の力って大きいと思います。ああいう音楽、洗脳にはならないように気をつけていますけれど、そこで感動する。例えば「ゆず」の曲を聴いて、ああ子供たちが歌っていると、何てすてきなのだ、「ゆず」ってすごい。見せた後に、すごいでしょう、「ゆず」でしょう。でも君らにもこうやって感動させられる何かって絶対あるよねと言うのがあるのですね。ちょっと語りかけたりしていくと心が動くので、そこからスタート。その後でいろんな、きょう御紹介したような仕掛けがあって、意欲というのは出てくるのだらうと思います。

○司会 どうもありがとうございました。

それでは、質問用紙に書かれているので、恐らくじゃなくて、全員に質問があるのはあります。これは多分に出てくる問題でして、それを皆さんに聞いていきたいと思えます。

まず1枚目なのですが、和歌山大学の阿部先生が、学生が参画する授業には特徴があるように思われます。そういう授業、知識を習得させる講義型の授業とどのように関係づけていくことができますか。それとも授業自体を新たににつくっていく必要性がありますか。先生方の授業は、ほかの講義型授業とどのように相乗関係を目指すことができていますでしょうか。講義との関係性ですね。このことをまずお聞きしたいと思います。

それをもう一つ、やっぱり次の多摩美術大学の教務課、河島さんからですね、同じような、同じと言いますからちょっと講義のスタイルと似たような質問があります。これは単位の実質化にかかわるのですけれど。

学生主体型授業とか、学生参加型の授業をいかに作り出すかという取り組みと思うが、授業形態が従来の講義という概念から演習・実験に移行しているという印象を持ちました。単位制度実質化という観点から考えれば、1単位当たりの教室内の講義の授業時間は15時間であり、学生参加型の授業は、教員が学生に与えるべき知識、授業内容の不足が生じないでしょうか。学生主体の授業は、従来の演習授業との違いをどのようにお考えですかという形ですね。

従来、すなわち講義型とどう違うのかというところ、そして恐らく講義というものは大学の中でなくなることは当然で、それとこのよ

うな授業スタイルとの全体のカリキュラム的なもの、どのようにお考えなのかを林先生からお聞かせいただけますか。順番にですね。

○林 お手元に、私のパワーポイントを打ち出したものがあるのですよね。その右側で4ページ、スライド数で言うと7になると思うのですけれど。

3つのモードというざっくりした、3つ分けているわけですが、そういう意味で第1のモード、第2のモード、第3のモード。この第3のモードがここで言う、みんなで今話している主体的なモードなのですけれど。

私は1番目の違いは、学習者がコンテンツを持ち込むことだと言っています。それは単に、大学だけでそういうことが起きているわけじゃなくて、今までの情報化社会から知識社会になって、かなりものをいろんなところで知識として把握することができるので、そういうものがどんどんあふれているわけですから、それを自分で蓄積して、そして出たくなっていく。そうすると、わざわざ集まる理由は、それを使っていろいろ教えたり学んだり、先生だけじゃなく、そういうことをやりたくなっていくという、こういう知識社会が導き出した、導き出すというのですかね、そういう流れがあるのじゃないかなと思います。したがって、コンテンツを学習者が持ち込むということに、まず基本的にはなれさせないといけません。コンテンツは、今までは先生の頭の中か教科書か、そういうところにあるとそれはそれでいいのです。それを出すのが講義形式ですので、これはこれでやっぱりずっとあり続けたいと思います。

そうすると、それを用いて今度は話そうという形になります。これは第2のタイプで、話し合ったりディスカッションしたりする。この最後の参画型というのは、コンテンツを持ち込むと同時にそれを、自分たちでその場を企画運営しながらやっていくという、要するに面倒くさいことを始めるわけですね。なぜかという、それを使って自分たちのやりたい方向へ知を生産していきたいというようなこと、今まで習っていたようなやり方ではない新しいいろんなやり方、時間配分、どこに力を置くかというのは学生の方がよくわかっているわけなので、そういうところが第3のモードだらうと思いますね。

そうなってくると、このFDがだんだん変わってくる。授業をよくするのは、先生もそうだけれど、学習者もそうなのだと。学習者がどんどん自分たちで自分たちに合うようなものをつくっていくのだと。それに教師がまた相乗りしながら、また競争しながらやっていくということで、学生がそのコンテンツをつくり出せるようにしていくということになります。そうするとこれの、上手にそれをやっぱり配分していくし、一番ありがたいことは、参画授業をやってみて初めて先生の大変さがわかるという言葉になります。

座ってればいい授業が、講義が聴けるというのはいかにありがたいかということが初めてわかる。それがわからないうちに黙って聞け、黙って聞けと言うから嫌になってくるわけで、1回自分で教えていくプロセス、それをするといいと思いますし。ひとつだけ最後、やっぱり教育学の概念が変わるといいますか、学びの概念が本来に戻るというのでしょうかね。わかっただけじゃなくて、もう1回教えるところまで。ないしは教えることができ初めてわかったと呼ぶという、そういう感じになってきているのではないかなと。そうじゃないと、人間が生きていくのにどうも使い物にならないということになってきて

いるので、そうすると時間配分そのものが、ただ教えただけじゃなくて、教えたものを今度は教えられるかどうか。そして学んだ人が、学生が教えた人が、自分でまた次に教えるというふうにより自己精査していくところまでセットにして知識を与えていく、そういうことが今始まろうとしているのではないかと思います。

○鈴木 お答えになるかどうかわかりませんが、お話しいたします。

私は、目的によって使い分けるべきだと思っています。学生参加型授業がフィットする目的はございません。私の場合、モチベーションの覚醒ということが一番の目的になります。でも、そのコンタミネーションを当然考えるわけで、講義形式といわゆる演習、モチベーションを高める授業もあるし、講義一辺倒でやらなければならない。例えば私は両生類の解剖という話をしましたけれど、若いとき、2年ほど人の解剖の勉強をやりました。人体解剖には1万語ぐらいはあるわけです、それを覚えるにはかなり詰め込みのような授業をしなきゃ終わらないのですよ。したがって、何を申し上げたいのかというと、目的によって使い分ける。つまり、何が授業かという、大学としての理念です。そして学部としての理念、デザインといいますか、それが一番大事なのだろうと思います。そのデザインの後に、それを達成するためには、こういうところはこういう授業でいこう、例えば学生参加型で、学生主体型でいこう。ここはやはり詰め込んでいかないといけないから、講義授業が当然なされなければならない、そのデザインが一番のポイントのように思います。お答えになっているかどうかわかりませんが、



それから、ちょっと前も申し上げたのですけれど、意欲という言葉があります。私は意欲の研究をやっているのです、ちょっとだけ私のこだわりをお話したいと思うのですけれど。

意欲というのは、意思と欲求という二つの言葉のいわゆる慣用語です。もっと我々は、意欲のことを分析的にとらえなければいけないのです。私いろんなところでそういうことを申し上げているのですけれど、意欲はいろんな切り口があると。きょうは私の自己効力という切り口があるのですけれど。では、メタ認知もモチベーションを構成する重要なポイントです。

メタ認知で有名なイチロー選手ですよ。彼のコメントは非常に自分を、もう1人の自分を見ている。引いて見ているコメントが多いです。メタ認知は自己制御、自己評価、きょうもちょっと出しましたけれど、いろんな概念で構成されている。そういうところを見ると、授業中おとなしいけれど、こいつ意外なところに目をつけているのではないかというのがわかってきますし、学習方略といえば、辞書の

引き方がわからなければ、勉強する気になんかなりませんよね。この子はどういう方略を持っているのか、それを調べれば、この子は教科書やノートに線が引けないのだとわかれば、そこを強化してやるというわけです。

同じように教える役割ですね、期待されているか。僕はだれにも期待されていないのだと、わかればうんと期待をかけてやる。集中できている。これは統制感と関係するのですけれど、そういうふうにもう少し意欲という抽象的な言葉ではなく、かなり分析した面で実際に学生を見てやる。そうすると、今までの自分の目からは、この子は意欲がなかった、授業中おとなしいと、頭を抱えて寝ていたと。でも、仮に頭を抱えて寝ていた子が、きのうあの試験、きのうは試験だったけれど、前の日にちょっとノートを見ておけばよかったと。その失敗を自分の内的なものに帰属していたら、その子にはベクトルこそ違えど意欲があるのですね。そういうことを我々ピックアップして見ていかなきゃいけないのだと思っています。

○林 気づきというのはキーワードですね。これからの授業を通して気づきという。

○森尾 自分が答えなきゃいけないのか、だんだんわからなくなってきたのですけれど。

まず、不足が生じないかという、これは絶対的に教えたい量が決まっていますので、それをどう分けるか。それを15回均等に分けるのか、そうすると学生さんに期待するようにして、最初はちょっとトレーニングをして、後半のみに期待するのかという、この辺で、1年2年で多分できないのですけれど、私がある科目を教えていると、大体もうこのパターンでいくと80%、90%の学生ができると、ここまで伸びるというのはわかっていますので、それは大体ぶれないので、そこへ行くまでは試行錯誤はやっぱり必要だと思うのです。

これはほないとだめです。先ほど言われた意欲のところも、何で意欲がないのかもわかった上で課題の出し方をうまくやらないと、結局だからやれないので、その辺もすごく大事で、常に学生の様子を見ているという、リアルタイムで見えています。それは大事です。

ある子のエピソードを思い出したのですけれど。前回の授業で全く反応してない子に、あなた全然理解してないでしょってみんなの前で言ったのですけれど、ばれてたという、びっくりしていたのですけれど。学生は実はばれてないと思っているのですけれど、先生から見たら実はよくわかる。それは実は言った方がいい場合もあります。突然知らない先生が言うどびっくりするかもしれないですけど、その辺うまく言っていたらいい。

あと、学生が90分間あるじゃないですか。90分間の中で何分間参加していますかという。何分間彼らが考えていますか、主人公が、彼らが考えている時間が何分ありますかというのを、私は限りなく90分に近づけたいので、しゃべっている間も学生は常に考えている。ノートのとる、今から3分間うわっとしゃべるから、ノートをとりなさいみたいなことを1年生にやっているのですけれど、必死でとるので、すごくおもしろい話を早くしゃべるのですけれど、そういうのも入れています。

とにかく、何を言いたいかという、一言一句、一挙手一投足、とにかく、聞き逃さないでおきましょうという気にさせればいいので、

単位時間あたりにしゃべる情報の質を上げると。二度と言わへんよというぐらいで、1分間とか1秒当たりでどれだけの情報を伝えているのかを、先生は常に上げ続けておくと。何をしゃべっているかわからないという授業をつくらないとか、時間帯はつくらないというのが大事だと思います。そうすると、ほかの先生がびっくりするぐらいの、いつも言われるのですけれど、プログラミングの授業をある先生から交代したのですけれど、交代した途端にえらいレベルが、みんなできるようになっていて、私ができると言わなくても、学生ができることをするので、今まで教えた先生がどうやって教えているのだというのを見に来られたときがあったのですけれど、ただテストをやっているだけなのですね。だから時間外の授業をいかにさせるのかという。

これ、私の経験なのでですけど、教えてくれなくなるのだと。世の中であるところまで来ると、教えてくれる人がいなくなる。そういうときどうしたらいいのか。でも自分のアイデンティティを確保するためには、研究者として存在感がないといけないので、そのためにはどうしたらいいのかという、結局自分でやるしかなかったのですね。とにかく、自分でやらなきゃいけないという環境に、だれも教えてくれないのだというのを早く伝えて、大学の学部で1年生から伝えて、やらなきゃいけない、できるでしょうって。今回はできるじゃないかというのは、もう任せればいいのかですね。そんなの、一々手とり足とりやる必要はないと思います。

私たちが教えるのはできないところです。なかなかきれいにできない、行動ができないところをいかにトレーニングしてあげるのかというところが大事で、あんまり知識とかを詰め込もう、どんどんどんどん伝えようとしているのは、ちょっと情報の質のところ、もう少し暗黙知のところも意識した方がいいかなと。ふだんメタ認知、私も自分の授業を振り返りながら反省しています。

○林 そういう意味では、主体型、参画型に行くときに、やはり急にショックを与えてやるという方法も方法ですけども、私はこれからやっぱり万人に広くこういうのを広げるためには、参集型から参画型、参画型という、中間段階のときに、これをちゃんと将来君たちにやってもらいますよということを宣言して、盗ませるといいますかね。先生から盗ませたり。一番いいのはやっぱり先生です。それからそういうツールを与えていくという、その中間段階をどういうふうにかリキュラム化していくのかという、その点が広めていくには一番大事なことじゃないかなと。

その辺にぴったりはまるような何か授業を開発して、そして学校の中にそういう科目があれば、全員とにかくそこを受ければとにかく参画型ないしは主体性型というか、そういうものができるようにするというのは、そんなことが考えられるのではないかなという、そういう準備をしてあるのではないかなという気がしてははいるのです。

その辺いかがですか、立ち上げるのをどんなふうに。

○森尾 私、学生の方に突然まんといくのですけれど、そうですね。大学の先生が伝えていいところ、効果的に伝わる部分と、外の方が伝えた方がいい部分とかいろいろあると思うのですね。私はどっちかという、外からの刺激というのが大学にもうちょっと入った方がいいかなと思う方なので、できれば外の方が来たらいきなりもう授業

に入っていて、しゃべってもらって、5分間お願いしますとかですね。ふだん私が言っていることと、別の人が言っていることがぴたっと合ったときに、学生たちが納得するので、両方やっぱり要ると思います。

先生が、人生論、何だろう。成功体験とか幾らしゃべっても、なかなかやっぱり伝わらないところがありますので、その辺はカリキュラムを組むとき、今度ベンチャー企業論というのを2、3、4年生でやるのですけれど、ベンチャー企業をやっている人に来てもらい、その人に3日間やって、話していただくのではなくて、それは私も入りまして、非常勤講師でその人にお金を払うのですけれど。私も入りまして、三、四人の丸紅の人も絡んで、わっとならぶおつかいかなと。それぐらいやらないとなかなか静かにしゃべっているだけだとわかってくれないのかなと、バーチャルリアリティでも必要なと思いますけれど。

○杉原 講義型との関連ということで、カリキュラムの、あるいは目的によって使い分けるとか、いろんな授業形態はありますので、そういう話は先ほど鈴木先生の方からありましたので、私はちょっとミクロな点から申し上げたいと思います。

私は演習を、あるいはこういう学生主体型をつくるときに大事にしているのは、学生心なので。私も学生時代がありまして、今の学生がいて、自分が踏んできた失敗あるわけですね。今の学生はそれを、同じ心を持っているとは限らないので、対話をしながら、どうなのかな最近という、そういうフォローからまず出発します。そこで、カリキュラムの論理を持ってくと、学生主体型授業で楽しい、あるいは集中してばつとやることで、例えば講義ってつまらないよねとか、僕は専門が教育学なのだけれど、化学の一般教養の授業って意味ないよね、役に立たないよね僕は思っていたわけですね、学生のころ。恐らくそう思っているだろうと思うわけです。ちょっと話してみると、やっぱりそう思っている。そのときに、学生主体型、あるいは演習あるけれど、講義も役に立たないことはないということを、単に、役に立たないことはないと言っても意味がなくて、役に立たないってだれが決めたの、例えば本当にそう思っているけれど、君ら例えば子供が、小学生が、では、好きなことだけやったらどうって、不安に思わないって言ったら、思うって言うのですね。では、何で君たちはそれで猶予されるの、君たちはやりたいことだけやっている、それでいいと言うかもしれないけれど、大人たちは、君たちが小学生を見て不安に思うように、君らよりも年いっている大人は、君らを見て不安に思うんだよということを言ったりとか。



あるいは講義の授業が、仮に自分自身の本当に興味関心に合

わない。あるいは楽な授業ってありますよね、もうレジュメももらってびびっとやればできるぐらいのアンテナを持っているわけですよ、彼らも。そうした場合に、じゃあぼつとしていたらもったいないよねとか、そのときに自分で単行本を持って行って、好きな本を読んでもいいでしょう、違う授業の内職をしてもいいでしょうと。ぼつとするよりも100倍いいですよみたいな話をして、講義は講義なりの時間の使い方、積極的な時間の使い方、あるいはテキストとの対話と私がよく言いますが、講義の先生の話す内容、あるいは本、資料、テキストと対話をする、そういう方法を綿密にケアしますね。

学生主体型、あるいは演習のいいところって少人数でケアができるということなので、そういうところで話を聞きながら考えるおもしろさとか、本と対話をする喜びとか、そういうことを丁寧に丁寧にやっついて講義、あとはつながるよねみたいな話をしますね。そういうことで、少しはだめ、意味ないと思っているけれど意味あるとか、講義も意外とおもしろいとか、もうここは簡単にできるからぼつとせずに違う勉強をしようとか、何かしら大学生活全体で彼らが能動的生産、そういうことを目指していくことを、私の学生主体型授業では重要視しています。

○司会 どうもありがとうございます。

まだまだ質問がありますので、今度は杉原先生の方からこちらの方にという形に、順番を変えたいと思いますので。

職員の方から二つ質問があります。共通しているのですけれど。皆さんのお手元ですと3番と12番ですけれど。多摩美術大学の平野さんから、教員の立場から職員に協力してもらいたい点などがあれば教えてください。

もう一方はお名前がないのですけれど、それぞれの先生方が熱心に授業されていることがわかり、大変魅力的に感じました。今回のテーマはあくまでもFDなので、少々外れてしまうのですが、こういった熱意のある先生方は、事務側にどのようなことを望んでいるのかお教えいただければと思います。手短に、もしありましたら教えてください。

○杉原 2点です。一つ目は、先生いつも頑張っていますねと励ましていただけるといいと思います。事務室に行くと、何かあいさつもなく、それこそつんけんされると、何か僕居場所ないかなと思えてしまいますから。先生、いつも学生さんいいと言ってますよとか、うそでもいいので言ってくださるとありがたい。

もう一つはやっぱり施設管理ですね。教室をしっかりと管理していただきたいし、きれいにしていただきたい。それは別に事務職員さん直接じゃないですけど、やっぱり掃除の人に対するちゃんとした指導とか僕らできませんから、そういうものをしていただきたい。やっぱり環境、学習の環境整備に関して、しっかりと。これはeラーニングのシステムもそうですけれど、ICT関係の環境もわかり、そういうものをしっかりとつくっていただけると、私たちは快適に、授業で来る学生さんも快適に学習ができるのだらうなと思っています。

○森尾 私、先ほど伝えたように、ヘルプデスクというか、学校の相談のところでいいのですけれど、学生が相談しに行きやすい、迷ったときはあのおばさんのところとかおじさんのところに行けばいい

んだという雰囲気を、予備校みたいな雰囲気、今はどっちかといううちの、言っちゃうと怒られますけれど。私たちが行っても何しに来たのですかみたいな感じで引いて見られるのですけれど、そうじゃなくて受け入れるという、あったかい雰囲気をつくっていただきたいというのが、それ以上もそれ以下もない、愛情いっぱいをお願いします。

○鈴木 職員も一般職員と技術職員と、いろいろ違いがあると思うのです。私の場合はとても恵まれているのだと思うのですけれど、技術職員、実験をやる技術職員なのですけれど、私の授業をよくごらんになって、粹に感じてくれて毎年、無償で部屋を貸してくれて、夜終わるまで、11時でも、4時半に学生が出ちゃえば11時ぐらいまで時間がかかりますけれど一緒につき合ってくれて、翌日は医学部の動物霊場のところまで持っついてくれて、遺体を運ぶと。そこまでちゃんと技術職員がついてくれる、本当にこれには感謝しています。そこまでしてくれとは私は申し上げないのですけれど、本当に恵まれているなと思っています。

一般職員の方々は、おまえちょっと書類提出が遅いぞと、ときどきクレームのメールが来ます。結構私の授業、普通の人も見にいらいやいますし、広く公開しているのですけれど、そういう情報を私は、逆にあえて職員の方に、きょう解剖をやるよとかドライラボだとか、割と教務の方とか学生課の職員にざつぱらんに話をして、ときには私の部屋にまで遊びに来てもらったり、授業を見てもらったりすることもあります。そういう関係を築いておくというのは、いろんな面で書類をそろえるとかバックアップしてくれたりして助かっています。

○林 私立とそれから国公立、若干違うかもしれませんが、公立の中でもいろいろ千差万別あると思うのですけれど。

私立、私がいたとき、そこはいろいろ接触するところでは、やっぱり母校愛というのですかね。ああいうようなものは、やっぱりそれをちゃんと刺激するというのはおかしいのですけれど、比較させながらしていくのは、やっぱり教員もそれをやっていきますし、学生もそれをやりますが、やっぱりそこに行くとか大体勤め上げる職員の方の影響力というか、そういうものはとても大きいなと思います。そんな意味で、この事業開発を支援していくという意味で、そういうことが大事だかなと思います。

一般的にそういう意味で、事務方の方にも理解していただきたい。それから一般の先生方にも理解していただきたいのは、授業を開発するためのサポートと、授業を普通どおりやるのとのサポートは違うのですよね。授業開発するためには、もう何か予定は未定みたいな感じでやらざるを得ないので、コロコロ変わっていったり、それから学生がだんだん授業の開発にかかわってくるようになってくる。そうなってくると、いろいろ場所をあそこにしてくれ、ここにしてくれとかいろんなことが出てきて、そしてそういう制度を飛び越えて自分で場所借りに行ったりとかいう。そうすると、それは先生を通してやれみたいな、急に言われてしまうとそこでなってしまうので。

そういう意味で学生が自分の学ぶ場をつくっているということは、自分たちの後輩のためにもつくっているわけですから、そういう意味で授業開発を支援していくということの理解というのですか、そう

いうことは事務方の中にも何かあるのではないかなとは思いますが。

○司会 質問用紙ももっともつとありますけれど、最後、森尾先生に先ほどの対象人数ですね、こういう授業。対象人数と対象学年という質問が来ています。対象人数と対象学年、どこまで上下にできるかもちょっとコメントしていただければと思いますけれど。

○森尾 私のタイプの授業をもしやろうとすると、人によるかもしれませんが、50人ぐらいまでであればケアはできます。それ以上になるとちょっと大変です。授業アンケートとかの、手書きで全部書かないといけないので、1人1人メッセージを変えますので、判こで済ませている先生もおられますが、よく頑張ったとかですね。その判こもこだわられていまして、英語で向こうのを買ってきたり、外国に行ったときにですね。本当に工夫されてやっている先生もおられます。

少ないところは何とでもなります、50人ですね。多くなってきて、先ほどの50人というので、先ほどちょっとお答えしたのですが、皆さんにちょっと披露させていただきます。もし私が50人を受け持ったならということで聞いてください。



5名1チームとして、100チームをつくります。部屋に入るときにくじを引いていただいて、どこのチームでどこに座るのかを、その日じゃないと決まらないという。あらかじめ1分間プレゼンテーションをする課題を与えておきまして、そのチームの中で大体20分ぐらいかかるのですが、1分間プレゼンテーションを5人でやっています。その中でベストのプレゼンを取った人に10点満点のうち1点をあげると。だから15回分で10点満点の評価が1点もらえると、1回でもベストプレゼンを取れば、それを毎週繰り返す。プレゼンの課題をどうするかということなのですが、それは専門の授業であれば専門の授業で、家で一生懸命やってこないといけないような内容をしていただいて、その次の授業を受けたときに、わからないところだけ聞けばいいという状態になるようにするための1分間プレゼンにされたらどうか。少なくとも、毎回くじ引きで座る位置が決まりますので、友達がいなくて行く場所があるので、やっぱりやらないと恥ずかしいですね。1分間ぼつと突っ立っていることになりまして、そういう仕掛けがあったら、普通の20分捨てるだけなのですが、20分捨てるだけのおもしろい授業が少しは展開できるかなと。

あと二つ目は、やはりITの力を借りるというのは絶対使うかなと思います。それは、今、私はムードルをよく使っていますし、実際今、三重大学のインポートフォリオシステムを設計して、来年の

2月28日に納期なのですけれども、そこまでは大体2,000万円ぐらいかけて今つくっています。それは、ゼロベースから全部組み直して、組み直してというか私が全部設計して、多分28日過ぎたころには全学を謝って、頭を下げて回っているかもしれませんが。そういうポートフォリオシステムもいいですし、LMSのムードルとかBlack Boardとか、Sakaiとかいろいろあると思うのですが。そういうのを使っただいて、学生が提出どんどんしてもらって、統計データどんどん出ますので、グラフを書いてですね、そういうのをどんどん学生に見せるという。授業中はちらちらとそういう、こんなに頑張っている学生さんいますよとかというのをちらちらと見せながら、先生はどちらかというと、余りもう集計せずにそういう機能でアップさせてもらうという企画を少し入れれば、今までの普通の授業にちょっと刺激があるような時間が少し出るのかなというので。

さっき言ったチーム、座る位置を決めるワクワク感と、ポートフォリオで見られているとか見えてるよみたいなどのワクワク感と、二つのワクワク感を少し入れて、500人の学生さんと楽しんだらどうか。ちょっとでも想像できないぐらいの人数ですが。ぜひ今度呼んでいただければ、1時間ぐらいやってみようと思います。

○司会 鈴木先生、お願いします。



○鈴木 私、個人に来ている質問で、一つ触れておいた方がよろしい質問がありますので、ほかにもたくさんあるのですが、一つだけお話しします。

授業する学生をどのように決めているのでしょうか、矢口先生の御質問です。これは細心の注意を払います。一応男女別、それから学部別を分けて、あと出身地別も分けて、最初の仮のグループをすぐ決めます。すぐ決めておいて、4月の末までの段階ですね。野外実習とかいろいろ動かす、実際学生を動かす場面がたくさんあるのです。そこにTAをきちんと、TAというのは私の正規のTAではなくて、私の弟子にしたOBが張りついて私と一緒に見て、このグループはこうした方がいいな、あの子はこうした方がいいという情報を得ます。皆さんがやられているように、90秒スピーチというのをやります。野外実習を終えた後、そのテーマにしたがって90秒スピーチをさせるのです。そこでのプレゼンテーションのやりとりを見た上で、最終的にグループをつくる。動かして、正式な授業グループとして決めます。だから、4月末に20日ぐらいかけて決めるというようなやり方です。

それから、授業をやった学生が選ばれたという、これ全員でやるのです。全員で授業をつくっているのです。分担も均等でなければならぬという不文律がありますので、1人に依存するというのは

全くないですし、私はしょっちゅうモニタリングしていて、場合によってはグループを呼ぶ、リーダーを呼ぶ、問題傾向がある学生は昼休み必ず呼ぶ、例えば放課後会おうという、絶えずチェックが入っていますので、特に心配はないです。多分、きょうこの後のテーマになってくるのですけれど、徐々に、なかなか難しい子があらわれてきていることは事実です。

○司会 どうもありがとうございました。

最後に、林先生から順番に60秒スピーチを最後にいただきます。その前に、せっかくですので会場の方、今までのお話を聞いて、ちょっと申しわけないところは、質問に答えられたところもありますけれど、その方々には重々におおびいたします、私の方から。情報交換会がありますので個人的に聞いていただければと思います。

今までのお話全部聞かれて、これだけは質問したいというところがありましたら、この場で、皆さんの前で聞いていただければと思います。随分お答えがあつて、それでも腑に落ちなかった、何かこれだけは聞いておきたいというところをぜひとも、どなたか一つ質問していただければと思うのですけれど。何かおありですか。

よろしいようでしたら、じゃあ林先生の方からよろしく願いいたします。

○林 60秒スピーチらしいので。やはり、こういう授業開発とかFDとかこういう場に、学生さんが来るような状況をつくり出していくことじゃないかなと思います。私が大学院生を連れてきたという意味じゃなくて、やはり主体性を、授業づくりの主体性をどんどん発揮していけば、当然それをもっと学びたいと、先生と一緒にやりたいという話が出てくると思うので、学生版の“つばさ”をぜひ、“つばさ”ネットワークをおつくりいただきたいなと思います。

きょうの話の中で出てきていなかったのは先輩の存在です。そういうふうにした場合の先輩の存在です。そういう授業を受けた先輩をどうやってキャッチして、そしてそれをつなげていくか。それ全部並べますと、やっぱり学生の文化として学ぶ場は学生がつくっていく。あるいは教師とともにつくっていくものだという、そういう文化をつくっていくかといけなないので、その文化はもちろんコンテンツとして何かの中に入れることはできるけれども、やっぱり人間が一番大事なので、先輩を授業の中に取り込んでいけるような仕組みをつくる。そうすると、例えば単位などについても、もう1回今度は、開発単位としてある一つの授業にかかわっても単位を出すことができるという仕組みを、どこかの大学がつくったら、そこは爆発的に新しい学びがどんどん出てくるのではないかなと。必ずそれを何単位か履修しなさいというふうにしていけば、学生がどんどん履修していくような仕組みが制度としてできるのではないかなと前々から言っているのですけれど、中々まだ認められなくて。終わりにします。

○鈴木 では60秒でお話しいたします。

授業計画をする最初の1時間目に私が必ずやることは、先ほど、きょうありましたけれど、学生を圧倒するようなカエルの情報を提示します。学生の中には、全肢が5本だと思っている、皆さんわかりますよね。基本的に全肢4ですよ、痕跡として。5のカエルもいますけれど、基本的にわかんない学生がいますので、それで圧倒させ

る。ほかに、自分ができないことは絶対みんなに要求しないということを行います。例えば私は今まで授業に遅刻したことはないのです。これだけは自慢の種で、試験は翌日にデータを学生に渡す。全員とノート交換をしてもらいました。これは最初に学生に提示して、できないことはみんなに要求しないよと、背中を見せるようなことです。そして平等に扱うということも宣言しています。あと、事務職員とはなるべく飲むようにしています。

○森尾 もう私は、何か言葉にしないところだけ伝えてしまったので、あまりないのですけれど。

最後に皆さんにお願いしたいのは、やっぱり目の前にいる学生さんを、本当に自分の子供というか、愛情を注ぐ対象と見ていただいて、背中もいつも見られているというのも、自分たちで感じながら、あと正面に向かったときに、私よく熱い授業をするのですけれど、静ひつな授業をひたすらやられる先生もおられますので、誠実さという、常に学生との時間を楽しんで学生たちに何か伝えるのだという、それはゆっくりしゃべっても、ぼそぼそしゃべっても、それは大丈夫なので、常に一生懸命愛情をかけているというところを出していただければ、必ず反応してもらえますので、それを信じて、私も信じていますので、皆さんもやっていただければなと思います。以上です。

○杉原 きょういろいろ、私自身も勉強になりましたので、ぜひこういう話をするとよくあるのは、いやそれ山形大学だからできるのですよと、杉原先生だからできるのですよ、私もう研究とかがいっぱいあつてとかいう話になると思いますので、そのとおりだと思います。私だからできる、それを皆さんぜひ目指してくださいと思います。私だからできる授業。

意外とすごい、すごいけれど盗めるところもいっぱいあつて、私も森尾先生の1分間プレゼン、パクらせていただいたりとかしていますので、意外と使えるぞという部分と、これはだれにもまねできないというものを、それぞれが夢と希望とあこがれと、いろいろ目標を持ってやっていたら、恐らく学生はそれを感じて夢を持ったり希望を持ったり、あるいは教員に対する、あるいは先輩学生に対するあこがれを持ったりとか、そういう知的あこがれみたいな、そういうものを教養論の中で原則なのですけれども。そういうもので授業というのをつくっていただけると、きょう私たちが発表したものもかいがあったかなと感じています。以上です。

○司会 皆さん、どうもありがとうございました。

こうして昼の1時半から4時間近くやってまいりましたけれど、まさに学生主体型授業の探究という形で今回のシンポジウム、標題をつけさせていただきました。副題として、学生の意欲と主体性を育てる授業を考えるという形で、我々は今、杉原さんも言ったけれども、我々は解答を持っているわけではない。ヒントを皆さんの中に、ヒントとなれば我々の、これを主催した側としても、また演者の皆様の喜びだと思います。それはたくさんあつたのであつて、それは個人個人が受け取ることであつて違いは出てくるだろうと。それは個人個人の受け取り方だけではなくて、大学のありようがいろいろとまた千差万別であると、また専門性もそれぞれ違う。いろんなキ

キャリアも違ってきて、そういう形で受取方があり、発展の余地は我々の想像を超えるような形で発展していくのだろうと思っています。

この学生主体型授業というものは、現在のキーワードの一つであります、ティーチングからラーニングへとというところの、まさにそれは授業の一つの形態として、学習者中心というものを供出している授業の形態だろうと思っています。これは9月にも、まさに鈴木先生の専門でもありますけれど、フィンランドの大学へ行って、FDや大学改革の中心の問題の一つとして、このアクティブ・ラーニングということに向こうからはぼんと上げています。そのように、世界同時進行でこれは起こっていることであって、決して日本人が説明不足だとか、コミュニケーションがうまくないという問題ではなくて、世界同時進行で高等教育は苦しんでいるのだということを、皆さん御理解いただければと思います。

また、学生のモチベーションが問題であることと同時に、それは教員の、まさに森尾先生が標題にやられている教員の愛情、まさにまたタイトルでつけました意欲というものも、モチベーションと同時に問われているのだろうと思っています。我々はモチベーションを問う以前に、我々は恐らくないものはつけていかざるを得ないので。それが教育だったのだ。ないことをやって、ないことを言い続けても、決してそれはあるものに転換していけないだろう。ないものはつけていかねばいけぬ、まさに高等教育、大学教育の大衆化というものは確実にあって、それを私個人としてはポジティブな形でとらえていかねばいけぬのだと思っています。

そうしたときに、教員のアクティブ・ラーニング、学生主体型授業というものの問題は、恐らく一つは講義形態から、林先生が指摘しましたレクチャーから恐らくコーディネーターという段階に、今、全体的な雰囲気かとどまっていると思うのです。コーディネートすることによって、没個性化してマニュアル化されちゃう。特に初年時教育とかそういうこととか、薄っぺらな本が書かれてこうやったらいいよ。恐らくそのマニュアル化というものは、ティーチングマシン化して、我々の大学、まさに大学の本質を問うことだろうと思っています。そうしたときに、まさに森尾先生と鈴木先生という強烈なキャラクターが出て、個性というものを前面に出していく授業、そしてそれは林先生が言ったスーパーバイザー的なもの。また、杉原先生が言った、自分のキャリアを生かしていく、幼児教育の先生ですからね。ですけれど、それが幼稚園の先生だったものが、ほかには大学教育にそんなにいるわけじゃないのです。そういうものを生かしていく、まさに我々がティーチングマシンにならないような形で教員の専門性と同時に、個性、それは人間性というものが問われてきているのだろうと思っています。それを全面的に出して、我々は同時に苦悩していくことが、この学生主体型授業の発展であり、日本の置かれている高等教育、また世界の高等教育の発展に結びつくことだろうと私は信じております。

長時間にわたって御協力、ありがとうございました。講師の先生方に拍手で。

○司会 最後に主催者側を代表しまして、山形大学の教育担当の副学長であります中島勇喜からあいさついたします。

○中島理事 皆さん、長い間大変御苦勞さまでした。また5人の先

生方、協力していただきました大学院の方、御苦勞さまでした。それから講師の先生、どうもありがとうございました。

きょうのお話を聞いていますと、各先生方が、先ほど小田先生の方からまとめがあったのですけれども、各先生方に共通しているのは、それぞれの先生が今までのいろんな経験とか試行錯誤を積み重ねられて、それをもとにした独自、ある面独自ですね。独自のいろんな授業改善をやっておられる。学生たちの主体をどうやって引き出そうかということをやっておられるというふうに感じました。



山形大学のFDというのは、先ほど先生からもありましたが、学生のFDは前回“つばさ”でやりましたので、ちょっとそこだけお伺いしておきますが、山形大学でいろんなFDをやっておりますが、山形大学FDのもととは、小田さんがいつも言っていることですが、相互研鑽ということできております。きょうも、きょう先生方からいろんな有益な情報を先生方もたくさん得られたのではないかなと思います。非常にすぐれた立派な授業を展開されて、学生主体型の授業を展開されているという中で、その中から一つ二つでもいろんなヒントが、それぞれの方にやっぱり思い浮かべられたりしたのではないかなと思います。それこそがある面成果の共有化という部分にもなってくるし、山形大学が目指しています相互研鑽にもつながっていくと思っています。

きょうは長い間、本当に御苦勞さまでした。

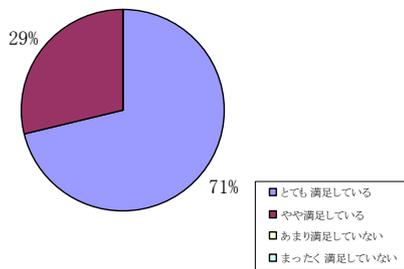
改めて先生方に、講師の先生方にお礼を申し上げますとともに、会場においていただきました先生方にお礼申し上げます、あいさつとさせていただきます。どうもありがとうございました。



OFDシンポジウムに関するアンケート調査

第1部講演(事例発表)

(1)満足度はどの程度ですか？



(2)参加された感想をお聞かせください。

- ・理系のテーマを、理系文系の学生問わず開講するという鈴木先生の講演を楽しく聴きました。
- ・今回、東京から参加しましたが、出席者が多いことと、FDに対する関心の高まりに驚かされました。
- ・60～120人の講義を担当し、学生主体型授業をどうすればいいのかが悩んでいました。本日の講義で、何か一つずつ導入していこうと考えるようになりました。参加して良かったと思います。
- ・午前中から午後までとしてほしかった。時間が短すぎる。参画授業は何を主張されているのか、不明でした。一人一人がラベルを聞いてどんな授業をしたいのでしょうか？
- ・自らの授業の展開、学生の意識改善に貴重な資料を得ました。
- ・素晴らしい先生方のお話でした。私自身も少人数教育ではいろいろとやっておりますし、共感できる部分が多かったです。しかし、全体としてまた、カリキュラムとしてどう展開していくのかという問題はやはり残されていると感じます。
- ・双方向性を主体的に反復的に90分間に込めることの重要性を実感しました。
- ・先生方が個々の学生に目を向けて授業されていることにとても感動しました。
- ・参加者が熱心でよかった。
- ・刺激的でした。自分も工夫しているはずですが、意識的ではありません。もう少しメタ認知をしたいと感じました。
- ・色々な先生の取組事例と熱意を詳しくお伺いできてとても有益でした。
- ・自分の講義への姿勢を修正しなければならないと実感しました。
- ・学生参画授業は教員がスーパーバイザーとなるモノで、卒業研究のゼミはその典型のように感じた。1年次からこのような授業をすることは簡単ではないように思うが、教員の情熱と工夫が大切な事が分かった。初年次の授業でこのような授業を行う場合、一人の教員でなく、オムニバス方式のほうが色々な教員の影響を受けて良いと思った。
- ・大変参考になりました。自分の授業にどのように取り込めるかを考えています。

- ・皆、熱心に努力しているなあ。この先生方の努力の結果が社会にどう役に立ったかの検証が聞きたいです。落ちこぼれは減るが、それだけで良いのか？学生主体型で、優劣を明確に見せつけることで、各人の次のステップがより考え易くなるのでは？と感じる。
- ・個別相談・小グループ相談までやっていただきたくなる気持ちになりました。
- ・学生が授業で参画した内容をどのように具体化するかについて考えることが必要だと感じた
- ・「授業への取組」という言葉では言い表せないほど意欲と情熱を感じました。
- ・各大学で取り組まれている事例を伺って、先生方の熱意が伝わってきました。学生主体型・参画型の授業に向いている講義と導入が難しい講義もあるのではないかと思います。
- ・どの先生方も学生の持っている能力を引き出す授業を考えていらっしゃる、具体的な話を聞くことができ、とても有意義でした。
- ・「愛」教える側の愛情が大切、改めて考えさせられました。
- ・方法論のみでなく実際の様子を紹介していただき沢山のヒントを得ました。
- ・各大学で意欲的な取り組みをなさっている発表を伺って、工夫することを改めて痛感しています。
- ・個性的な先生方の授業実践を知ることが出来て有意義であった。
- ・魅力的な授業の取り組みを具体的に示してもらえて、わかりやすかった。
- ・パネラーの教育の情熱、培われてきた経験に圧倒されました。
- ・教育現場で工夫されている実践例を多数伺うことが出来勉強になった。
- ・こういう教育主体のシンポジウムが真剣に行われることは良いことだと思う。学生の自立性、創造性の育成や「教養」の能力育成をこれから本当にやるべき時になったと思う。
- ・本学の今月のFDフォーラムで報告することができます。ありがとうございました。
- ・少人数での授業としては大変興味深く、いろいろと学ぶことができました。
- ・授業外学習の充実を図らなければと、焦りの様なものを感じました。
- ・発表された大学では、いろいろと工夫を加えて授業されているコトを知り、今行っている授業のあり方を考え直さなければならないと感じた。
- ・先進的な取り組みを知ることが出来勉強になりました。とても刺激を受けた。
- ・毎回内容の濃い研修会、シンポジウムありがとうございます。今日の貴重な内容を持ち帰り、一つでも多く活用させていただきます。
- ・鈴木先生と森尾先生の取り組みが関心を持ちました。
- ・特に鈴木先生のお話が大変参考になりました。個々の方法は参考に来るのですが、自分の学生の場合、自分の担当している授業の場合、どの方法をどう利用するのかを考えなくては行けないと感じました。勉強になりました。ありがとうございました。
- ・現在、教育GP事業として授業法の開発を行っているので、参考になる話が聞けたと思った。
- ・学生主体型授業の先進的な取り組みについて知ることが出来て良かったと思う。本学教員にも伝えたいと思う。

- ・学生主体型授業の考え方や具体的な工夫などが理解できて良かった。出来れば大学全体の取り組みに広げていくテーマがあれば。
- ・事務職員としても、学生主体型の授業作りを大学全体で取り組んでいくか考えるきっかけになりました。
- ・教養教育から専門教育にどうつなげていくかなども今後の関心テーマが深まりました。
- ・工夫されている状況が分かって良かった。
- ・自分に足りないもの、発想の狭さに気づかされました。工夫、努力が必要です。
- ・先進的に努力しておられる教員の発表は自分ができるできないは別として、努力目標になります。その姿勢を持ち続けることが教員にとって必要と思いました。
- ・カリスマの真似はできませんが、参考になる事は多くあります。その一つでも身につければ良いと思いますので、これからも引っ張って行って頂きたいと思います。山大はFDシンポを続けてください。
- ・学生主体授業の進め方が非常に参考になりました。今までは「参画」ではなく、「参与」で終わっていた気がします。また、鈴木先生、森尾先生に対しては、非常に厚い情熱、そして学生に対する愛情を感じました。やはり教員として人間として「育てる情熱」が一番だと再認識しました。
- ・「学生主体」ということで、普段の授業にどのような工夫をしているかが興味深い。
- ・講師の先生方は、細かい気遣いとエネルギーを使い、大学の授業をしてると感じた。頭が下がります。各先生の学生主体、参画させる授業の要点、よくわかりました。自分も先生方ほどではありませんが、それらに近いことを実践しているので、少し安心しました。女性の講師はいらっしゃってもいいのではないですか？
- ・先生方の日頃の授業に対する熱意が感じられる講演でした。

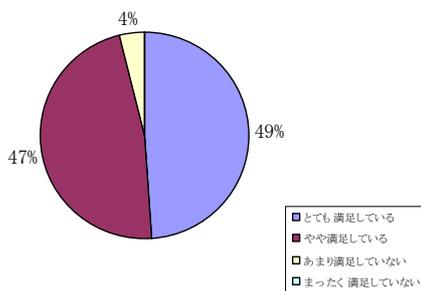
(3) 今後、どのようなテーマの講演をお望みでしょうか？

- ・哲学や文学など学生達にとって比較的取りかかりにくい科目の「学生主体」の例。
- ・様々な大学、教員のFDの取組があると思いましたが、美大、芸大は、一般の大学の大学と比べて特殊であり、FDの事例発表を企画して頂きたい。
- ・本日のテーマでもっと多くの事例発表から学びたいと思います。
- ・私立大学のものも入れてもらおうとありがたい。少人数と大人数では全くやり方が違う。私大では、経営上、大講義もやむを得ない。
- ・大学教育と中等教育との関係。必要性はわかっていますが？または、大学教育についての文部行政に対する問題提起もあり得るのではないのでしょうか？
- ・学生主体型、PBL型の成果について。
- ・より多くの先生の取組事例や、FD導入事例、導入したもののうまくいっていない事例の報告やその改善提案などをお伺いできればと思っています。
- ・日本人の知のレベル:あるべき姿とそのアプローチ。若い人と考えたいテーマです。(特に中国との競争に於いての教育のあるべき姿)
- ・学生を変えてゆくためには、どのようなかわりが必要かなど、ま

- たFD嫌いの教員にどのように対応していったらよいのかなど。
- ・大学と社会活動との連携について実例があればよい。
- ・学生の学習活動を引き出す授業作り。
- ・引き続き「意欲と主体性を伸ばす」テーマを望みます。
- ・今回は、四年生大学中心でしたが、短大ではどうなのか、他短大の取り組みを伺えれば、と望んでいます。
- ・実際の学生に対する授業の後に発表会があった方がよいと思う。
- ・大人数における学生参加型授業の探究。
- ・学問別、学年別と言った区分に焦点化した教育方法、改善例をお聞きできればと思っています。
- ・授業改善の組織的取り組みについて、本日のご講演を伺い、授業開発は教員の個人的な活動であると強く印象づけられました。今後は、いかに組織的サポートを行ったり、全体のカリキュラムデザインを作っていくかがキーになると思った。
- ・学生主体の実践例を充実していただきたい。
- ・「教養」とは何か。
- ・学生主体型の大人数授業の例などがありましたら、よろしくお願いたします。私大の場合、少人数授業はほとんどありません。
- ・テーマと申しますか、生の授業光景の記録を拝見したいと思いました。
- ・FDアンケート(学生の)の調査項目のあり方について知りたい。
- ・今日のテーマの中で特にモチベーション・意欲などに特化した講演などを是非拝聴したい。
- ・やはり今日も話題になりました「学生のモチベーションを高める授業とは」を望みます。もう一つ、「多様化した学生すべてが満足する授業を目指して」などを望みます。
- ・FD活動の実際。
- ・授業評価アンケートの活用について授業評価アンケートの結果を基にした教育改善の先進的取り組み事例の紹介など。
- ・FDの失敗や苦勞、課題と解決方法。
- ・GP終了後もぜひ情報発信を続けて頂きたいと思いました。あっと驚くようなテーマ期待しています。
- ・教育授業のマニュアル化の良し悪し。
- ・テーマと言いますか、教育に熱い想いを持っている先生方の事例をもっと聞いてみたいです。予習復習活用法、IT活用法。
- ・「少人数教育から大人数教育への転換と発展」会場での質問もありましたが、私学の教員の最も悩み模索するところだと思います。是非、知恵を出してください。
- ・少人数、ゼミ等などでは、学生参画授業は可能ですが、質問にもありましたが、大人数(100人以上)の学生主体授業の具体的運営方法など(やはり「参画」ではなく、「参与」になってしまっている)
- ・FDについての取り組み、導入経緯、導入後の効果。
- ・つばさのHPで過去のテーマや感想を見た。最近のFDのシンポは「授業」にポイントが置かれすぎているとの批判があった。
- ・友人のアメリカ人に(FDの一般定義は何か?)と聞いたら、「Teacher Interaction」と言っていた。授業をする側のスキル、知識のアップが良い授業を支えているのだということだと思う。たまには、国外のオリジナルのFDの実践やアイデアを聞きたい。
- ・大学1年生対象の演習、授業、講義等の実践例。

第2部 パネルディスカッション

(1)満足度はどの程度ですか？



(2)参加された感想をお聞かせください。

- ・質問に対する回答がよく分からないことが多かった。質問のテーマに関して明快である必要はないが、今後我々も考えていきたい。
- ・講義と学生主体型授業についての考えが明確になりました。丁寧にお話しくださり有難かったです。
- ・いくつかのヒントを得ることが出来た。
- ・苦勞されている点もう少し伺えればと思いました。贅沢な望みですが。
- ・もう少し取り上げる質問の数を少なくして、より詳しく話をさせていただくとありがたかったです。
- ・各先生方のお考えを具体的に説明して頂きよく分かりました。
- ・紙で質問し、的確に回答して頂いたと感じる。時間効率が良かった。日本の誰にこんなことを、いつ教えるか、体験させるかetcの基本の議論が欲しかった。
- ・学生が参加するの否かは技術論だと思う。FDには、参加型が有効なことがよく分かった。
- ・具体策が聞くことが出来参考になりました。学部学科に関係なく共通する課題方法があると思いました。
- ・私は事務職ですが、質問内容、回答とも本質的なことのためか大変わかりやすい言葉を使っていることがありがたかったです。
- ・質問票に出された質問に対してパネリストの方々が答える形式でしたが、質問する側も回答する側も現場のことをよく分かっておられる内容で参考になりました。
- ・学生のモチベーションについてのディスカッションがとても役に立ちました。
- ・各先生方の思いが伝わってきました。思いを形にし、結果を出していることが素晴らしいと思った。
- ・言い尽くせないほどの想いを感じました。
- ・第1部以上に内容に富んでいて大変勉強になった。
- ・時間も限られているなか、有意義な話を聞くことが出来、得られるモノが多かった。
- ・講演とは別の生のお話をうかがえ参考になりました。
- ・オーディエンスの専門分野等の分布もわかると良かったと思う。
- ・多くの教員が努力されていることを知り、今後の参考になりました。
- ・「講義」における、学生主体型の導入に関しまして、もう少々の具体的方法の提案を頂ければと思います。

- ・メタ認知に関するお話が特に興味深かった。
- ・色々な意見、一人一人別の視点からの意見があり、大変良かったです。
- ・シンポジウム、質問に回答する形で進められたのが良かった。
- ・意欲の問題、講義型との関連、それぞれ「なるほど」と思いました。
- ・非常に意欲的な先生ばかりの発表で、そうした姿勢を真似したいと思いました。
- ・さらに理解を深めることが出来てよかったですと思う。
- ・講演者の方々の学生への姿勢に感じ入るものがありました。
- ・やや質問と回答がかみ合わない面がありましたが、回答していただいた先生方からは、講義部分では聞けないエピソードなども聞けてとても有意義でした。時間があれば、フロアーからの発表も聞けたらなお良かったと思います。
- ・先生方の熱意が伝わってきて、今後の授業の参考になると思いました。
- ・学習意欲を引き出す授業を考えさせられました。どういふ学生を育てたいのかは重要です。再確認。
- ・時間的制約の中で仕方ないと思うが、講師の先生方のディスカッションも聞きたかったですね。共通項とオンリーワンがあるように感じたので。しかし、各講師の深さが知れて大変良かったと思います。林先生の指摘「FDへの学生の参加」はその通りだと思います。
- ・いろいろ、少し細かい点まで聞けてGoodです。
- ・パネラーの先生方とフロアーの参加者との議論の時間も欲しかったと思います。

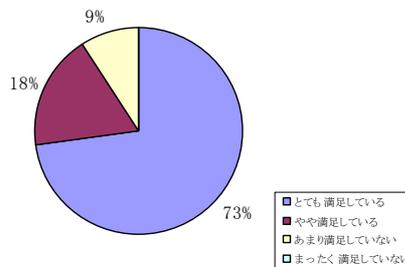
(3) 今後、ご自身の大学等に望むことを記入して下さい。

- ・一般教養科目と専門科目とのモチベーションの差の解消を試みたい。
- ・FDの組織的に実施する。
- ・全学的に取り組んでいきたいと存じます。
- ・教員の意識改革。
- ・個々の教員がやっている教育改善の取組の可視化。FDに対する方針の明確化。
- ・まだ本学ではまともにFDが行われていないが、やる以上は実のあるモノにしたいです。
- ・SQ(社会的指数)を向上させるためのシステム構築。
- ・創設2年目もどのように進展させてゆかなければならないのか
- ・運営側(学校のトップ)に、もっと現場のことを分かってもらいたい。授業のケアする時間が確保しやすいように工夫して欲しい。(会議の短縮など)
- ・FDの組織的に実施する。委員会を組織してまだ2年目、ようやく授業公開を取り組み始めたところです。これからが本番だと思いますので、温かい目で見守って欲しいと願っています。
- ・FDがなかなか進んでいない状況であり、大学全体としてFDを活性化する必要がある。
- ・少人数教育の導入。
- ・このような取り組みは組織として行うのか、個人レベルでの広がりによって任されているのか、教育へのテコ入れの方向性を明確にしてほしい。

- ・教員の中の温度差と事務方トップの理解不足をなんとかしたいと思っています。
- ・大人数の教育をどうするか？どうFDしていくかを考えなければならぬ。
- ・ハード面の充実は望みますが、それ以上に学生を満足させる授業創造の義務を感じます。
- ・教員が今日の高等教育の現状と課題について正しく認識をもつこと、そしてFD・SDに取り組むことが大事だと考える。
- ・貴大学のようなすばらしい研修を開くことが出来るように努力していきたいです。
- ・教員の研究力の向上、授業力。
- ・教育に対する教職員の意欲の向上。
- ・教員、職員が連携して学生支援に取り組む体制。
- ・各教育組織単位で苦勞していることが多く、全学的に情報共有していくことが課題です。また、他大学との連携にやや消極的な面があるので、本シンポジウムの発表などを報告して、きっかけにしていきたいと思います。
- ・未修教科支援の必要性。
- ・意欲的な学生や活動に対して大学、教員、職員への関わりを重視して欲しい。しかし、環境はいいなと思いました。(事務⇔教員等)
- ・各大学の知恵を持ち寄る場として山形大学は輝いて欲しい。どの大学で出来ることではないので、苦勞はあると思いますが、頑張ってくださいようにお願いします。
- ・教員の主体的取組はないので、積極的に取組をして欲しい。
- ・自分のできる範囲は変えられるので、頑張りますが、大学全体、組織の問題までは、FDに関わっても改善は難しいと思います。
- ・学部内での授業研究会、学部を超えた授業研究会もしくは情報交換会の実施。

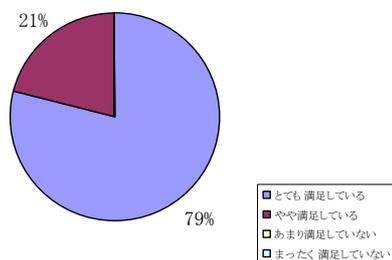
- ・面白かったです。やっつけられないポイントがわかりやすく表現されていました。
- ・学生時代を振り返り、あるあるというエピソードですが、楽しく、自分も振り返りながら拝見いたしました。
- ・いろいろな場面を思い出しています。自身を振り返る機会となりました。
- ・思い当たる教師が多いのではないのでしょうか。
- ・視点が面白い。
- ・よくここまで学生も協力してくれたと思います。EP. 8は自分にも当てはまるので反省しています。杉原先生お疲れ様でした。
- ・自省も含め、今後につなげたいと思います。
- ・自分の大学でも作ってみたいと思いますが、多分、学内で手中放火浴びそうです(笑)。
- ・大変面白かったです。第二弾を早く拝見したい。
- ・2回目ですが、何度見てもいいですね。
- ・面白いと思います。男性教員が女子学生をえこひいきするバージョンも面白いと思います。
- ・忘れ物をすることがあるので、気をつけたいです。
- ・ユーモアもあり、とても興味深く観させて頂きました。
- ・DVDを購入したい。(大学で視聴したいので)職員版も楽しみです。HP未公開映像が見られたのが収穫でした。
- ・あるよね！という感じでした。
- ・肝に銘じます。
- ・インターネットでは1話ずつしか見れないが、今回は、まとめて全部を観ることができてよかったです。

(3)「先端学習ラボの見学」の満足度はどの程度ですか？



第3部 オブショナルツアー

(1)「あつとおどろく大学授業NG集の上映」の満足度はどの程度ですか？



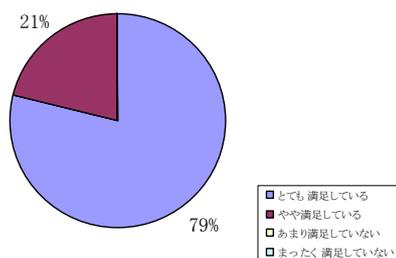
(2) 視聴された感想をお聞かせください。

- ・とても面白かったです。本学内でも見れるようになると嬉しいです。
- ・ドキッとさせられました。
- ・名演でした。
- ・夏のセミナーでも一度見させて頂きましたが、とてもメッセージ性のあるビデオです。

(4) 参加された感想をお聞かせください。

- ・自校に導入するに当たって説得方法が知りたくなりました。うらやましいです。
- ・国立大学のリソースが羨ましくもあります。
- ・教育をテーマに活発に活動することはよいことだと思います。
- ・学生さんが大変喜ばれていると感じました。
- ・横側のスライドの発想が素晴らしいと思った。参考になりました。
- ・非常に充実した施設であり、学習の動機付けを高めるだろうと思う。
- ・授業の目的にあった教室で参考になりました。
- ・授業実践例の説明は分かりやすかったが、機器操作の体験もしてみたいと思いました。

○今回のシンポジウム全体の満足度はどの程度ですか？



(自由記述)

- ・シンポジウムの会場では無線LANの対応をお願いします。
- ・学生主体型授業をどのように導入してよいのか悩んでおりました。光が見えたような気持ちになりました。また、会場変更などご多忙なかでメールをいただきとても助かりました。本日の正門でも対応も感じが良く親切な方ばかりでした。ありがとうございました。
- ・このような企画をまたやってもらいたい。
- ・教育の現場はいくらでもやり直せるコトが特徴です。しかしだんだん、そのような環境が崩れていることに不安があります。
- ・FDに限って言えば、極めて有効だと感じる。企業が卒業生を受け入れ、再度社会教育を熱心にやります。そこでの方法のいくつかが今日の話にも出ていました。
- ・即戦力的人材教育には、良い方法が実施されていますね。でも、スキルアップでは日本は持続出来ないとの不安も抱えています。優れたリーダーの数が重要です。やる気のない学生はやめさせれば？ やめても再びチャレンジできる入学体系もあり得る。入試の時にやる気の確認とか、落第のルールの提示などを実施して、モチベーションを本人に維持させる、とか(アメリカ方式)
- ・スタッフの皆様 ご苦労様です！ 楽しい会ありがとうございました。
- ・参加者は教育に携わる方ばかりだと思うのですが、インフルエンザ対策がほぼ浸透しているにもかかわらず、咳エチケットが出来ていない方がいて驚きました。
- ・充実した時間の企画をありがとうございました。
- ・「目の前の学生に愛情を持つ」という、初心に気づかされました。いっぱい励まされたと受け止めています。
- ・発表の時間的に見ると二実践例くらいで良いと思う。フロアーの質疑応答に時間を聞いた方がいいと思った。
- ・情熱、スキル、ツールの必要性を感じた。
- ・大変勉強になり、来て良かった。
- ・全体的に大変勉強になりました。ありがとうございました。
- ・とても有意義なシンポジウムでした。先生方、事務職員の方、ありがとうございました。
- ・鈴木、森尾両先生のお話は面白かった。学生に対する対応に感心した。情熱
- ・私は授業中、笑顔を心がけています。
- ・落ち着き無く、何かと雑談する方が前にいて、机がものすごくゆれました。次回は机、イスが分離したモノをお願いいたします。特に雑談はやめて欲しい。山大的方や東北にある大学の方々には慣れていらっしゃるのか、先生の発言中にも雑談や身動きが著しい。せつ

かくの場を遠方から来ているのに、残念でなりません。是非一度考え直して欲しいです。

- ・いつも、自然科学シンポや学会のごく限られたところでのプレゼンなどである意味、満足していました。決して現場の授業をないがしろにしていたわけではありませんが、たまに、この様な少し教員としての原点を考え直す機会に自分を置いて良かったと思っています。毎年参加するかは？ ですが、数年に一回は教員の自覚を持ち続けるために参加したいと思っています。
- ・情報交換会でも、パネラーの先生方や参加者の先生方と、お話ができて、良かったと思います。山形大学の先生方、職員の方々、本当にお疲れ様でした。大学事務NG集も、早速見させていただきます。今後ともよろしく願います。

6. 諮問委員会

平成22年2月6日(土)山形大学高等教育研究企画センター会議室において、「学生主体型授業開発共有化FDプロジェクト」の諮問委員会が開催された。

冒頭では、山形大学副学長、教育・学生担当理事の中島勇喜から挨拶があった。

その後、平成21年度の活動報告について、山形大学高等教育研究企画センターの小田隆治教授がプロジェクトの全体について、また、パイロット授業の実践事例について、山形大学高等教育研究企画センターの酒井俊典助教より報告があり、その後、諮問委員による外部評価が行われた。

○出席者

諮問委員

立命館大学 教育開発推進機構 教授	木野 茂
岡山大学 教育開発センター 教授	橋本 勝
日本教育大学院大学 教授	林 義樹
島根大学 教育開発センター 准教授	山田剛史

山形大学

教育・学生担当理事	中島勇喜
高等教育研究企画センター 教授	小田隆治
理学部 教授	栗山恭直
高等教育研究企画センター 准教授	杉原真晃
高等教育研究企画センター 助教	酒井俊典

記録

○小田 本日は大雪の中どうもありがとうございます。本当に、山形人もびっくりしておりますが、順調に終わって帰れば良い思い出になると思いますので。

では、山形大学の理事の中島先生の方から。



○中島 本日は、本当に遠いところありがとうございます。1年ぶりというのか、第2回目の諮問委員会ということで、きょうは、21年度の活動報告をされるとは思いますけれども、どうか忌憚のない意見をさせていただきたいと思いますので、よろしくお願いいたします。きのうの昼過ぎまでは何の、一滴もなかったのが急に、まさに先生方を歓迎しているというのか、何か山形らしさを出すような天気になってくれたようで、こちらもとまどっているようなところがあるのですけれども、本日

はよろしくお願いいたします。

○小田 早速ですけれど、活動報告の方に行きたいと思います。まずは、資料2をご覧ください。紙一枚ものです。

私の方から概略をお話ししまして、パイロット授業の方を酒井の方から説明していただくようになります。まず、こちらの説明は全体として1時間程度を予定していきまして、その後、皆さんの御質問なり、お話を聞いて意見の方に進みたいと思います。

こちらのメンバーは前回のままとという形です。

それでは、資料3をご覧ください。今年度の実施報告をしていきたいと思えます。(1)パイロット授業の実施ということで、活動のこのプロジェクトの2年目になりました。そこで、我々パイロット授業を展開して、いろんな学生主体型授業の汎用性の高いものを開発すると。そして、いろんな形で学内、また、全国的に展開・公開をしまして共有化をするという形で、ここのメインはこのパイロット授業の実施でした。これについては後ほど酒井の方から詳しい報告がありますが、担当授業者、この3名という形で、前期・後期に行いました。授業内容やらもまた後ほど詳しく報告があると思えます。

そして、次のページをご覧ください。これも酒井の方からありますけれども、一つの部屋、先端学習ラボという授業開発のための部屋をこのGPでつくりました。大学の中のお金で、教室の改造、教室の確保をいたしまして、あと、ICT関係の施設等はGPのお金でやりました。ここでずっとパイロット授業を行いました。これについては、また後ほど詳しく。

(2)の先進事例の調査という形では、国内のではこういう形のものを調査に行きました。また、フィンランドの調査として、フィンランドとエストニア、この大学、タリン大学とヘルシンキ大学。フィンランドはもう一つ、オーボ・アカデミーという大学の方にも行って調査、向こうのセンターの人たちの調査と、あと学会がちょうどありましたので参加して、大学間連携も見てきました。

(3)番目、3ページ目をお開きください。成果の発信・共有化としまして、まず、後ろの方にこういうビラがついております。一番下の紙を見ていただければ、毎年やっております教養教育のワークショップ、今年第11回目になりますが、丸一日やっています。午前中は愛媛大学の佐藤先生にやっただき、午後からのラウンドテーブルを3つやっているうち、第2分科会で、学生主体型授業の創造という形で、パネリストとして、立命館大学の八重樫先生初め、三重大学、山形大学の授業を展開している佐藤慎也を初め3名で行いました。全国からも、特にこの分科会が一番参加者多く、先端学習ラボでやりました。

引き続きまして、山形大学でFDシンポジウムを開催しました。これがまたチラシですが、12月12日に午後から半日をかけて、こちらにいらっしゃいます林先生を初めとして、北海道大学の鈴木先生、三重大学の森尾先生、山形大学から杉原という形で学生主体型授業についてのシンポジウムを行いました。これも全国から80名ぐらいの方々に参加されました。やっついて驚くようなぐらい人が集まるというのは、

時代を反映しているのだろうなという形でした。

そして、広報活動としては、パンフレットの作成。パンフレットにつきましては、こういう形の学生主体型授業のパンフレットを添えてあります。大学教育改革プログラムの合同フォーラムでポスターセッション等、分科会で私が話をしました。このポスターセッションで我々のパンフレットを配ったのが340枚です。ですから、ああいうところでブースを出している中でも、興味を持たれたことがすごく多いのだろうと思っています。

次に、全教員のためのマニュアルDVD「学生主体型授業へのアプローチ」がとうとう完成しまして、きょう上映できます。20分ぐらいのものをつくりましたので、後からごらんいただければと思います。かた苦しい話は抜きにして、酒井さんの発表の後にこれを見ていただければと思います。

ついでに言いますと、もう御存じのように、我々は、FDの「あっとおどろく大学授業NG集」、それから、大学間連携の“つばさ”をもとにして、大学間連携で、「あっとおどろく大学事務NG集」をつくりました。これは大学事務員が40人ぐらい参加しまして、今回の学生主体型とは違いますけども、そういうFDとSD版をつくり、ビデオとしては「あっとおどろく」という題名をつけていませんが、「学生主体型授業へのアプローチ」が第3弾です。

次に、学生のための学習支援冊子作成という形で、今、杉原が中心となってやっています。大体もう発注をかけていて、学生に全部配布しようと。ちなみに、上の「学生主体型授業へのアプローチ」のDVDは、学内の教員全部に配ります。そして、全国の大学さん、高等教育の大学・短大・高専にも1枚ずつ配ります。

○橋本 ああ、そうなのですか。

○小田 はい。今までの一番初めのFDは配らなかったのですが、徐々に次のSDは参加した40人に配っています。今度は全国に配ります。

研究報告書はいつものとおりにつくっていく形になります。これが昨年度のもので、この中に学生主体型のものもあります。山形大学の毎年出しているFDの報告書ですけども、その中に学生主体型を入れています。そういう形でまた出していこうということで進んでいます。

次の4ページ目をごらんください。その他3に、FDの一般的な形ですけども、我々、この学生主体型授業の開発・共有化をFDととらえておりますので、FD授業としては皆さん御存じのような形で学生の授業アンケート、FD合宿セミナー、FDワークショップ等々例年どおり、報告書に載せる形になっています。あとは、プログラム申請書と、FDネットワーク“つばさ”の方のパンフレットがあります。今現在、これがふえていきまして、当初34校だったところ、現在、42校になっています。

学生主体型の授業のDVDが出ていますけども、DVDを見てもらったらわかりますが、基本的には問題点だけ上げていますので、授業設計には至っていません。授業設計の参考になるものとして、「学生主体型授業の冒険」を出版す

るという形で、ここにいらっしゃる先生たちにも御協力を願って、全国の実践例のものを今準備しているところです。その裏は、SDの本が同じように出るという形になっています。以上、私の方から全体的な概略でした。

引き続きまして、ことしの中心になりましたパイロット授業の方につきまして、授業を担当した杉原と栗山、あと、きょうは来ていませんけども、建築学の佐藤の3名でやりました。酒井や私、ほかのスタッフが毎回出て、このパイロット授業の研究をしてきたという形です。

○酒井 学生主体型授業に関して報告をさせていただきます。山形大学の酒井と申します。よろしくお願ひいたします。

本日は、学生主体型授業の開発ということで、本年度、山形大学で実践されました「未来学へのアプローチⅠ・Ⅱ」という前・後期の教養セミナーについて御報告をさせていただきたいと思ひます。よろしくお願ひします。

まず、発表に関してですが、この実践が開発された背景を簡単に説明させていただきまして、その後、実践の目的として、これが汎用性の高い学生主体型授業モデルの開発であるということをお伝えした上で実践事例の紹介をさせていただきたいというふうに思っております。

この実践の開発に至っては、山形大学の卒業生の特性というものが、外部からの調査によって、堅実であって、ある種まじめであるのだけれども、もう少しコミュニケーション能力であるとか、プレゼンテーション能力であるといったような社会人基礎力を高めていく必要があるのではないかということを受けまして、学生主体型授業開発共有化FDプロジェクトということになっています。

このプロジェクトは、全3期の構成になっています。

本日御紹介するのは、学生主体型授業の昨年度の第1段階で調査・研究を行った上で開発されたパイロット授業の実践と改良ということです。

未来学へのアプローチⅠ・Ⅱというふうになっています。来年度からは、これをもとに、全学的な学生主体型授業の展開を行っていくということになります。

先端学習ラボという話が出ましたが、ここから少し歩いたところになる教室の中で行われた授業が、この風景になっております。可動式の机といすです。お手元の資料にもありますが、グループが組みやすくなり学生同士がPCを囲んだりしながらディスカッションをしている様子を見ていただけたかと思ひます。こういう部屋で「未来学へのアプローチ」を行ったわけでございます。コンピューターは、現在30台、このラックの中にしまわれていて、学生が授業に来たら自分で出しています。プロジェクターは、現在、正面と壁面2面にありまして、こちらの方にもう1面あります。

実践の内容に関しての御紹介をさせていただきますが、未来学というのは一体何かということなのですが、異なる専門分野の先生方が、建築学、教育学、化学の先生方の現代に対する問題を総称して未来学というふうになづけております。この三つのテーマに関しての授業を全15回、前期・後期、前期がⅠ、後期がⅡという形で行っています。

各テーマ、都市問題は、佐藤慎也が建築学の立場から4回、格差問題について、杉原が教育学の立場から4回、環境問題について、栗山が化学の立場から4回、これらを踏まえて、最後に学習成果発表会の準備と成果発表会を行いまして、15回ということで行いました。

教養セミナーとして開講しておりまして、前期は27名、後期生は13名の受講者がありました。

担当教員がそれぞれの方向、やり方で課題を提示し、グループワークとプレゼンテーションを毎回課していくということが特徴になっています。

先ほど写真でお見せいたしました先端学習ラボにて毎回行っています。2回、SCITAセンターというところで行われましたが、それは後ほど御紹介します。

前期の流れになりますが、最初に、建築学の佐藤の方から、未来学について、未来学とは何かということについての説明になります。

その後、佐藤の専門分野は建築学ですので、具体的に模型を使って未来の持続可能な都市をつくっていくという、まちづくりの授業を展開していきます。ここでは、発泡スチロールや色々な素材を使って未来の都市をつくっていくという、手を動かしながら考えるという作業をしています。

その後、格差社会について、杉原の方から、理想の高校教育をつくらうというテーマで、毎回、文献講読を課しまして、その内容をもとに短時間でプレゼンテーションをしてグループワークを行っていくという授業を行います。

栗山の方から環境問題を考えるということで環境問題、科学的なデータをどういうふうにして扱っていったらいいのかということと、そういった科学的な知見をどうやって生み出すかということ。実験を体験しておいたらということで、SCITAセンターにおいて実験を行いました。

最後に、最初の模型づくりをした段階では考えていなかった格差の問題であるとか、教育の問題であるとか、環境問題について考えた知見を模型に反映して、最終的に未来の総仕上げを行っていくというような流れになっております。それが最終プレゼンテーションにつながっていくということです。

「未来の持続可能都市を探る」という、佐藤の建築学の立場では、実際に課題としては二つ前期に提示されています。一つは、実際の模型をつくること。二つ目は、どういった社会的な文脈でその都市がつけられているのかということについてのシナリオ、ストーリーをつくってまとめることということが課されています。グループで模型を作成しまして、初回の3回では、現代の都市問題、それから未来の都市にこういうものがあつたらんじやないということについてブレインストーミングを行いまして、最終発表では、その次に続いていく格差問題と環境問題を踏まえて、また、都市の模型をデザインしていく、ストーリーにデザインしていくということが行われています。

実際の授業風景ですが、実際、初めは、担当者は佐藤ですが、グループワークをしながら現代の都市の問題点等を付箋紙で書き出して、プランニングをしていく形になります。どういった形で、どういった特徴のある

都市をつくっていったらいいのか、町をつくっていったらいいのかということを考えながら、もう少し素材を見ていっていますが、こういったものをつくりながら、実際に都市をつくっていくということになります。どちらかというとICTが完備された部屋ですので、機械的な、テクノロジーを用いた実践というふうなことがやりやすいということもあるのですが、こういったものをつくっていくときにも作業がしやすいということになっていることを御理解いただければと思います。

次に、「格差問題を踏まえて未来を創る」ということで、杉原の方から、教育論の立場から理想の高校教育を考えると、4回、授業テーマとして考えるようにと実践を行いました。その際には、教育目標を具体的に、育つ子供像、身につく力、教育制度、内容、教育方法、そして何が、なぜその教育が必要なのか、その理由ということで設定されています。

この授業に関して特徴的なことは、毎回、杉原の方から、LMSに参照文献を提示して掲げておき、それを学生が読んでいきます。それを1分間で自分の考えとしてプレゼンテーションを行います。通常のグループワークでは、そのグループの中でディスカッションを行うということになるのですが、そうではなくて、グループを解体して、ほかのチームのところに行きながら1分間プレゼンテーションを行っていくことをしながら知見を深めていくということになります。ですので、文献を読んで、発表して、そしてまたプレゼンテーションをして、グループを解体し、また戻ってプレゼンテーションをするという形で実践は進んでいくことになっています。

先端学習ラボで行われている様子ですが、実際、壁面の側面にプロジェクターが使われています。プロジェクターに関してはスイッチャーがありまして、切り替えることもできますので、片方でパワーポイントを出しておきながら、こちらではホワイトボードを使うというようなことが可能になっています。

最後に、こちら、スライド、パワーポイントではないのですが、これは書画カメラを使っています。A4の1枚の紙に、先ほど申し上げました高校の名前、そして教育目標等、手書きで書き込んでプレゼンをしていくという形になっています。

次は、「環境問題を考える」ということで、栗山の方から、サイエンスの知見、データに基づいてどういったふうに説得的に語れるのかということについて、議論するようにと実践が展開されました。前回の格差問題に関しましては、教育ということで、これまで高校生だった彼らが、身近で語りやすい自分も受けてきた教育の視点として、経験も語ることができるという部分がありということが、語りやすいところがあるのですが、サイエンスの場合は、科学的なエビデンスに基づいてどう説得的にフォローしていくかということが重要になってまいりますので、そういった議論のトレーニングということになります。前期に関しましては、学生の問題意識に応じて、それを五つのグループに分けて、それに関して問題を調べていき、森林伐採や砂漠化について調べていくグループがあつたり、水不足について調べていくグループがあつたりということで、そのグループがどのようにサイエンスの知見を持って提示していくか、説得的であつたかを相互評

価値するという事です。

最後に、ここの1階にありますSCITAセンターで、色素増感太陽乾電池という最先端の発電の実験を行います。

「環境問題を考える」の授業の風景がこのようになっています。このときは、プレゼンテーション、他の出展形式といえますか、他のグループの子がやっているプレゼンテーションを見に行き、どこのグループのプレゼンテーションがいいかというところのよさを見て、盗んでいくといえますか、そういう形でグループワークをしていくということになっています。こうしたグラフ等を用いてプレゼンテーションを行う形です。

先端学習ラボではなくて、これが色素増感太陽乾電池の実験をしているところになります。こういう場所で実際に科学的な知見を生み出す体験をしてみるということでこの授業は終わるということになります。

最後に、これらを踏まえまして最初の模型づくりに戻っていきます。それででき上がってきたのがこういった模型です。これに関しては、教育問題あるいは環境問題に配慮したストーリーが提示されて、プレゼンテーションをします。かなり作り込んでいますけれども、どこに何がそれに対応しているか、問題に対応しているかということがきちんとプレゼンテーションされることが課題となっています。

「未来学へのアプローチ」に関して整理させていただきまずと、まず、都市問題に関しては、現代の都市問題、未来の都市問題を想起・分類するのです。そして、それに基づいて持続可能都市の模型とストーリーをつくっていく、それに関してのグループワークを行います。その次に格差問題について、教育学の立場から、文献調査、自分の被教育体験から教育問題を考えて、未来の高校教育を提案する。そして、科学的、客観的なデータに基づいて問題を語って考えていくのは環境問題、環境問題の解決はこう提案するという事で、グループワークを行います。それぞれ先生方によってグループワークの仕方は異なる。そして最後に、Humanityは、これは格差、教育の問題。そしてEnvironmentは、環境問題と言うことに関して配慮しながら、もう一度模型づくりとストーリーづくりをして、最終発表していくものです。ここにはグループワークと、それから毎回の授業外学習を課しているの、授業外で調べてきて、そして、その知見をこの授業の中に持ち寄って考えを深めるということが一つの重要なポイントであるというふうと考えられます。ほぼ毎回検討会を行っており、こちらへの学生・受講生の参加も多く、インタラクティブな構造になっているということが言えるかと思えます。

これが検討会の様子です。授業者ではないほかの2名と学生が参加したりもします。学内からの参加者もあります。

未来学へのアプローチ I の満足度ということで、一応、山形大学の授業改善アンケートとは別に、簡単なアンケートを行って満足度を調べています。27名から23名回収していて、全体的な傾向としては、認知的負荷は高いけれども、やりがいがあったということです。そして、プレゼンテーション能力の向上、内容は多いがやりがいはあったということが言われているということです。これが「未来学へのアプローチ I」ということであります。

後期から始まりましたのが、「未来学へのアプローチ II」ということですが、前期とは変更点がいくつかあります。

1つは、担当授業と順番の変更です。杉原の格差問題から始まって、環境問題、そして最後に都市問題ということで順番を変えています。

そして、テーマ、それから設定についての絞り込みと変更が行われています。

環境問題については、前期の「未来学へのアプローチ I」では、学生の興味・関心に応じて5つのグループに分かれてグループワークしてもらおうということでしたが、今回は地球温暖化に絞りました。それに関して3つのグループに分かれて、それぞれ地球温暖化について調べてディスカッションするところでテーマを絞っています。

最後、都市のまちづくりを行っていくときには、受講生、前回は、グループごとに都市を一つつくっていったのですが、後期の場合は履修者が13名ということがありまして、13名全員で一つの都市をつくり上げていくということになります。その際、ある程度の設定が授業者である佐藤の方から与えられ、学生に役割分担をさせて、例えば、君は市長であるとか、どういう町にするのかシナリオを考える係・担当というのを設定するという事で、こういうところで前期に行われた「未来学へのアプローチ I」とは違う点があるということになります。

そして、検討会の役割も、実際に参加する学生の数がふえていたり、役割も変わってきたりしていると言えるのではないかと思います。基本的には順番が変わっていったということと、問題が絞り込まれているということが、後期の「未来学へのアプローチ II」ということになります。

実際、きのうまで授業は行われていまして、まだデータは分析中で、お見せできる厳密なものはありませんが、授業風景としては格差問題の方から入っています。前期につくった街の模型が置いてありまして、完成イメージを提示しているということがあります。書画カメラを使いながら、高校教育についてプレゼンテーションをしていき、そして、環境問題について考える。ここでは地球温暖化についての諸説です、地球温暖化しているのか、していないのか、そもそもどうなのだろうか、ということについてのデータを、双方立場を配慮しながらディスカッションを行っています。

最後、みんなで街をつくっていくというのは、後期の変更点でもありました。こういう形で囲みながら、実際に手を動かしながら、真ん中にあるめがねのちよつと緑っぽい服を着ている子が市長ということになっていますが、彼を中心に模型制作を完成させていきました。先週まで、それに基づいて個々人から発表が行われたのがきのうの授業ということになります。

検討会に参加する学生の数が非常に多かった後期の特徴というふうには考えられますが、毎回ではありませんけれども11名の中からかなりの人数が参加しています。ここで語られたことが授業内容にフィードバックされていくというケースもあります。学外からの参加者もあるときにも学生が参加しています。

以上で、私の方からは実践について報告させていただき

ました。御清聴ありがとうございました。

○小田 じゃあ、引き続いてDVDの方に行こうか。

(DVD上映)



○小田 という感じで、FDは12話あります、SDは17話あります。SDは、9月5日に全国の大学の希望をしてきた事務員が来て、ビデオを撮ると。勘違いもありますが、ビデオの編集を勉強するのかとかそうではなくて、来た自分たちでシナリオ書いてそれをやる。30大学が、北海道から九州まで、国公立大学・短大・高専がいっぱいあって、一日でつくって17話あります。その一部だけですけれどもご覧いただいたという形になっております。FDとSD版は、おもしろいユーモア感覚を入れてあります。学生主体型のものにはユーモア感覚を全然モットーとしていませんので、おもしろくないと思いますけども、酒井さんなんかは教員になって初めてで、見てすごいためになると言っており、とてもありがたいなと思っています。

ちょっと休憩を挟んでそれから話に入りたいと思いますので、10分休憩して次の点検・見直しに入っていきたいと思っていますので休憩させていただきます。

(休憩)

○小田 ちょっとずつ補足していきますと、先ほど、酒井さんがパイロット授業の話をしましたけども、パイロット授業は、こちらとしては、すばらしい授業といえますか、全国の見本になるような授業をつくらうという意図は初めから全然なかったです。汎用性ということで、人が見たって、これならできるなというところ、それは授業の設計だけではなくて一部分でもいい、そういうものを求めていますので、決して、見事という形にする意図はありませんでした、なるべくそういうふうにしなないようにして。

それともう一つは、理系の人たちがやっぱりこういうものに入りますので、理系の人たちが見たってできるというところで、先ほどいた栗山先生は、化学が専門なのですが、彼に入ってもらいました。彼はやったことはない、それで、彼はすごく悩んでいたのだけれども、「実際には何したらいいのだ、一体」と言うけれども、我々としたら、あくまでやってくれるという感じですね。ですから、理系を必ず入れたかった。それから、もう一人は建築という形ですね。我々の普通の自

然科学やら文系とちょっと違うところの分野を入れて、そしてものを動かすところ。では、この3人を全体の設計の中からきちんと選ばなかったら、そうではなくて、文系と理系という形で親しい人間でやってくれる。口を挟めないとやっぱりああしてくれとか、こうしてくれは言えないですから、そういうところではそういうところを優先させたという形です。そして、現実には、毎回毎回みんなで残ってできていくという感じがありました。そういうところですね、汎用性一番高いところ。

そして、中には、この前、横浜国大学と創価大学が来てちょっと話をしたり、その前、東京電機大学の人たちが授業を見ていったりするのだけれど、オムニバスがどうか言うのですけども、オムニバスって、授業をたくさんパイロットで開講する意図はなかったですし、2つも3つもやって我々が見ていくのは大変です。ですから、一つの授業の中に3人を入れ込んだという形です。1人でやらせたらどうかとか、それはそうなのでしょうけども、それをカバーし切れないから3人で複合的にやると。実際には、円滑的には1人が一つの授業をやるということが、こちらの基本的なベースです。

○木野 今のDVDで、今言われたようなことは、多分、あれだけ見るとその辺のところの意味がちよっとわからないというので、いろいろとそういう議論になりそうな感じがしますね。3人とかいう形のやり方というのはちよっとやっぱりどうか、とか。

○小田 そうですね。

○木野 それから、後は、やはり理系の人なんかとか、文系でも法学とか、経済とかああいうところだと、どうしても体系的な学習、それとの関連でそういう授業をやれるのかという話がある。今、ここに理系が入っていると言われたけども、都市問題とか環境問題とかいうのは、ある意味社会的な問題とリンクした分野なので、純粋に理系と、そういう、ほかの大多数の理系とはちよっと違うと。

それから、タイトル自身が学生主体型授業というのは、アプローチという、このプロジェクト自身がそうですけれども、拝見したあれを見ると少し、あのDVDの中身そのものが、いわゆるグループ学習のやり方。

○小田 そうです、そうです。

○木野 という、素直に言えば。

○小田 はい、そうです、そうです。

○木野 それは、学生主体型授業という表現をどういうふう位置づけるかということですから、これは、グループ学習を何らかの形で媒介させるということは絶対必要条件なのですが、主体型授業をやるためには、ただ、それが、グループ学習が学生主体型授業というふうにもまた直結して、短絡化した形で理解するというのはまたちよっと問題だろうと思っているのです。

○小田 はい。

○木野 今度、ちょうど3月のコンソーシアムのFDフォーラムで僕がやる分科会で、双方向型授業という分科会、杉原先生も来ていただいて、今のまさにこのタイプで、内容はこれとは違うと思いますけども、学生主体型授業の報告をお願いしていますけど、もう一人お願いしている先生は、同じようなグループワーク、そういうふうな双方向型授業というふうに言っても、実際そうなっているのかどうか、質的な問題というのをもっと見なきゃいかんのかなという、そういう発想で問題提起があるものですから。もう一つは、僕は、20人ぐらいというなら30人とか、そういうふうな規模は非常にやりやすいけれども、いわゆる講義型授業という、100人以上のような規模の中で、どのようにして主体型授業、あるいは双方向型授業を組み立てていくのかというふうなのは、もう一つ大きい問題だと思うのです。大授業は講義、一方通行でいいのだというふうに割り切ってしまうと別かもしれないけど、それはだめだと思いますからね。そういうスタンスからすると、今の学生主体型授業へのアプローチというのは、あの中での一つのグループ学習のやり方としてはよくわかるのですが、いろんなその他のアプローチの仕方が必要だろうと思うので、だから1、2、3、4とかいう、続く。

○小田 先生がおっしゃったことのまずはグループ学習じゃないかというところで、まずはその点、そのとおり、先生がおっしゃるとおりです、グループ学習は。そして、我々としては、これは、このビデオがアプローチという偉そうな名前がついているけども、何か、先にタイトルがあってこういうものをつけたものではなくて、多分に、何ですかね、困っている点の幾つかを抽出しているという形ですね、グループ学習の。講義ではない、講義スタイルではないところをやってきて、学生主体の中の一断面といいますか、そういうところで恐らく多くの先生たちが困ったり、見聞きして実際にやっていることをやったことです。そこあたりは先生がおっしゃるとおりであって、それ以上のことをこの学生主体型の中の概論にはしていないという形にしています。じゃあ、先生がおっしゃったような学生主体型授業の多人数とか何とかいう問題は、まさに今の実践事例の本にそこが出てきている。ハウツーものではないけれども、この中からやっぱりそのぐらいの感覚は持ってよという部分もあって、先生たち、いろんな人たちが、恐らく、先生がおっしゃるところの参考は、この本で私はかなりの部分カバーできるのだろうと思っています。学生主体型に対して講義型に対する問いかけやらも、そういうものはあって、第1、第2弾はこちらでも行くじゃないかというふうに思っています。

○木野 いえいえ、DVD版もね。

○小田 DVD版は。

○木野 それは、DVDはその1として、グループ学習の進

め方とか。

○小田 進め方ですね、ぐらいで。タイトルは決まっていますし、発注していますのでタイトル変わりませんが、先生のおっしゃるようにグループ学習ですよ。グループ学習のところにフォーカスをやって、恐らく、普通講義しかやってない人が困るところでは導入部分になるのではないかなとは思っています。先生のおっしゃるところでビデオをつくれるかどうかはあれですけども、できるならばそういう形で、反響大きかったら次のグループ学習じゃない違うタイプのものをまたと思います。

自由に、これから自由な討論でいきたいと思います。

○橋本 今の流れの続きで言いますと、あの部屋は恐らく50人が精いっぱいだと思いますね。

○小田 はい、そうです。

○橋本 それで、多人数、100人を多人数と見るかどうかという問題もありますけども、仮に100人というものを考えたときに、あれ以上の大きさの部屋で可動式の机というのはあるのですか。

○小田 あれ以上ではほとんどないでしょうね、あのぐらいのサイズでしょうね。

○橋本 というのは、うちが耐震改修にあわせて教室を少し改善しようというふうにやって、当初、そういうプランはなかったのだけでも、つまり、可動式の机入れようという話は前から出ていて、ただし、それはせいぜい50人ぐらいまでの部屋、それより大きな部屋というのは、基本的にやはり固定机でいくという方針だったものを、一つだけ、私、最大120人まで入る部屋を可動式にさせたのですよ、私はそこで授業やっていますけど。事務の発想というか、そこに加わった教員の発想でもそうなのだけでも、100人超えるとやはりそれは可動式ではちょっとまずいのではないかという、何かちょっとそういう発想がどうしても出てきて。

○小田 出てきますよね。

○橋本 それで、だから、それが精いっぱいだったんですね。私の感覚ではもうちょっと大きい部屋まで、150とか200まで可動式でできればしてほしかったなという感じがして。だから、それでいくと、やっぱりあの部屋ではこれが限界かなという感じはしますね。

○小田 はい。

それと、木野先生の質問と橋本先生の今の質問で答えなくてはいけないのは、我々は、学生主体型授業の多人数とか少人数やらをすべてカバーしようとする、これはプロジェクトじゃないのです。初めから少人数、30人ぐらいを想定したものであって、それで、山形大学の置かれている状況

でどうしようという形です。それじゃあ、30、少人数のところだから全部可動式のいい机・いすがあるかといったら、そうではない。という形で、まずは、大人数などの講義型の学生主体をどうするかという問題はひとまず棚上げにしているわけですが、このプロジェクトでは、そういうふうにご理解ください。

もう一つは、この部屋は何かといったら、一つだけが山形大学生が入ったら、これは山形大学じゃないという部屋なわけですよ、廊下を除いたのが山形大学だと。私はそれでいいと思ったのです。それは、今まで外国やらに行って、実験的な部屋がやっぱり必要なだろうと、まさに授業開発するための部屋として必要で、そのように設計しています。カラーとしたって、赤、黒、白を基調とした色にしてすごくシンボリックなものとしている。そういうふうな形で、普通はやはり大学も金がないので、普通の既存の部屋、少しずつよくなったらいいけれども、だけれども、あの部屋は授業開発としてかなり実験的な部屋として機能できればいいのだろうなと。

○橋本 それは汎用性という話と矛盾しませんか、つまり、そこは特別みたいな話になっちゃいますね。

○小田 はい。それは、矛盾はしてないと思っているのですよ。汎用性は授業を広げるところで、僕はずっと前から、このプロジェクト、お金が取れたのもあるけれども、いつかどこかからお金が取れたら、こういうふうな大学、このぐらいの大学の山形大学の規模だったら授業開発の部屋というものを欲しかった。

○橋本 シンボルとしてはそこ非常に大事な空間だと思いますし、ただ、例えば、30コマを同時開講するということになると、いわゆる、そこまではいかないけれども似たような部屋というのはたくさん必要ですよ。

○小田 必要ですよ、お金があれば。

○橋本 そこをどう、そうそう、お金があればという話なのですけど。だから、そういう点で言うと、例えば、そういう設備が限界になって汎用性がなかなかうまく広まっていけないという、そういう側面も何か感じられませんか。

○小田 30人で、あとは、机はあそこまですぐ動かさないけれども、それなりに机は動かせるようなところですから、ほかのところも、机・いすは。

○木野 あるのですか。

○小田 あります、はい。もっと狭苦しいですけども。

○木野 30人ぐらいの規模なら別にいいと思います。

○小田 そうです、そうです、ITやらがそろっているわけじゃ

ないですもん。

○木野 それは別として。

○小田 別としてグループ討論ができるような部屋にはなりません。

○木野 当面は、そこら辺は一つのスクリーンとプロジェクターを持ち込んだ形でやれば、両面という、ぜいたくなことを考えなければ。それはあるのではないですか、大学で十分かどうかはわからないけども。

○橋本 もう一つ、種類の違う話で、先ほどの報告の中で酒井さんの言葉だったと思いますけど、負荷は高いのだけど満足度も高いという、そういう話が出てきて、これはひっくり返すと、満足度は高いけども負荷が高い。逆に言うと同じことになる、言いかえただけなのですけどね。つまり、学生にとってやっぱり負荷が高いとなると敬遠してしまう、その授業が選択科目である場合にどうしても敬遠してしまう。例えば、そこになじんでいかない学生を、常に佐藤龍子さんみたいな人がうまくフォローできるかという、そうでないケースも十分あり得るし、そもそもそういう授業に近づいていかない、入っていかない、受講しないという、そういう学生が多数いると、そういったときにやはり広がりという上で抵抗がどうしても出てきて。僕なんかは意識するのは、負荷をできるだけ、それほど高めないようにするにはどうするかという、そういう観点をあえて入れるのですよ。だから、実際に負荷が高いというのが学生の方から声が出てきたときに、これはそういうものなのだという考え方ではなくて、じゃあ、ちょっとそれを低めるにはどうするかという発想、これも必要かなという感じはしますけども。

○酒井 そうですね、ちょっと私の言葉遣いというところもあるのかもしれないのですが、質問をとっていくときには、難易度はどうですかということと、それから、自分の時間外学習、自主的にどれぐらいやっていますかということを入れたりしたのですけれども、大変だったけれどもやってよかったというところですね、お答えになっているかちょっとわからないのですが、そこでやりがいがあったということに尽きると思うのですけれども、このバランスを下げるということに関してはちょっと、これはそういう意味ではちょうどいいバランスだったのかなと思っていますけれども。

○橋本 その20何人という受講生は、普通にいろんな科目を選択できる中からあえてその科目を選んだのが20何人、あるいは後期であれば13人、そういう数ですよ、これは少ないとは思いませんか。

○酒井 少ないかどうかですね。それは。

○橋本 モデルプロジェクトだから、パイロット授業だからという性格を抜きにして考えたときに、これからこういうものを

展開しようとしたときに、集まった学生が、もっと何か魅力を感じてたくさん集まってくれたらよかったのにな、という思いになるのか、それともならないのかという、そこが気になるのですけども。

○小田 前期にやって、この中にチラシがあるように学生たちにもチラシを配った、正直言って、自由選択で僕の研究だったら少ないなと思いましたよ。多分に30を切ろうと思って50ぐらい来て、それから人を30ぐらいに調整しようと思ったときに、27ぐらいだったのかな、前期来たのが、そうしたときにやっぱりちょっと予想外のところがありました。これは、多分に今まで過去の実績がないところもある。それと、シラバスの書き方が、きまじめに書いているところもあったりして、うちの大学の今までの過去の経験から言ったら、いろんな要素がやられてあるのだろうなという形で。だから、後期のものと10何人というのはそのようなものだろうなと、今までの実績から言って、事実、過去の経験から山形大学では、そう思います。ですから、来ないと、この授業どうしようもないしと思ったけども、来た人数でやるしかないし、30、これで人数が少ないなら少ないなりに後期は、おもしろいなと思う。10何人だったら、僕が個人でやるときにはちょっと少なくてダイナミズムが生まれないと思うのだけれども、我々がかなり加わっている部分も、授業に口出ししないけれども、僕1人でやる10数人よりもずっとダイナミズムが生まれているなというのはちょっとびっくりするところです。

○橋本 27人は途中でリタイアはしなかった、全員。

○小田 何人かしたよね。

○酒井 3人、質問紙に回答してくれた23人。つまり、4名がリタイアしています。

○小田 そして、今さっきの、きついけどということについて答えましょう。きついけどということとは、じゃあ、実際にどのぐらいきついかといたら、内容の難しさもあるかもしれないけど、それはそれほどでもないのであって、授業時間外の学習はどのぐらいしたかというアンケートもとっているのですよ。そうしたときに、後期でやりますと、11人中8人が週1、2時間、そして2人が週2時間から4時間、週1時間以内というやつが1人、全然ないのと週4時間以上はいない。こうしてみると、週1、2時間という単位の実質化にほとんどびつたりな時間な訳ですよ。としたときに、時間外学習をするよというのには、単位の実質化もこっちは頭に入れましたから、時間外学習を求めている訳。3人の先生に。そうしたときに山形大学の実態、ほとんどほかの授業ではそんなの宿題に出さないですから、特に1年生は。そうしたときにきつく相対的に感じるのだ。それは、山形大学と立命館大学でも違うだろうし、岡山大学でも違うだろうし、東京大学でも恐らく違うのだと思います、学生のその中に置かれている環境です。ですから、きついけども、端から見たらこれきついのかといったときには、普通から見た単位の実質化とかそういうものか

ら見たら、それほどでもない。

○橋本 これが正しい姿であってという。

○小田 正しいというか。

○木野 絶対きついです。立命館の平均値なんていいますのは、教養教育の講義型、これ演習だから、演習でしたかね、これは。

○小田 講義にしていますよ。我々は、単位は講義でやっています。

○木野 講義単位とすると、大体15分から30分が平均値ですからね、週当たり。だから、1時間、2時間以上というのが大部分というのは、明らかにハードはハードですよ。問題は、だけれども、別に単位の実質化ということに僕は重きを置かないけども、学生主体型授業というときの、学生双方型授業というときの、そのときのスタイルややり方ではなしに、僕はその前提として、学生が主体的に学習するという、それは何かというと、これは、学生が授業に出るだけではなしに自分で学ぶという、そこを引き出す授業というのが大事だと。それは、結果として授業外学習も当然あり得るという意味では同じ発想なのですけども、ただし、それは、学生がそういうふうにもみずから思いつくような形に誘導していく、それが教員の役割だと思うのです。押しつけるのじゃなしに学生みずからが、自分はそれが必要だと思うように持っていく。だから、そういう意味では、シラバスとか最初の段階で学生にはきつく見せない。けれど、その授業で何か得られそうだというふうな雰囲気や学生に与えることが大事だろうと、ほかとは違うなどという感じ。実際に授業をやっていく中で、教員はその学生に自分からやはり学習しなければならない、それがまたおもしろさにつながっていくのだと、ためになる授業をやるための必要条件なのだということを、15回の中で学生がみずから獲得したり、みずから学習スタイルを獲得したりしていく、そういうのを教員がその15回でやれるかどうかという勝負だと思いますね、主体型授業というのは。だから結果として、このやられたものと同じような形が目標だと思いますね。僕の授業だと、大体同じような形でね。最初の段階では、橋本先生が言われるように、できるだけ、ただ、橋本先生は下げるという、ちょっとニュアンスが違うところがあるのだけれども、僕はレベルを下げるのではないけども、学生が入ってきやすいような形に持っていくというのが大事だと。入ってきた学生を育てていく、そのためのそういう主体型授業というのはどうなのかという、その工夫の兼ね合いみたいなものだと思うのですけども。

そういう意味では、橋本先生が言われたけれども、いろんな条件があるのでしょうか、この一クラスをやってみるのが、少しぐらい最初設定された30人とか、40人とか何倍かぐらいに上回るぐらいの応募者があって、というふうな形が望ましかったですよ、テスト的な授業としては。だから、そういう意味では、ある意味、学生はちょっと引いたのでは

ないですかね、これはかなりきついと。

○小田 実際はそうではないと思う、引いてはいない。

○木野 引いてはいない。

○小田 はっきり言えば、引いた雰囲気は全然ないわけですよ。授業やった方からみたら。

○木野 いや、来た学生はいいとしてね。

○小田 来た学生じゃなくて履修を見ると。すごい科目数ありますから、引くとか引かないとかの問題以外に、それに目を通すかというのがありますよ。

○橋本 そのシラバスは、これ、何かで見られます。

○杉原 後ろにシラバスはあるのです。

○橋本 実際のシラバスもこんな感じ。

○小田 そうですね、同じですよ。

○杉原 ただ、ここにあと、参考文献とかというのは書いてあって、その参考文献がちょっとずらっと書いてあるところは、おっと思うかもしれないですけど。僕なんかは授業やっていると、思うのは。

○橋本 ほかの科目も大体ぱっと見たらこんな感じなのですか、それとも、ぱっと見明らかに文字数が少ないとか。

○杉原 文字数は。

○小田 ああ、少ないのはありますね。それはありますよ、このぐらい書けたら一番いいですけどね。

○中島 教養セミナーの人数というか、教養セミナーの人数としてはそんなに何か極端に、何と、少ないとか、なんかではないような、平均的な感じはしますけどね。

○杉原 この金曜日のこのコマの時間というのは、前期は、まず、すごい講義式の300人ぐらいが、ぱっと来て大人気で抽選しないとけない先生が、1限もやってはって、4限も、このコマもやっているという大人気授業がまずあるのです。もう一つは、学長がリーダーシップをとってしている授業も、これも100人から200人弱ぐらい受ける授業があって、結構、人気授業がこのコマに集中している。

○木野 同じコマに。

○杉原 同じというのはあるのですよ。

○木野 ああ、そういうことか。

○杉原 あと、やっぱり学生たちが履修するときには、先輩らにどの授業がいいのとかって聞くとときに、前例がないというのはやっぱり大きいと思いますね。

○木野 それはありますね。

○木野 最初はね。

○中島 前例がないね。

○杉原 恐らくこのぐらいの人数になるだろうなと思って予想どおりだったので、思うのですよね。

○林 今後、この授業を、例えばことしの4月から、どんなふうにかこの体験を学生とか、先生、学内向けに、あるいは学外向けにはどんな形でやる、経験を広げていく計画なのか。

○杉原 来年度からは、この未来学というこのオムニバス授業はしないのですが、各先生、3人担当しましたから、それぞれが自分の授業を15回やるやつでこの経験を生かしていくというのでまず広めていって、あとは、学内ではFDを通してワークショップやったり、学習セミナーを通してやったりとか、いろんなところで学内あるいは学外の先生もいらっやいますから、学外にも広めていくという形。

○林 きょうお話しされたような感じで、こんなふうにしてやりましたというふうな感じで。

○杉原 そうですね、それもありますし、あとは、公開授業もしていますから授業を見に来ていただくということもありますし、あとは。

○林 それぞれの先生がやっているところを。

○杉原 そうですね。冊子をつくれますので、その冊子を全国にもお配りしますし、いろんなメディアを通じて、いろんな形を通して展開をしていくということになりますね。

○橋本 これの計画だと、3期目、3年目は60コマ用意するというふうになっていますね。

○小田 70コマで。

○橋本 70コマ。

○林 そういう意味では、何か、まず、学内向けで言えば、この開発授業の魅力とか、意義とか、そこから学べるものを、先生も学生も知ることができるような、何か解説じゃないですけども、そういうようなこととセットとか、それ

はどうなのがいいかわかりませんが、文章よりは何か映像とかそういうものもいいかもしれないのですが、そういう何か魅力をつけるというのですかね、わかるように、そういうような工夫があるといいなという感じはちょっとするのですが、言っていることわかりますかね。

○杉原 わかっています。

○林 例えば、その引き出してこられるヒントみたいなものは、やはり授業の検討会みたいなところが自然発生的にどんどん来たというのは、あれは、やっぱり授業を組み立てたり、やっていること自体に関心があったりするわけで、自分たちがやったことについての意味をやっているわけだから、何かああいうようなあたりのことを、何かヒントになるのではないかなという気はします。

一つは、この授業でも、これから3人の先生方がやられるときにも、たとえば、半期もので言えば、そのうち1回ぐらいは検討会というものに出るみたいなことが望ましいみたいにしていけば、必ず、授業に参加しているだけじゃなくて授業をつくるというか、そういう感じで、メタ認知じゃないですけども、そういう感じの授業を開発するという視点で見るとなると、そうすると、それは、その15回のうちに1回でもそういう経験を持てば、授業ってこうやってつくっていくのだというようなこともわかるでしょうし、それを自分で企画型をやっていたときに、授業を企画したなら必ずその反省会をやって、そこに出て次の代にそれを伝えていくみたいなことを、それが一つの歯車になっていったので、そういうふうなことを3人の先生が進められるときに、そういうふうにしてみたらいい。本当は、終わってからどうだったとかいう会議に出るだけではなくて、今度はつくる段階と一緒に参加できれば一番いいので、きょうの授業はこういう感じのことをねらいにしますみたいな話が例えばあって、それで検討会に参加するとか、そういう何か検討会に人が、学生がふえてきたというようなところが何か一つのヒントにならないかな。だから、今後、この形態を発表するときに、そういうようなことをもう一ひねりじゃないですけど、もう一つ何かセットにつけて、開発型の授業というのですかね、今、そういう授業の開発に学生が参加していくみたいなことをセットで広めていくというのですかね、そのようなことを何かちょっとした方がいいかなというような感じはしますけれども。具体的にどういうふうにするかはいはあれなのですが。

○木野 それは、検討会というのはどういふようなことがその中で話題になり、それが次のこれから後やることの中に、どんな形でヒントが出てきたのか、1個か2個具体的な事例を紹介してください。結構、映像見ると半々ぐらい、人数、教員と学生といましたよね。

○小田 うん、そうですね。

実際には、その模様というものは、毎回、ホームページに掲載しているのですよ、記録を撮って、エッセンスをね。その中からどういふのがあかな、代表的な、二つぐらいだったら

ね、こうやって言われると。

○酒井 学外参観者の、先日、東京電気大学から参観にいらっしゃったときに、学生さんが残ってくださったときに、1年生だとは思えないというふうに言われてまして、という話は一つのエピソードかなということ。

○小田 それは、評価としてはすごく高いものやね。

○酒井 あともう一つは、検討会の中で話し合われた内容を、後期の授業になりますが、グループの中でどういふふうに進めていくかということ、学生が自分たちで話し始めたときに、この間の検討会のときにこの話題が出たのだけでも、それを参考に調べてきて、そして、きょうはこういう感じみたいにマネジメントをして、みんな役割分割してやってみようかというかと話で流れていったということは、エピソードとしては二つ挙げられるのかな。

○林 何かそのあたりを、その体験を広めるときにちょっと、かなりそういうふうにしてやっていくのだというふうにして、一回一回の検討会に参加したら、それが即次の授業から展開されていくというようにしていけば、学生にとってはおもしろいというか、授業を自分たちで開発できるみたいな感じを、なるかもしれないということですけども。

ちょっと離れますけれども、そういう意味で、パイロット授業というふうなことでちょっとこの中身を見る前に思っていたのは、もう少しこういう学生主体の授業を開発しようと思ったときに、ストレートにそのこと自体をもう少し解説したり、説明したりする、それが体験できるような授業というか、そういうようなものをもう少し想定したのですが、イメージとして、だから、その部分を何かもう少し補強したらどうか、など。主体型の授業を開発していくというのはこういうことだと、ポイントはこういうことかというようなことを学生も先生も理解して、そして、願わくは何かその仕組みとして、そういう検討会とか、企画会とか、企画の段階でも、それぞれの3人の先生が、経験のある者に来てもらうとか、ことし参加したやつを見てもらう、経験がない人でも履修しようと思う人は、最初のプランニングの段階で、大体、構想は、先生はこうだと相談できるみたいな、そういう風な感じのものと、終わってからの反省会に参加できて、それがだんだん、そのまま15回の間でどんどん進化していくみたいな、そういう仕組みをセットにして広げるといいますかね。そういうこともできてればなという感じはしますけれども。

多分70は、70じゃなくても、幾つか新しくできた授業を、このパイロット授業によって、あるいはその影響でできたみたいなことがわかるようにした方がいいので、そうすると、それはこれと、これというようなことを絞り込まれると思うのですが、その中にさっきの何か少し学生が参加してできるような企画、運営に参加できるような授業スタイルを工夫していくみたいなことが一つ入っていれば、そういうふうにしてDNAがふえていくというか、遺伝子がこう、その認定になるかなという。

○橋本 結局、林先生が言われるのは、検討会をどうフィードバックしていくかという、そういう話だと思うんですけど。例えば林先生が展開されていた授業だったら、その授業を受講した学生が、いわば、アドバイザー的、あるいはアシスタント的に次の年度そこに加わっていくという、そういう形がとられていましたけど、その点から言うと、この授業がずっと継続されていくものではなくて、むしろ広まっていくものというイメージでとらえたときに、検討会に出たものをどう伝達として伝えるかという話も重要なんだけど、それ以上に、恐らく理想的には、そういう授業に近いものをだれか学内の先生が展開しようとしたときに、この授業の受講者を、いわば、そのコマに加わってもらうのは、多分、学生の都合からいって無理なのですよ。ところが、例えば、シラバスをつくるのか、授業構想を練るとかという段階でアドバイザー的に研究室に来てもらって、あのときどうだったとか、検討会に参加していたらそのときに何か言ったかもしれないけど、でもそれはそれとして、もう1回新しい授業をつくるという段階で手助けをする、何かそういうダイナミックさというのがあった方が、これがいかにもパイロット授業として学内に広がっていく、そういうのが見えてくるかなというイメージは、私は持ちますけど、そういう要素があればいいということですね。

○林 そうですね、そういうことですね。

○小田 言われんとすることはよくわかります、現実にとどこまでできるかという。現実にとできるのかといたらまた別問題だけど、ぱっとできるとしたら、例えば、今の学生たちの中に、現実的に酒井さんは加わってないし、まだ教員になってのキャリアがなくて、そういうところの設計に、今の学生は、酒井さんは、知っているし、やりやすいのだろうなど。どういう展開があるのかということもこっち側もわかりやすい。学生をぼんと知らない教員に預けてずたずたにされたり、また、学生何言ったりするかわからないのだから、そういうところでは、今のものでいって、具体化するところでは僕はそう思いましたよ。そういうとこでは、時間が余りなくてシラバス書かなくちゃいけない時期がもう1週間か2週間に来るわけです、例年よりすごく遅い、はっきり言えば、山形大学だと、1月には本当は例年だと終わっているのです、シラバスは、何か。

○橋本 そう、ちょっと遅いですね。

○小田 うん、すごく遅いのですよ、ちょっと大学で。だから、それは、今言ったことがまさに反映できると思いますかね、このチャンスを逃したらまた1年後なのだから。酒井さんも考えてみて、わかる、今の言っていることは。

○酒井 はい。

○小田 だけど、学生はいなくなっているかもしれないけどね。1人、2人ぐらいでいいのだから、今みたいところで自分の考えた案を、案をやらないと初めから考えると大変なこ

とになるのだから、シラバスこう書いたらいいよというところでやれば。

○木野 シラバスへの意見を求めるぐらいはとりあえずできる。

○小田 意見をちょっと、授業設計のときに、のところは今のところ。

○木野 だけど、この来年度計画というのは、これを見ればいいのですか申請書の13ページ、そのほかにあるのかな。

○小田 いえ、特にないですね。

○木野 ということは、22年でするのは、30コマ最高。

○小田 前期はですね。

○木野 もう今はそう段取りができていますか。

○小田 70コマで、いや、一時すごく不安だったんですけども、70コマが出てきたと。ですから、今までの、過去の実績で大体70コマが出ていましたから、そういうところに乗ってこの先生で行くって。

○木野 このときのそれ持っていただく先生何人か知らないけども、70コマか、そういうとこに。

○小田 はい、70コマ。

○木野 いくとすれば、その先生方にあれをどうなっているのですか。

○小田 直接はできなくて、だから、今までのパイロット授業を見に来てくれたり、我々のこういうものを出してくれたりしているとか、シンポジウムやらとかいうところですけども、では、その人たちが授業出すことをわかっていませんから。はっきり言えば、初めにわかってなかった、急に何か調整して出してくるような形で。だから、ビデオとか、何とかとか、またこの本、我々直接、出版社を介しますからあれですけども、そういうところでの浸透なのだろうというふうに見ています。

○木野 シラバス書く段階、授業で、今年度、4月からつくる段階の、そのときの前の事前にそういうお願いするときの趣旨説明とかというふうなものはどうなっていますか。

○小田 そこらにはやっぱり介入できませんでしたね。急にというと。

○木野 教養セミナーを始めますので提供してくださいということだけですか。

○小田 科目があるから出してくださいということだけ。

○木野 ということだけですか。

○橋本 それで広まっているというのは。

○木野 主体型授業とかいうふうな話もそこにはキーワード入ってないのですか。

○小田 学内のもでは入っていません。一つ新しい改革は、支持者の副学長から聞いた方がいいのですが、スタートアップセミナーというのは、教養の前期に必修科目として入れてあります。話す、聞く、書くという形のものジェネリック・スキルのものだけが共通テキストみたいなものができて、それでやりなさいという形のもの新しいところで、そこあたりにも一部利用されればいいという形で、目的とするところの社会人基礎力とか学生の主体性というところは、これを出したときと大学の状況が随分変わってきたので、だけど、総合的にそういうところに行き着いたら、うちとしてはいいのだろうなという形で見ていて、パイロット授業をやったときに、正直に言って、パイロット授業を見ると、こっちが思っている以上に学生の伸びというのは高い。それは、我々がこれだけの人数が出ていますから、そういうところのケアは大きくて。ですから、初めの当初の、木野先生がおっしゃるようにシステムチックだったら60コマ開講する前の事前指導、教員に対する事前指導、そういうところはなくちゃいけないのだろうけども、そういうふうな教育改革は違うところからぱっと起こってどうなるかわからない、確定要素のもとでは、そういう形のシステムチックでは入らなかった。けども、我々がセットしたもので間接的にあり得ているのだろうと思っっています。

○木野 立命では教養ゼミナールを始めたのはまだ2年なのですが、教養で、でも講義しか今はなくて。

○小田 そうなのですか。

○木野 教養ゼミナールというのを去年やって、ことしで2年目なのですけれども、そのときの教養ゼミナールの目的とか、趣旨説明とかいうのは、それは一応それなりに伝えた上で応募してもらって。だけど、最初は一応何でもありという形でやっていますからね。そのうちに何でもあってやったけどもやりながら、一セメスター進めば、最初の一セメスターでやった人たちの紹介とか報告を聞きながら、後期セメスターの人たちがそれを参考にして、シラバスは書いてるけども。実際に生かすとか、二セメスターを1年間過ぎたら、その年度の担当者とか次年度の担当者とか、両方合同で反省会、検討会、そして来年度の心積もりみたいなのを、そういう形で、これシステムチックにリンクをつくりつつあるんですけどね。だから、それ、簡単に皆同じレベルでレベルアップしないけども、徐々にそういう教養ゼミナールというのが、どういう特徴を持って、何を目的として、あるいは参考になるよ

うな事例というのをそれぞれ紹介し合いながら、困っていることは何なのかということ、そういう何というかな、共有感みたいなもの、せっかくパイロット授業をやったから、パイロット授業からそちらへ生かすやり方、特には作れないのですかね。

○小田 そのこのところで言うと、まずは、教養セミナーというものが平成8年、まず大綱化のときに、まさに国がそういう少人数というところへ言ってきたところに教養セミナーというのが山形大学にできたのです。そのときに一番初めに考えたのです、山形大学は。そうしたときに、少人数教育というのは一体何人だといったときに、あのとき、文部省的なもの20人ですよ。大体、だけども国立大でカバーできないから、山形大学も30人とかそういうところでやっていた。だけども、人数制限を加えなかった、教養セミナーできたのです。じゃあ、教養セミナーとは何かというところは、きちんと教養便覧か何かに載っているのです。何かといたら、こっち側も文章に絡んでいるわけで、少人数特性を生かす授業だとか定義しないわけです。でないと、専門の外書講読やら以外に想定できなかったからです。じゃあ、そのときに人数来て100人ぐらいの教養セミナーもありました、ずっとある。今でもあるかもしれないけども、そういうむちゃくちゃな数のものがあつた。では、その中から、例えば、私が「自分をつくる」という授業をやりながら、新しい実験的な授業をやりながら公開授業をしたときにかなりの人が見に来るわけです。そして、また、FD合宿セミナーで、学生主体型のまさにグループワークして自分たちでやっていくというところを展開して、実際にそれがどんどん、副学長にも専門の授業を取り入れたのです、昔ね。そういう形で、学内にいろんなディスカッションとか、発表とか、ディベートという授業が広がっていくのですね。それは、我々としても「あつと驚く」ようなチップスやらに工夫を載せてくるからですね。そういうような、何ですかね、こうしなくちゃいけないという形ではないけれども、あらゆる学内の今さっきのワークショップやらをやってきた、そういうところの広がりというものは、かなり展開できたと思います。だけれど、そういったところの、最後のまとめとして学生主体型のまだ毛嫌いしている人たちに対してのところをやるうと思っただけでも、ちょっと難しいところが現実にはある。

もう一つ言わせてもらおうと、まさに教養セミナーというのが学部で何コマ出さないよというのはないのですね。基本的としてはずっと60コマというのがあつたのです、昔は、ことしの改革別ですよ。60コマというのを出さないよといったときに、いろんなボランティアの人たちが出してくれるから73コマで増えてきた、大学として。そして、もう一つのベクトルとしては、やっぱり講義するよりも少人数の方が楽だということでも増えていっている。ことしは、スタートアップセミナーとかほかの科目がふえたために教養セミナーってほとんど出ないだろうと言われて。けれど、こっち側があるから、私の友人とかいろんな人がやってくれて、途中40コマだって言ったけども、最後にふたあげたらびっくりしたのは70コマですよ。しかし、そのあたりにどう攻めていくかというところは、学内の置か

れた状況の厳しさがあいながら、我々としては、今さっきのビデオとか、それ恐らく本だってホームページだってやっている、確かにリレーでやっていくというのは難しいけれども、置かれている状況は難しいけれども、一つには、今までやってきた積み重ねというものは確実に山形大学の中では生きてきている、最後のところまではなかなか難しいけれども、このビデオに載って3,000何百部印刷しましたからね、学内の全教員、各大学に配る、そういうところのじんわりした浸透といえますかね。そういうところが今打てる手であって、この段になってだれが出すかもわからなかった教養セミナーを、組織立って木野先生が言うようにできなかったというのが正直なところですよ。

○木野 学内のことがあるからわかります、大体、多分そういう背景があると。

○中島 済みません、その辺になると何かこちらの部分がかかなりあるような気もするのですけれども、これを出したときからまた教養教育とかなんかも全部かなりスタンスが変わってくる形になってきましたので、そうは言ってもこのことは非常に大事なことで、何か命令系統的にこれをばっとやりなさいというような形に今なっていないものですから、ただ、このことはぜひ大学としても広めていきたいわけですので、徐々に徐々に今のところは勉強してもらいながら、参加してもらいながら、という形で広げていくという形になっていくかなというふうには思っているのですけれども。

○林 それをこれに書いてあった基盤教育というのにな変わっていくという、そういう意味ですか。

○中島 はい。基盤教育という形に、教養教育自体が今度の22年4月から変わるということなのですね。その中にどういう形でこういうことを取り入れていくかとか。

○小田 22年、ことしですかね。

○中島 ことしの4月から変わっていきますので、今のところシラバスがそれでまた遅れているという部分もあるわけですね、対応が、ですね。本来は1月までにシラバスは終わっているのですけれども、今はまだばたばたで、新しいカリキュラムをつくったりしていますので、そういう中での話なのですね。

○小田 ちょっと申しわけない、幾つか言い足りません。時間もありますから、当初、5時ぐらいに終わろうとしていたのですが、山田先生の意見を聞いて1回閉会しましょう。どう見てもちょっと電車やらの先生の都合も一緒に、橋本先生も帰らなきゃいけないから。やっとな熱を帯びてきている、この雪の中を、大雪の中を来てもらったのに申しわけないのだけれども。

○山田 済みません、あんまり時間がないので、いろいろ思うところはあったのですが、手短に。

基本的には、この実践自体、この授業自体の質というのは非常に高いということは、もう疑う余地はないと思うのですが、やっぱり何度も出てきている汎用性というところで、汎用性と言ったって一重にいろんな時限の汎用性があるので、それがどんなレベルの汎用性なのかということ、橋本先生も強調されている、確かに人数の問題というのはあるのですけれども、これは少人数だから少人数以外のものに転用できないという答え方は、僕はしない、そうするべきではないのではないかなという気はするのです。例えば、橋本先生とかだっただけで恐らく大人数でも同じようなことをやられて。つまり、汎用性といったときに、例えば50人だったらこれぐらいの授業の中でやっているこの部分は転化できる、大人数だったらその20%かもしれないけどこれぐらいは大人数にも転化できるとか、あるいは、これはゼミの形式だけでも、それが例えば教養教育だったらこういう形で転化できる、あるいは、専門教育だったらこういうことがあり得るのではないかなというように、パイロットスタディーですから、あくまでパイロットスタディーの徹底的な検証・検討をやはり期待したいということですね。それを、全学に展開していく、あるいは共通教育、教養教育の中に組み込んでいくというロジックというのは、FDの論理とは別の論理が働くのでなかなか難しいと思うのですが、でも、少なくともそこに対しても一定のこういう形でいきたいというところは示していただきたいのは、僕ら自身が、僕のところでそうなんです、FDと教養教育マネジメントと両方携わっている者としては、やっぱりそこをどうつなげ、もともと論理が別のものをどうつなげるかというところで、あるいはつながらないのかということも含めて議論したいところなので、今回のあえてこのGPで、大体、組織的にという、たくさんの科目からいきなり70科目がスタートしてやるGPとかが多いのですが、あえてこの一つの授業から出発するという取り組み自体がおもしろい取り組みだったと思うのだけれども、今の話だと、一つの取り組みを練り上げたところで切れてしまうのではないかなという懸念があるので、少なくともインプリケーションとしては、僕らとしては、やっぱりここから、僕らの大学だったら、僕らが転化できるようなものというものは何なのかということ、さっきの授業公開、検討会とセットにするというその方法論も含めて、抽出できるものはいろんなものを抽出して、その可能性は示していただきたいという期待があるという。だから、あれもこれもと言ってしまったら切りがないですけど、少なくともそれぐらいのエッセンスがこの授業の中に入っているはずなので、それを外から見たらその授業も見えないので、なかなか見てみたらわかるよというふうにはいかないので、やっぱり外に対しては、ある程度、定式化という、またそれは言葉だけでひとり歩きしちゃう可能性もあるのですが、でも、こういうことを注意すれば、例えば、あなたのこういう理系の分野の専門教育の部分だったらこういうふうなことが考えられるのではないですかということまで提案してもらえれば、60科目に全部に浸透はしなくても、この一つに徹底的にこだわったことのGPの意味というのは出てくるのではないかなと。というふうにと考えると、やはり授業をつくるときの、例えばシラバスの形であったりとか、シラバスの中に盛り込むべき達成目標の問題

であったりとか、成績評価の問題であったりとか、授業外学習の方法であったりとか、今、授業をつくるというときにいろんな要素があるので、その部分に対しての検証、授業効果の測定に関しても満足度というところが走っているのもう少し多面的な検証ができないだろうか。そういう検証のあり方も含めて、一定検討して成果を出してもらえば、例えば、学生主体型のような授業というのは評価が難しいわけですね、みんな苦勞するわけです。そういうときにもこういう評価のあり方、もちろんいろいろ山形大学のFDのポリシーというものがあるので必ずしもそれは当たらないかもしれないのですが、我々でも、例えば、じゃあ、ルーブリックみたいなものを開発してみようとか、そんな話が出てきますので、例えばこういう授業だったらこういうふうな視点で見れば適正な評価ができますよとか、何かそういうあたりも含めて、この中でがっつりこの授業を見るのだというふうになっていってもらえると、最適解が見えなくても僕らとしては参考になる部分というのが多いのではなかろうかということで、汎用可能程度、次元、水準、そういうあたりを留意しながら、このレベルを確認した、このレベルを確認したという形で来年度進められるとありがたいかなというか、期待、自分とこでやればという話なのですが、やるのですが、そういう感じですかね、ちょっといろいろあるのですが、とりあえずはそんな感じでした。

○小田 どうもありがとうございます。

いろいろと参考になってありがたいのですよね。何か期待されている、期待されてなかったら終わりだろうなども、聞いていたらそう思っていて。これは、僕なんかだったら、来年もう1年で終わったときに、総括の形で出せばいいなというふうに思ったのですよ。あとは論文を出せばいいだろうなとは思っていたけども、もうちょっとまとめ方があるのかなと、もう少しボリュームを持たせた形でやらなくちゃいけないのかなというところを思ってきました。それは、携わった人間の5人ぐらいで、授業した3人と酒井さんやら呼ばれて、それぞれの立場からちょっとやらなくちゃいけないかなというところを私は感じさせてもらいましたし、時間もいろいろと限られていますけども、限られた時間の中で、我々だけではなくて皆さんの御協力を仰ぎながらまたやっていければと思います。どういう形になるかわかりませんが、また御協力のほどをよろしく願います。

○橋本 一つだけいいですか、短く。

もし可能であれば、今、幸か不幸かシラバスをつくっているの、というかぎりぎりの段階ですから、本当にこれ可能であればということなのですが、この70コマ開講されるその先生に一つだけお願いをして、あるいは依頼をして、学生主体型という言葉をとにかく入れてほしいと、どんな形でもいいからそのキーワードを一つだけ入れてほしい。そうしないとDVDを配ることの意味が半減してしまう。どうせ学生主体型になるのだから、そういえば何か配られたなという、あれでも見るかというような、そういうような話になりますし、それから、だから、それを徹底しようというのではなくて、それ

を、要するに出したということだけでも、それをポーズとしては学生主体型で進めているのだということの証拠として残りますし、あるいは方向性がそこから見えてくるかなという感じがします。可能であればぜひ御検討いただければと、ぎりぎり間に合うかどうかわかんないですけど。

○木野 教養セミナーが学生主体型というキーワードとしているからインタラクティブにされたらいいのですよね。

○中島 そうなのです、そこを今から浸透させているところだろうと思うのですよね、こういうのを基本にして、ですね、まだ。

○木野 まだまだかなという感じがしますよね。

○小田 そうそう、彼はポリティカルなのですよ、要はね。

○木野 中身を知っているから苦しいことを言うから。

○林 いや、橋本先生はそうおっしゃったのですが、あえて言えば書けないにしても、1年生にしてみたら、総合的な学習とのイメージでつなげるという手があると思うのですよね。

○小田 まあそうでしょうね。

○林 だから、それを一言入れると、やっぱり、ああ、そうかという感じになっていくので。

○小田 学生にはそうだけでも教員は総合的な学習全然知りませんからね。

○林 ああ、そうだから。

○小田 そういうところにギャップがあるのだろうけれど、橋本先生の言うポリティカルなところは、恐らく、僕は委員会に関与してないから、それをぼっと入れて考えてくださいというのを、まさにそこらが中島先生の領分です。

○橋本 何人かだけでもそれに呼応して入ってくるとちょっと違うかなという感じがしますね。

○林 シラバスの説明の中に、統一した説明の中に総合的な学習とつながりをちょっと書いておいてあげれば、学生もこの種のものはそこにつながっているということになるから、一人一人の先生が使わなくても、それは学生からすると何だろうということがわかるかもしれないですね。

○中島 ふえているような様子がわかればいいのかもわかりませんね。

○林 そうですね。

○木野 教養セミナーの、例えば科目概要みたいなものがあるのですか。科目ごとに、全体としての目標、合意した内容のもとに、個別科目がその中で幾つも開講されたときに科目概要とのつながりが。

○中島 教養セミナーの概要、全体のあれですね。

○木野 教養セミナーの中でいろんな70コマ、我々でも60コマありますけど、教養セミナーというのはどういうものかという科目概要が400字ぐらいで書かれているわけですよ。その中に50、60というそれぞれの個別科目があるわけですが、それとはつながっているかどうかという形でシラバスチェックをやりますが、

○中島 そういうつくりになってないのですね、分野ごとの中にそれぞれに教養セミナーが加わりますので、それぞれの分野ごとの説明はあるのですけれども、セミナーの部分が、その辺は、つながりがちょっと弱い。

○木野 難しそうですね、ちょっと今すぐには。

○中島 なんとか考えたりしていますけども。

○小田 木野先生がおっしゃるような形の、要は立命館大学のシステマチックさ、それは、昔からかどうかは別ですよ。今ごろの観点別をいれたり、シラバスやらのそういうところというところでは、確実に遅れていると思います。何かと言ったら、教養教育、2行ぐらい書いているぐらいの字数です、そういうところでおくれている。けれども、平成8年の改革から教養セミナーをやって、わけのわからない段階からやっぱりこちらでFDやらやってきたりしたところの浸透度というものは、組織的には、恐らく形式主義的じゃないところはかなりのものを行っていると思います。そういうところでは、今度はポリティカルな部分でやっぱり最後の一押しというところ、性格というときの、タイミング的には今なのだろうと思います。そういったときにこの強さが出てくるのだろうと。だから、かなりのいいタイミングでは成長してきていると思いますよね。

○小田 いろいろとありますが、話が途中で、この大雪の中を来た割には時間がとれなくて本当に申しわけないと思っているのですよ、本当に。この短い時間で話すことは、本当はもっと時間を入れて2倍、3倍話したいなと話を聞いてすごく思うのですけども、一つには、次の木野先生とうちの杉原やらの話する大学コンソーシアム京都のやつで話を深めていってもらえればこちらのエクスキューズになるかなと、大変申しわけないけども、そっち側にバトンタッチをと思っております。

それから、事は山形大学だけの問題じゃなくて日本全体の問題だろうと思うし、大学に開設してもらったって、アクティブラーニングというのは、どこの大学のセンターもアクティブラーニングを大きな一つのものとしてとらえていますから。

そういう形ではみんな集まってこうやってシンポジウムで御協力いただいたり、本を出すのに御協力していただいたりしていますので、そういうところから、これからもぜひとも御協力を仰ぎながら一緒にやっていければ、GPの学内のポリティカルなプランを橋本先生が言っているのはすごく正しいので、そういうところのポリティカルな部分の解消もありますけれども、それ以外の部分へも発展していければと思っています。そこらの御協力をまたお願いできればと思っています。短い時間でしたけども、非常に僕個人としてはすごく刺激的で、こちらが考えているよりも、ちょっと膨らませなきゃいけないなと思いました。

○中島 どうもありがとうございました。こちらも体制が変わったりしていろいろ問題も抱えている部分があるのですけれども、きょう御意見いただきましたことも参考にさせていただきながらまた進めさせていただきたいと思います。本当にきょうはありがとうございました。

むすびに変えて

本年度は、平成20年度質の高い大学教育推進プログラム採択事業の「学生主体型授業開発共有化FDプロジェクト」の第二期に該当する。昨年度に引き続き行われた国内外の優れた学生主体型授業の実地調査を踏まえ、パイロット授業『未来学へのアプローチⅠ・Ⅱ』を開発、前期・後期と通年教養セミナーとして開講した。ここでは、リレー形式の授業によって教師もグループワークや授業内容や授業方法を共有、改善を試みた。また、授業検討会には、学内外からの参加者があり、そこに受講学生が積極的に関わることで、学生自らが、授業をコーディネートする主体となっていく傾向が見られた。

また、これと同時に、昨年引き続き、国内への実地調査も行った。そして、他大学の取り組みを参照するだけでなく、相互研鑽の理念に基づいて、授業開発の知見を共有し、検討していく機会を設けている。山形大学教養教育ワークショップ第2分科会「学生主体型授業の創造」や、山形大学FDシンポジウム「学生主体型授業の探究」などを通じて、山形大学以外の大学で試みられている実践事例と知見を共有した。学生主体型授業を展開するための方法論、課題点や問題点を相互に共有し、北は北海道から南は九州まで、広範に情報発信してきた。

今後は、全学的な実施段階へ入ることになる。様々な、分野からの個性豊かな学生主体型授業が開発され、共有化されることが望まれる。